

159.8-N77ナ



1598
77

×
複写



始



159.8

77

159.8-N77ㄅ



1200500727190

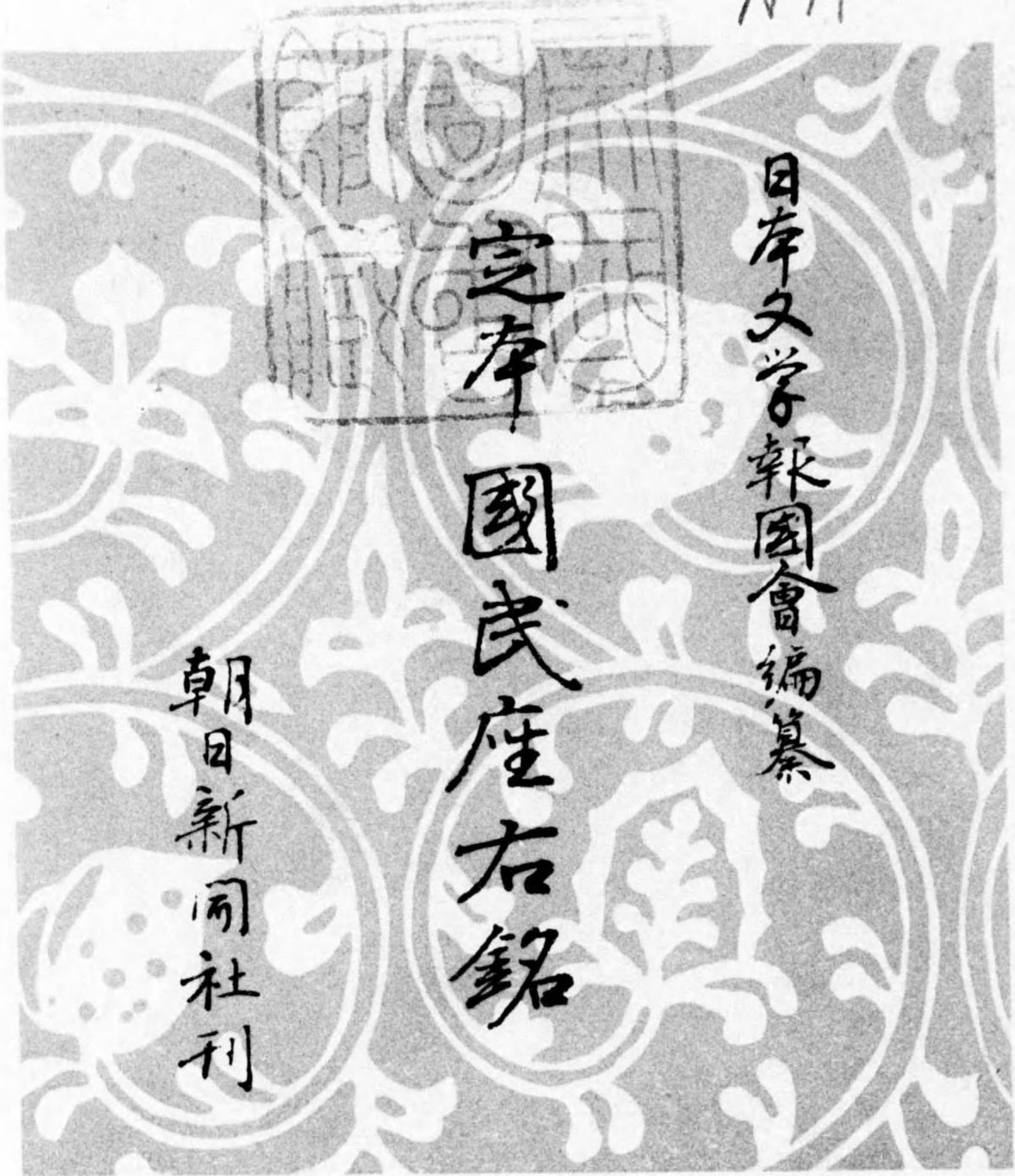
文學報國會編

本國民座右銘

×
複写

朝日新聞社刊

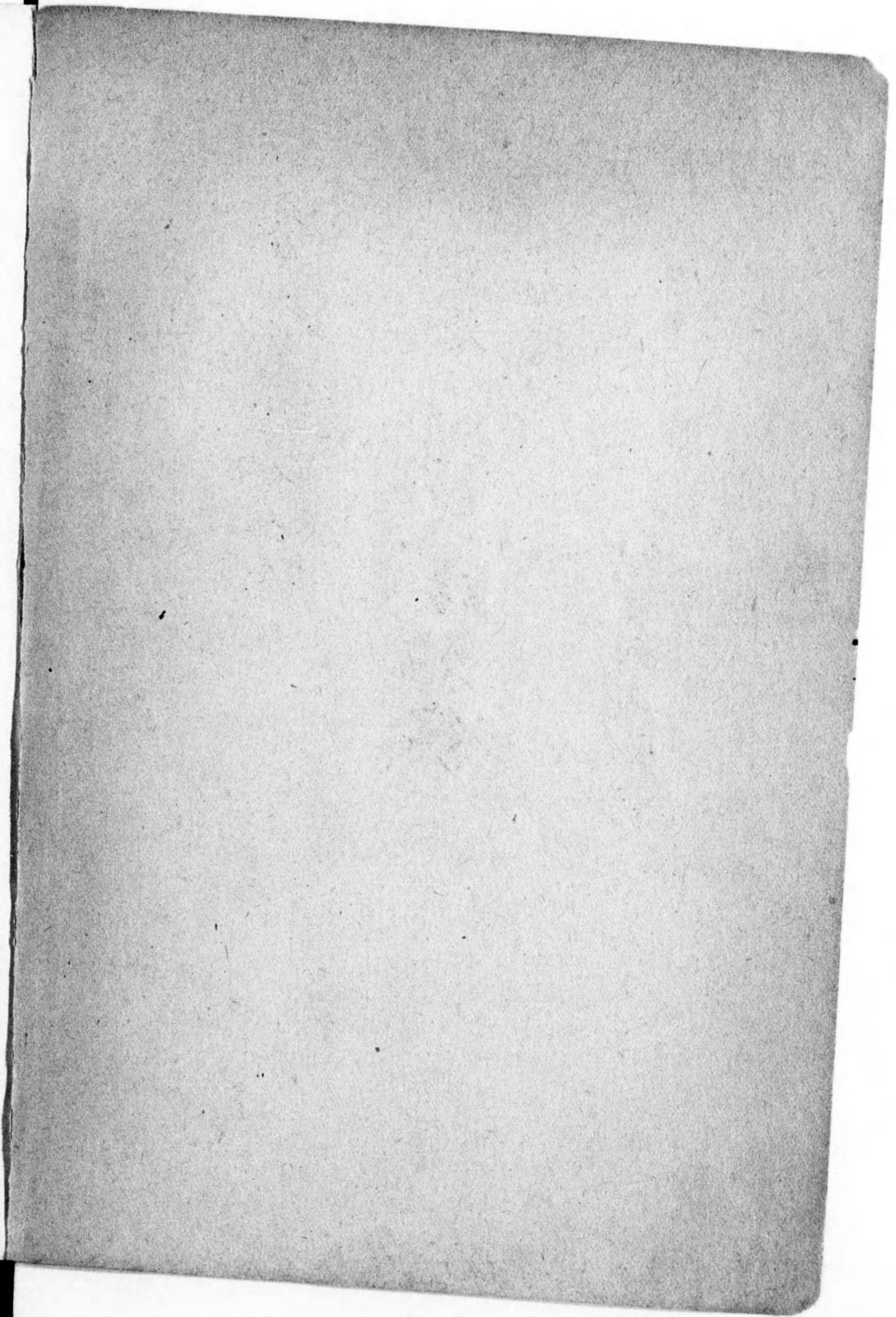
159.8
N77



日本文学報國會編纂

定本
國民座右銘

朝日新聞社刊



989
35

序

金言とか格言とかいふものを「座右銘」として、精神修養の法則、實際生活上の指針たらしめることは、和漢古今の通義であるといつてよい。このたび日本文學報國會が主唱して、ここに新に「國民座右銘」三百六十六句を選定せる所以のものは、一は以て我が國民傳承の精華を顯揚し、一は以て我が國民独自の人生觀を莊嚴せんとするに在るのであるが、併せて、銃後と前線とに心の糧を贈り、決戦下國民の精神作興と、戰意の昂揚と、生産の増強とに資するところをらしめんとするの、微意も含まれてゐるのである。すなはち一日一句を玩味して、これを血とし肉とすることを得ば、我が戦力の根源たる國民の精神力は、いよいよ精強を加へ、同時にまた、大東亞の指導者たる大國民として、醇乎たる風格を涵養育成することも、期し得るであらう。

日本文學報國會は、評論隨筆部會の發議によりこの選定を計畫するや、如上の趣旨に基き、慎重に案を練り、左記如く、選定委員、審査委員並に選定顧問五十餘名を擧げて、情報局後援、朝日新聞社協力のもとに、昭和十八年四月よりこれに着手した。

選定委員 (印は審査委員兼任)

姉崎正治

井上哲次郎

菊池寛

幸田露伴

折口信夫

鹿子木員信

佐藤春夫

豊谷 温



審査委員

- | | | | |
|------------|-------|--------|-------|
| 下村 宏 | 高嶋米峰 | 德富蘇峰 | 三宅雪嶺 |
| 柳田國男 | 山田孝雄 | 吉川英治 | |
| 高嶋米峰 (委員長) | 伊東月草 | 池島重信 | 井伏鱒二 |
| 淺野 晃 | 岡 不可止 | 尾崎士郎 | 折口信夫 |
| 大熊信行 | 龜井勝一郎 | 河上徹太郎 | 菊池 寛 |
| 風巻景次郎 | 佐藤春夫 | 志田延義 | 白井喬二 |
| 小林秀雄 | 茅野雅子 | 土屋竹雨 | 中野好夫 |
| 白柳秀湖 | 野上彌生子 | 長谷川如是閑 | 藤田徳太郎 |
| 西村孝次 | 三好達治 | 村岡花子 | 諸橋轍次 |
| 舟橋聖一 | 柳田國男 | 吉植庄亮 | 吉川英治 |
| 保田與重郎 | | | |

選定顧問

- | | | |
|-------------|------------|------------|
| 情報局長 橋本政實 | 陸軍省 谷萩那華雄 | 文部省 松尾長造 |
| 第四部長 井上 司朗 | 文部省 大岡保三 | 大政翼賛會 高橋健二 |
| 情報課長 木村 東 | 國語課長 木下宗一 | 文化部長 多賀 博 |
| 朝日新聞社長 木村 東 | 同東京本社 木下宗一 | 同東京本社 多賀 博 |
| 企業局長 | 企業部長 | 學藝部長 |

先づ四月中旬、朝日新聞紙上に於て、廣く一般讀者より推薦句の公募を開始し、同時に選定委員、審査委員、選定顧問並に各界名士約一千名に照會狀を發して、適當句の推薦を求め、五月五日の締切までに、總計約二萬句の應募を得た。爾來これを資料として鋭意銓衡を重ね、豫選會議七回、選定會議四回、小委員會其他二回、都合十三回の熟議検討に約半歳の日子を費して、九月二十五日遂に全句の選定並に排列を完了、十月一日を以て、情報局より發表されたのである。選定に當つては、在來の金屋銘句の類が、概ね漢籍から出てゐるのに對し、なるべくこれを我が國典のうちに求め、且つ日本的思考の精華として、現下國民生活の指標たるにふさはしい言句を選ぶことに主點が置かれたが、更に選定の範圍を明確にするため、次のやうな規定を設けて、資料取捨の基準とした。

- (一) 詔勅、御製は申すも長し、皇族のお言葉、御歌等は、謹みてこれを載かさざること
- (二) 上代より明治末に至る、故人の言句に限ること
- (三) 歌米のものは採らざること
- (四) 短歌、俳句、漢詩は採らざること
- (五) 俚諺、いろはたとへ、其他金言にても、あまりに人口に膾炙したるものは採らざること
- (六) 一句の長さは、なるべく三十字を超えざること
- (一) については説明するまでもない。貴きお言葉を、臣下の言句と同列に置き奉ることの、畏れ多さを憚つたのである。ただ一つ例外として、「古語拾遺」並に「日本書紀」に拜する、倭姫命のお言葉のみは、大命を奉行するものので、御媛の深き御慈愛もて諭し給うた莊嚴なお言葉であり、日本武尊の御東征といふ劇的事件をめぐつて、國民の史的情感に強く訴へる點で、臣道の本姿を一言で盡くしたものとしてみさに無二のものと思はれたので、特に教育勅語御

下賜の嚴肅な日を選んで、これを奉戴することとした。

(二)については、「座右銘」と稱する以上、或る程度の時代的古びを必要とするとの見地から、一應明治末までと限定したのであつたが、句を選ぶと共に人をも選びたいといふ希望は、遂に「明治末まで」といふ制約を破つて、山本元帥や山崎中將をも挙げるに至らしめたのである。なほ、古人の言句には、必ずしもその創作にあらずして、他に出所を有する例も少くないので、これを廣義に解して、引用句の疑ひあるものと雖も、その人物により特に意義深きものある時は、これをその人物の句として認めることとした。杉本中佐、高山樗牛等の句はその例である。

(三)の規定は、日本的なものを主とするといふ趣旨から云つて、當然のことであるが、在來の金言格言集の類には、歐米系統のものが寧ろ多く採録されてゐたことを思へば、時代に即應した本座右銘の著しい特色といふことができよう。

(四)は、なるべく陳腐舊套の感を興へず、説教臭を脱した、新鮮な感觸を出したいといふ意圖から設けられた制約であるが、しかし短歌、漢詩等の一節で、これを切離して散文風に味はひ得るものは、進んでこれを採用した。赤染衛門、

武田信玄、藤田東湖、木戸孝允等のものを始め、その例は相當多い。

(五)も(四)と同じ趣旨に出で、且つなるべく出所の明らかかなものといふ、當初からの方針によつたのであるが、また、一般に流布せる金言俚諺の類の、概ね功利的色彩の濃厚なる點を嚴に警戒したためでもあつた。その代り、かかる危惧のない、由緒の正しい俚諺は、民間傳承の尊重すべきことを示す意味に於て、少數ながらこれ採録した。古事記、日本書紀、毛吹草、山家鳥虫歌等からの三四の例は、今後新たに流布さるべき俚諺として、本座右銘の一異彩である。

(六)の規定は、簡潔を賞ぶ座右銘の本質と、普及使用上の必要から、概ね妥當な限度を定めただであつて、選定に當つては、必ずしもこれを機械的に適用せず、楠公の笠置參内のをりの奉答語その他、四十字近いもので採用された句も、

二三にとどまらなむ。

最後に、選定句の表記法については、用字、送り假名、句讀は概ね原文を尊重したが、なかには讀み易くするために、送假名を加へ、句讀點を補訂したものもある。また、漢文はすべて延べ書きにし、片假名ものは平假名に改めた。いづれも一般の理解並に使用上の便宜を考慮したものであり、必ず大方の寛恕を得らるるものと信ずる。

以上の如くにして選定された銘句を、一年三百六十六日の曆日に配したことは、この座右銘の大きな特色である。これは最初から、句と日を組み合わせ選定したものでなく、先づ銘句として三百六十六句を選んだ上で、更にこれを適當な日柄に當てはめたものではあるが、しかし、意外に困難な仕事であり、選定當事者として相當の苦心を拂つたところである。すなはち祝祭日、記念日、節日等には、なるべくその行事にふさはしい句を選び、重要な歴史的事件のあつた日には、これに由緒ある句を配し、故人の誕生日或は忌日には、その故人の句を當て、更に句の内容によつては、季節關係をも考慮した。排列の原理は簡單であつたが、漫然と三百六十六句を並べた場合に比し、各句が著しく生彩を増したことは、まさに編輯の妙味といふものであらうか。日記、日曆、放送等に使用する場合の便宜はもとより、種々の催し、講演、訓話等に一句をぬきだして掲げ、或は各自の誕生日、記念日などの句を、特に愛用の座右銘とすることもでき、一日一言として味讀するといふ意味を離れても、この排列の意義は相當大きいのである。

以上、選定された三百六十六句を通覽するに、佛典から出たもの二三、漢籍出典のもの四十餘を算するが、いづれも既に十分日本化を経たものであり、他は悉く我が國人の所産であつて、我が國思想上の主要古典並に人物を概ね網羅し、まさに日本精神史の一縮圖たるの觀がある。但し、銘句は必ずしも教訓的なものに限らなかつたが、主要人物にして、適當なる言句なきため、やむなく剽愛されたものもあり、また名言佳句に富む主要人物と雖も、その人物に對する思想

的見地より、敢てこれを採らなかつたものもある。國體明徴の見地より、かかる思想的検討が加へられたこと、更に決戦下必須の急務たる、増産、勤儉、鍊成等の點に特に考慮が拂はれたことは、現時局下に生れたこの「國民座右銘」の、歴史的意義を示すものといふべく、敢て「國民」の名を冠することも僭越ではあるまい。これが選定は、當初の豫想よりも遙かに困難であつて、慾をいへばなほ種々の難もあらうが、五十餘名の適材が、半歳の努力を傾けた結晶として、先づこれ以上を望むことの不可能なるを信じ、永く國民の愛誦を期待する次第である。

「國民座右銘」三百六十六句は、いづれも我が先人が生涯の重大事に際して、その叡智の深みから發した心言血語である。すなはちその一句一句が、各時代の古人の血肉を通じて、祖先以來の血脈を貫通する國のいの中に直ちに繋がつてをり、そこに國民の歴史的自覺を、強く喚起するものがある點に、この座右銘選定の最も重要な意義が存するのである。従つて、これに適當な解説を附し、これらの句が生れた事情を明らかにし、併せて作者の事蹟、思想、人物を顯彰することは、選定の趣旨を徹底する上に、缺くべからざる事業である。更に、一般人士にとつて、多少難解、難讀と思はれる句については、せひともその正しい解釋、正しい読み方を明示して、各句の理解、普及に誤なきを期する必要がある。 「國民座右銘」の選定者たる日本文學報國會が、ここにそれぞれの權威者五十餘名を煩はし、選定者たるの責任に於て、解説定本を公にする所以である。解説者それぞれの見解によつて、記述の繁簡は必ずしも一樣でないが、一句の精神を闡明し、且つこれが現時局下に國民の座右銘として、選ばれた所以を明らかにする點に主眼を置くことは、すべての執筆者の心掛けたところであつて、なほ全體の統一を得るために、選定委員の一員たる山田孝雄博士が全文の校閲に當つた。この解説書もまた、われわれ選定當事者の最善を盡くしたるものとして、一は國民日々の生活の良

き指針となり、一は古典先人の言句を通じて、國のいの中に親しむよすがとならんことを希ふ次第である。

昭和十九年一月二十五日

日本文學報國會評論隨筆部會長
國民座右銘審査委員長

高 嶋 米 峰

凡例

- 一、月日の下に記載せる行事のうち、括弧を附したものは、年により一日の移動があるが、その場合は當日の句も、これと共に移動せしめるものとする。但し、當日が大詔奉戴日なる時、若しくは移動の結果大詔奉戴日或は他の行事と重複する時は、句の移動を行はない。
- 一、月日の下に古人の忌日を記載せるものうち、「歿」は病死、「死」は變死、「寂」は僧侶の死を示す。その日附は當時のものをそのまま採用したものであつて、現行曆により換算したものではない。
- 一、作者名の上に記せる書名は参考までに出典を示したものであつて、一般に使用する場合は之を附記せざるも差支へない。
- 一、作者名欄を空白とせるものは、特に作者を定め難き句であつて、一般に使用する場合は、その上欄に記せる書名に括弧を附したるものを以て作者名に代へるものとする。
- 一、作者名欄に於て僧侶その他の名の下に括弧を附してその尊號若しくは尊稱を附記せるものは、特に一般の理解を願ふべきものであつて、一般に使用する場合は、なるべく之を附記すべきものとする。
- 一、目次は省略し、四種の索引を以つて之に代へた。人名は出典に關係あるもののみを「人名索引」に、又歴史的事項、忌辰等は便宜上「時令索引」に収録した。

國民座右銘



月

一月一日 四方拜

大日本は神國なり

—神皇正統記— 北畠親房

これは北畠親房（永仁元年〔1113〕一月二十九日生、正平九年〔1154〕九月十五日歿、一説四月十七日歿）の神皇正統記
●はじめの語である。親房は 後醍醐天皇 後村上天皇兩朝の柱石の臣である。建武中興の際、その子顯家が陸奥守に任ぜられ、義良親王（後村上天皇）を奉じて任地に下つた時、共に赴いて輔佐し、建武三年〔1156〕に顯家と共に親王を奉じて行在所に至つた。延元元年に 後醍醐天皇は吉野に行幸あり、親房は伊勢に下つて義兵を催した。延元三年〔1158〕常陸に下り賊と戦つたが、後吉野に歸つて 後村上天皇に奉仕した。延元四年〔1159〕秋常陸に居つた時 後醍醐天皇の崩御 後村上天皇踐祚あらせられたことを承り、神皇正統の邪なるまじきことの事實と論證とを記述したのが神皇正統記である。

これは神皇正統記の開卷第一の句であつて、神皇正統記一部の性格を規定してゐる。これは我が神聖なる國體をただ一句で喝破したものととして古來有名である。大日本國は神國であることは誰でも云ふ所であるが、著者は之を説明して「天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此事あり、異朝には其類無し。此故に神國と云ふなり」と云つてゐる。これは此の大日本國は天つ神が基を開き給ひ、天照大御神の御子孫が永く皇統として君臨あそばさるる國

である。我が朝にのみ此事があり、外國にはその類が無い。この故に神國と云ふのであると云ふのであるが、これは我が國の本質がここにあるといふことを示すものである。一月一日にこれを充てたのは元日は三の始めといひ、そのつから國の初めを思ふ。この日に皇國の本質を思ふことは極めて妥當である。（山田孝雄）

一月二日 稽古始

初心忘るべからず

—花傳書— 世阿彌元清

世阿彌元清（正平十八年〔1153〕生、嘉吉三年〔1313〕歿）は、能樂の大成者で、觀世流の第二祖である。父の觀阿彌清次も偉大な能樂の天才であつたが、世阿彌は父の遺業を継ぎ、將軍義満の庇護を得て、能樂をして今日の如き幽玄な舞臺藝術たらしめた功勞者である。彼は單に能役者として傑出したばかりでなく、謡曲の作者としても、百番以上のすぐれた作品を書き、能樂藝道論に於ても、花傳書、花鏡等二十以上の傑出した祕傳書を著して、實に卓抜な見識を示して居る稀有な天才である。

「初心忘るべからず」といふ語は、花傳書に見え、委しい解説は花鏡に於て述べてある。彼はこの語に於て、三つの意義を考へてゐる。第一は、藝道への初入門の時代の事を生涯忘れてはならないといふ意であつて、相當の藝位に上り得た時に於ても、自己の修行の反省資料として、常に初心時代を想ひ見よといふのである。第二は、藝術家は一生涯が

初心であるといふ事を忘るる勿れとの意であつて、如何に上達した者でも、常に日々が初心であると心得て、生涯に亘つて向上の一路を邁進せよとの訓戒である。第三は、現今までに學び來つた所のものは、それぞれの時期に於ける初心の風體といふべきものであるが、その時その時の初心の風體を忘れ失ふ事なく、悉く一身に具備して居よといふ意であつて、習ひ得たものは悉く自己の血肉の中に消化し盡し、何時如何なる時でも、即座に完全に演出し得るまでに究め盡くせよとの教訓である。(能勢朝次)

一月三日 元始祭

天地の始は今日を始とす

— 神皇正統記 — 北 皇 親 房

これは北畠親房の著した神皇正統記(一月一日の條にある)の 應神天皇の條に八幡大神の事を叙して神道の神髓に説き及ぼした所にある。その文は「代下れりとて自から賤むべからず、天地の始は今日を始とする理あり」といふのである。この語は支那の荀子に似たものがあるといふが、ここにいふ所は純なる日本思想から出たものである。當時の思想の弊害は支那から傳はつた濛季即ち世の中は後世になるにつれて次第に衰へて行くといふ考へ方をなし、又佛法でいふ末法思想即ち釋迦滅後、正法五百年、像法千年の後に末法萬年と云つて五濁の惡世となると信じ 後冷泉天皇の御代頃から既に末法になつたと信じて世を悲觀してゐたのだが、親房はさやうな思想には正面から反對して之を粉碎し

た。我が國は天壤無窮に榮え行くべき國である。我々日本人は一日一日を最も正しく強く前途に光明を認めつつ堅實に活動しつつ進むべきである。かくしてその一日一日の活動が次々の日の活動の基礎となるべきである。かやうにすれば、その一日の活動がいつも次々の活動を引き起して行き、千萬年といへども窮ることが無い筈である。これが中今の思想の活動原理であるが、それをこの語でいひあらはしてゐると考へらる。一月三日は元始祭を行はせらる。この祭は明治の御世に起されたもので、天つ日嗣の元始を祝して歳の初に神祇を崇めさせ給ふ盛典である。元始の文字は古事記の序に見ゆる。この日にこの語を三唱して以て生々發展の皇國の隆運に貢獻する覺悟を新たにすることを要する。(山田孝雄)

一月四日 政始

天地と共に行くべく、天地と共に動むべく、天地と共に盡すべし

— 日記の一節 — 二 宮 尊 徳

二宮尊徳(天明七年(一八一七)七月二十三日生、安政三年(一八二六)十月二十日歿)は相模國足柄上郡栢山村に生れ、兩親の早世、兩度の大洪水のため赤貧洗ふ如くであつたが、あらゆる艱苦を凌ぎ、よく一家を再興し、その間、人間鍛錬の深き意味に徹し公私一貫至誠推讓の道を體得した。他日大成の人格的基礎はここに成つたのであつた。小田原藩主大久保忠眞の命により文政六年(一八二五)以後下野國櫻町知行所三ヶ村百五十戸の再興に日夜心血を濺ぐこと十有五年、その間に「報徳仕法」を組織し、それを裏付けるに深遠強靱なる哲學的精神をもつてし、ここに尊徳は全き人として大成したのであ

つた。尊徳の尊徳たる深き意味はむしろこの時期に求めらるべきである。ことに天保の大饑饉の時の水際立つた活動は尊徳の眞價を歴史的に決定したものであつた。天保十三年(二五〇〇)以後幕臣となり、微祿を以て日光開發に當り、今市(下野)に逝去した。その遺芳、下野、常陸、相模、磐城、駿河、遠江その他遂には全國に及び、その遺著、報徳全書九千餘卷、全集三十六卷。その主張する所は天地の道と一になる至誠一貫公私一如の報徳道である。

この語は天保四年(二四九三)四十七歳の尊徳の日記の一節にして、その次に「元來我身我心、天地のものにして我ものにあらず」とあり、更に「我をさとりしりたまへ」とある。その前年の日記にはまた「初よく一を踏めば、終必ず一を得」。『本元唯一、神人歸一』とある。終始「一」を踏む至誠奉公の道は天地の道そのものにつながつてゐる。日本の大地を耕して宇宙的根柢に徹した哲人的實踐家二宮尊徳の眞面目はこの一句に盡くるといふも過言ではない。質實無比にして雄渾高邁なる二宮尊徳の面目を示すこの言葉こそは、政始の日に政治家、官吏をはじめ、いやしくも皇國の道にながる限りの人人におくるに最もふさはしきものであらう。(下程勇吉)

一月五日 新年宴會

あはれ、あなおもしろ、あなたなし、あなさやけ、おけ

古語拾遺

齋部廣成が 平城天皇の召問を蒙つて舊説(「ふること」)を録して大同二年(八三七)に上聞した「古語拾遺」に記録せら

れた諸神唱和のことばである。天照大御神に天の石窟からお出ましを戴いた時、天初めて晴れ、俱に見合はせる面は皆明白く、神は手を伸ばして歌舞したのであつた。その時、その状を歌ひその心を表はして相與に稱へた詞がこれである。而して『古語拾遺』にはその詞に一々註して、「あはれ(天晴れ)、あなおもしろ(古語に、事の甚だ切なるを、皆あなと稱する。衆の神の面明白といふ意)あななし(手を伸ばして舞ふことをいふ。今樂事を指してたのしと謂ふのはこの意である)あなさやけ(竹の葉の聲)、おけ(木の名、其の葉を振る調)」としてゐるが、天照大御神の大御光を仰いで歡喜踊躍する状が善く表はれてゐる。この大御光を仰いで隨順歸一し奉る姿、和樂清明の心が、日本人の本然の姿であり心である。(志田延義)

一月六日 (小寒入)

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ

赤冊子 松尾芭蕉

赤冊子は、永く芭蕉に師事した、伊賀の服部土芳(享保十五年(一三九〇)正月十八日歿、年七十四)が、芭蕉の言葉を聞くに随つて録して置いたもので、白冊子、黒冊子と共に三冊子の名でひろく行はれ、芭蕉語録として信用のある書の一つである。この言葉は「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」と、師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也」といふ形で出てゐて、私意については、「たとへ、物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物と我二つに

なりて其情誠にいたらず、私意の作意也」と註してゐる。今日の言葉でいへば、小主觀を離れよといふ意味で、小ざかしい小智小見を捨てて、直接自然に没入し、自然と我と一枚になれといふ思想である。たとひ自然の事物がはつきり描かれてゐても、そのものからにじみ出した情でないから、物と我とが二つになつてゐて、物心一如のまことの俳諧にならないといふのが土芳の註の意味である。

笈の小文に「造化にしたがひ造化にかへれとなり」とあるのも、同じ心持をいつたものと考えらるるが、かく自然に隨順し、歸依する心の底から出て來たのが芭蕉の俳諧であつて、この言葉は簡單ではあるが、芭蕉精神の根本を道破してゐる。

但し、私達は今日この言葉から、その素朴な、まじりけの無い、質實な精神を汲みとつて、小手先の小策を弄することのない意味で、座右の銘とすべきであらう。(伊東月草)

一月七日、七草

人の爲に常に芳心あるべし

源信僧都四十一箇條起請

源信 (惠心僧都)

惠心僧都源信(天慶五年(一三〇三)生、寛仁元年(一〇七〇)六月十日歿)は、大和葛城郡の人、姓は卜部氏。叡山に入り、良源(慈惠大師)に師事、後叡山横川惠心院に隱栖して、著述と淨業とを専らとした。この頃から惠心僧都と呼ばれること

になつた。著述少からぬ中、往生要集(三卷)は、鎌倉期淨土教の興起をうながしたもので、又遠く支那にも傳へられた。その思想は日本文化史の上に至深の影響を與へ、特に淨土教藝術成立の母體をなしたものである。

この句は、源信僧都四十一箇條起請の中に出で、その第二十條である。これは結衆の清規ともいふべきものであるが、同信結衆規約としては別に二五三昧起請がある。「一、爲人常可有芳心」とあつて、芳心は他人に對しての深切心、なさけ心をいふのであるが、ここでは自ら他人に深切心、情け心のあるべきことの意味に用ひてゐる。源信は慈悲の上に立つて往生要集を説いたものであるが、この句も他の人々社會に對する深い思慮から成つてゐる。「人の爲に」とあるやうに、單なる同情心、深切心だけでなく、積極的に他を利する意味でいつてをり、「常に」といふのは、一時一定の芳心でなく、常に變らず、又全體の人々に芳心を及ぼすべきことをいつてをるのであり、信仰から出た詞として、芳心に深い意味がある。この詞自體奥深い語感がある。情深さ深切心といふのは、他人の身に立替つてこそ始めて満足に盡さる。他人の身になることは自らを忘れてなすことで、その行届いた心盡しが芳心である。だから日常の中にも崇高な行ひはいつも行はるのである。

この日七草で、本來は七日に正月をも一度迎へ、七種の菜を神に供ふるのが意義であつたらしい。野から始めてとつた菜を神に捧ぐる。他人にもかうした敬虔な氣持で盡したら、そこに自他共敬の念は自ら生ずると思ふ。雪間を凌いだ新しい菜の色のやうに、うぶな心でいつも人に深切でありたいものである。又七草粥は邪氣を拂ふともいふ。食事にあつても、其他念々の動作にも、破邪の氣のあることは、この際是非必要と思ふ。(筑土鈴寛)

一月八日 陸軍始

常に戰場に在り

——參州牛久保之壁書——

牧野成定

三河武士の名は由來實實剛健を以つて聞えてゐた。牧野氏は戰國時代の頃、三河牛久保城にあつて、その要害の地を占めてはゐたが、今川、武田、徳川の諸豪の間に介在し、自ら維持するに苦心慘憺たるものがあつた。始め今川氏に屬してゐたが、後徳川氏に歸屬した。かうした立場に置かれた牧野氏君臣は絶えず相砥勵する必要があつた。參州牛久保之壁書と稱するもの二十七箇條がある。成立年代は定かでないが、恐らく長岡藩祖牧野忠成の祖父成定（大永五年〔三八〕生、永禄九年〔三三六〕十月二十三日歿）時代のものであらう。彼等が如何に剛健にして、しかも禮節を重んじてゐたかを窺ふに足るものである。「常在戰場」の語はその劈頭に掲ぐるところである。武士たる者は平素平和の時と雖も常に戰場におけるが如き覺悟を以つてゐなければならぬの意である。平時にあつても非常時の如くあれといつた某名將の言と同意である。牧野忠成（天正九年〔三三〇〕生、承應三年〔三三四〕十二月十六日歿）、長岡藩の初代として越後國長岡城に移封、その入城の頃家中出仕の間へ大書して掲示したと傳へらるるところの「侍之恥辱十七箇條」も畢竟「常在戰場」の心掛を基本としたものである。爾來この語は長岡藩の家風として、常に刻苦精勵、果敢に事に當るを尊重するの風を維持した。「武士の義理」「侍の一分」が立たざる時は戰場たるを否とを問はず、武士の恥辱となし、僅かの功を誇り

自讃することも亦同様とみる。要するに沈黙勇斷をよしとする。この藩風を思へば、先に河井繼之助を生じ、後に山本五十六を生んだことも亦所以なしとしない。（野村兼太郎）

一月九日 明治天皇踐祚〔慶應三年〕

紙一枚 糸一筋 みな大君のたまものなり

——奉公心得書——

竹内式部

竹内式部（正徳二年〔三三七〕生、明和四年〔三三七〕十二月五日歿）は、新潟の人、山崎闇齋の學統を引く神學者であつた。京都で、公卿に神學を講じ、皇威の御伸張を計つたが、却つて、幕府の忌諱に觸れて、追放に處せられ、後山縣大貳の事件に坐して捕はれ、遠島の刑となつて八丈島に送らるる途中、病氣のため、三宅島に上陸して、ここで病歿した。享年は五十六歳である。

奉公心得書一卷は、寶曆七年〔三四七〕の六月に執筆したもので、朝臣が官廷に仕へまつる心得を簡潔に記してゐる。これは當時、式部の講義を聴いてゐた公卿に與へて、懇篤に純忠の大道をさとした書であつて、式部の純忠の精神が、極めて端的に現はされてをり、今日も、その烈々たる氣魄が胸に響いて來る。その中に、

「其の身は勿論、紙一枚、糸一筋、みな大君のたまものなり。あやまりて我が身のものと思ひ給ふべからず」と見えてゐる。この、紙一枚、糸一筋、いかやうに小さい、つまらぬ物であつても、すべて大君から賜はつた物であ

るといふ心こそ、國民生活の根本となるものでなければならぬ。さうすれば、どのような僅かな品物でも、これを大切に、粗末に取り扱ふことなく、心から感謝する生活が生じる。又、皇國の經濟の意義も、この精神に基いて理解するとき、歐米的な經濟觀念とは、全く違ふものとなること明らかであらう。

恰もこの日は、明治天皇が慶應三年一月九日（陰曆）に踐祚あそばされたその當日である。明治天皇の御大業を偲びまつり、「大君の賜物」を深く感佩して、皇國の臣民たる精神に徹したいと思ふ。（藤田徳太郎）

一月十日 徴兵令布告〔明治六年〕

兵の勝敗は人にありて器にあらす

——日本外史—— 賴山陽

賴山陽（安永九年〔西曆〕十二月二十七日生、天保三年〔西曆〕九月二十三日歿）の代表的著書「日本外史」の「源氏後記」にある言葉である。その「論贊」の部分で、山陽は北條氏の功罪を論じ、元寇の時に於ける時宗の處置を賞め、「虜（註、元兵）盛んに砲礮を以てわれに臨む。しかるにわが兵、刀を揮ひて奮ひ前む。虜、發するに暇あらす。けだし、このときわれ未だ火器の相敵するあらず。われこれを以て知る、兵の勝敗は人にありて器にあらすと」といつてゐる。戦争の勝敗は武器でまゐるのではなく、人できまる、の意である。

これには今日異論もあらうが、武器にのみたよる非を指摘してゐる限りでは、至言といへよう。

山陽が、武家制覇時代の歴史として「日本外史」を書いたのは、中世以來如何にして兵馬の大權が武士の手へ移つたかを明らかにし、肇國の初めどほり政權をも兵權をも朝廷に歸したてまつらんと熱願したためである。これすなはち、維新の志士を勤皇の大義に目ざめさせたゆゑんであり、王政復古、國民皆兵の先聲となつたゆゑんである。明治六年〔西曆〕の徴兵令布告の日のもとに「外史」の言葉を掲ぐるは、故なしとしない。（藤森成吉）

一月十一日 鏡開き

朝夕の食事はうまからずとも褒めて食ふべし

——伊達政宗壁書—— 伊達政宗

伊達政宗は、永祿十年〔西曆〕に生れ、寛永十三年〔西曆〕七十歳で世を去つた人で、戰國時代に於ける屈指の武將である。武將の中では、藤原氏の系統で鎌倉時代以前からの名家である。生母に愛せられず、十九歳で父を敵に謀殺された。りなどして、幼時より艱難を経たがその天稟の武略のため米澤會津地方二百萬石に近き土地を切り取つた。しかし、秀吉の大勢力に屈し、遂にその旗下に服したが、勃々たる雄略は、時々その鋒鋦を現はしたため、秀吉の嫌疑叱責を受けること、三回に及んだ。關ヶ原の戦の前後にはその進退よろしきを得て、江戸時代にも六十餘萬石、加賀、島津に次ぐ雄藩として残つたのである。武將の中では、相當の教養もあり、苦勞人で、嚴格ではあつたが、人情を解し、士民をも撫育したらしい。

「仁に過ぐれば弱くなる。義に過ぐれば固くなる。禮に過ぐれば、詔つひとなる。智に過ぐればうそをつく。信に過ぐれば損をする」

は政宗が残した五常訓であるが、之を見ても武略本位の實利主義であつたことが分る。その附記に「此世に客に來たと思へば何の苦もなし。朝夕の食事はうまからずともほめて食ふべし。元來客の身なれば好嫌すききらひは申されまじ」と、ある。日常生活の心得として立派である。が、現代では食事については、神皇正統記の「長田ながた狭田さたの稻の種をくふも皇恩なり」とまで、ふかく考ふべきである。(菊池 寛)

一月十二日

人を安んずるは、則ち自ら安んずる所以なり

省 雲 録 佐 久 間 象 山

象山(文化八年(二五二)二月十六日生、元治元年(二五五)七月十一日歿)幕府の命を受けて京都に入り、公武の間に馳驅して、國難を打開しようと努力したが、その開國論は、攘夷派の反感を招き、遂に刺客の難に遭つて逝いたのである。その前四日、郷里に送つた書信の中に、

「若し、此方の身に、災にてもかけ候事有之候はば、日本は最早、大亂と存可申候。甚だ分に過ぎたる申様に候へども、當節の議論、日本の命脉は、此身に有之と存じ、此御國と存亡を共に致候了簡故に、人々いろく申候と

も、更に畏れ之なく、心中安らかに候」

とある。象山の抱負、象山の意氣、ただ國を安んじ、人を安んぜんとするにあつたのであつて、斷じて、自己一身の安危を顧慮するが如きものではなかつた。彼が京都に赴かんとする頃、京都は正に、刺客躍り凶刃舞ふの状態であつたので、知人は彼の上洛を阻止しようとしたのであつたが、彼は、

時に遇はば散るもめでたし櫻花めづるは花の盛りのみかは

と口吟んで、敢然として出かけたといふのである。彼が人を安んじ國を安んぜんとする決意の、如何に牢乎たるものであつたかは、想ひやることが出来る。

茲に選ばれた一句は、彼の著「省雲録」(九月四日に配した句の解説参照)中の句であつて、日常修養の方法の、一基準を示したものであるが、自ら行ふ規矩はこれを嚴にし、人を待つ規矩はこれを寬にする、これ人に尊信せらるる所以であり、人をして尊信せしめるは、即ち人をして安んぜしめる所以である。従つて、人に嚴であつて自ら寬であれば、人を安んずることが出来ないばかりでなく、自らも安んずることは出来ない。象山自らこれを實行し、人にもこれを及ぼさんとしたのである。(高嶋米峰)

一月十三日

言葉花さくものは必ず實なし

——白蛾冠言—— 新井白蛾

言葉を華やかに飾るものには、必ず眞實がない。これは孔子の「巧言令色鮮やかな仁」といつたのと、略ぼ意味を同じうする。

言葉を飾る裏面には、なにか己のためにせんとするものが潜在する。人の氣にとり入り、その歡心を買はんとするものにとりては、言葉は一時の方便でしかない。故に只口先の藝當で腹にはなんの信義もないのである。これに反して、飾り氣のない率直な口ぶりの人には、必ず眞實性が認められる。

君子は言を慎む。己の實行できないことはめつたに口に出さないが、出す以上は必ずこれを行ふ人である。君子は即ち言行一致である。又みだりに人前で他人をほめそやすことをしない。小人は盛に諛言を呈するが、かげに廻れば反對にこれを諂うのが常である。

この句、新井白蛾(寛政四年(西曆一七九二)歿)の「冠言」に出てゐる。白蛾名は祐登、白蛾はその號である。江戸の人、始め菅野兼山に學び、二十二歳にして神田で教授したが、後去つて京都に住した。易説を以て門戸を張り、易に關する著書が頗る多い。(土屋竹雨)

一月十四日

不惜身命なり、但惜身命なり

——正法眼藏、行佛威儀——

道

元

道元(正治二年(八六〇)二月二日生、建長五年(一一九三)八月二十八日寂)の生涯の行履は、時の鎌倉幕府に阿諛追隨する學者文人の跳梁のなかで、われひとり志の純粹な感じ方を死守するといふ概があつた。ここに掲ぐる一句の擧揚は、さういふ純粹な志を生くる道元の身心から、おのづと生れ出たもので、その主著たる正法眼藏九十餘卷においても殊に重い格調をなし、古今の大思想家にも比肩なきほどの透徹した響きを傳へてゐる。

但を「ただし」と讀めば、一句の心は瓦解し去る。ただしでなくて、「ただ」である。身命を惜まざるなり、ただ身命を惜むなり。いふ意味は、不惜身命の極地に立つて、ただ身命を惜むのである。祖々の護念せしところを護念して不退轉なるときは、不惜身命である。祖道護持の重い使命を擔ふ身命は、現身ながらに惜むべく算ぶべき身命である。

菅疊八重、皮疊八重、純疊八重を波に敷き、御子に易りて海に入りました弟橋比賣。この悲みに、じつと堪へたまうた倭建命。不惜但惜、二つながらその骨髓をここに仰ぎまつるのである。命には、覆奏すといふ重き使命があつた。比賣は、このことをいまはの際に語られたのである。

この大いなるみ軍に神勅奉行の使命を擔ふたみわれの身の處し方は、ますらをもたをやめも不惜の道、但惜の道を

學して、まことに自在と完きとを得るであらう。(田中忠雄)

一月十五日 海軍始

訓練を實戦と思へ、實戦を訓練と思へ

東郷平八郎全集 東郷平八郎

聖將東郷平八郎(弘化四年(二五七)十二月二十二日生、昭和九年(二五四)五月三十日歿)八十八年の生涯こそ、まことにこの一句に結晶せるかの觀がある。

明治三十八年(二五〇)四月九日、ロシア艦隊の新嘉坡沖を通過して遂に支那海に入るとの報に接するや、東郷聯合艦隊司令長官は一大戦策を定め、尋いで戦闘實施の覺悟につき麾下一般に訓示するところがあつた、その略に曰く、

一、作戦の萬事警戒を最要とす大敵を怖れず小敵を侮らず常に敵の來らざるを待たず我常に待つ。處あらば決して不覺を執るべきものにあらす古來往々實戦の後に悔事を殘すは敵に乗ぜらるべき我の虚ありしを以てなり油斷は大敵なり。寸時細事にも警戒を怠るべからず

なほ、かの有名な「攻撃は最良の防禦なり」との言も右の訓示中の一節なのである。

かやうに、東郷元帥にとつて、平素の訓練と實戦とは全く同一事であつた。もし兩者が別々で、その間に緩急輕重の差の存するがとき状態にして果してよく敵殲滅の實を擧げ得るであらうか。海軍始の本日、思ひをここに致してこれ

を我々日常の上に體現しなければならぬ。(小笠原長生)

一月十六日 藪入

家職産業は、たすけてたすけらるゝわざ

本學學要 大國隆正

大國隆正(寛政四年(二四二)十一月二十九日生、明治四年(二五二)八月十七日歿)は津和野藩士である。平田篤胤の門に入つて、國學を修め、京都に家塾報本學舎を開き、又、諸藩に招かれて國學を講じた。八十歳の高齡で歿してゐる。文武虚實論、古傳通解、倭心、本學學要、馭戎問答、その他多數の著書があり、大國隆正全集が刊行せられてゐる。

この語は、本學學要(二卷)に見ゆるが、本學といふのは、隆正が、國學こそ眞實の學問であり、神道が眞實の教であるといふ心で、これを本學、又、本教と稱したものである。この書は隆正の代表的な著書の一つで、安政元年(二五四)二年に成つた。本學の中心思想を説いた書である。

この書においては、隆正は、國民のつとめとして、忠孝貞をよく守り、家職産業をつとめ勵むことを説いてゐるが、その中に「家職産業は、たすけてたすけらるゝわざになんある」と見ゆる。さうして、家職産業を賤しむことの不心得をさとしてゐるが、まことに、わが従ふ職業は、すべてわが生活のために行ふのではなく、人の生活の助けとなるものであり、それが又おのづから自分の生活の助けともなるところに、その眞諦が認められなければならない。

この日は藪入に當つてをり、一年に一度、家職産業を休んで身心を養ふ日であるが、さういふ心に餘裕がある日において、しみじみ家職産業の眞實の意義について考ふるならば、この隆正の語のときが、眞理であることを確かにさるであらう。(藤田徳太郎)

一月十七日

する事かたきにあらず、よくする事のかたきなり

—十— 訓抄 —

十訓抄に出づる句。本書は建長四年十月(一九三)に成つた。作者を菅原爲長と傳へ又六波羅二藤左衛門といふがまだ定かでない。訓誡を十項目に分ち、各訓誡のもとに説話を列ねて、その趣旨が具體的にわかるやうにしてある。教誡説話文學ともいふべく、上中下三卷ある。この句は卷下第十、可庶幾才能藝業事の條にある。即ち

成通卿、年ごろ鞠を好みけり。其徳やいたりけん、或としの春、鞠の精、かかりの柳にあらはれて見えけり。みづらゆひたる小兒、年十二三ばかりにて、青色の唐装束して、いみじうつくしげにぞありける。何事もこのむとならば、底をきはめて、かやうのしるしをあらはすばかりこそせまほしけれど、かかるためしいとなりがたし。されば學ぶ者は牛毛のごとく、得る者は鱗角のごとしもあり、又する事かたきにあらず、よくする事のかたきなりともいへる、げにもと覺ゆるためしありけり

とある。學ぶ者云々は「顔氏家訓」養生篇の「學若牛毛成如鱗角」に基づき、する事云々は、恐らく文選の「非知、之難、能之難也」から出たものであらうといはれてゐるが、二つとも同じやうな意味である。

物事を普通一通りにやることは誰でも出来る。だが徹底してこれが身につくとき、物事そのものになりきつて、道に至り得るまでによくなす事はむづかしい。しかしその例はないどころか多いのである。自ら好んでする藝能の如きですら一道に達するまでの修練があると、神の如き妙智と徳とを身に具ふことができる。各々その職能を究め盡すことによつて、大道へ出づる。何れの職能にあつても到達するところ一つであつて、その道々を好み、職能に携はるとあらば、成通の如く徹底し、神を見うるまでにいたらねばならない。農人や、藝道名人の言行に、體驗からきた尊い言葉が残されてゐる例は多い。事は一道の鍛錬、職能の徹底にあるので、物事の三昧に入るとかくなるのである。(筑土鈴寛)

一月十八日 (歌御會始)

歌をよままでは、古の世のくはしき意、風雅のおもむきはしりがたし

—うひ山ふみ— 本居宣長

宣長(享保十五年(三三〇)五月七日生、享和元年(四六)九月二十九日歿)は國學四大人の一人。最大の主著「古事記傳」の外、七十二年の生涯を漢意をばらつて神ながらの皇國の道を明らかにしようとした著述數多中で、此の「うひ山ふみ」は古事記傳が成つた後、かねての門人の請によつて書いた古學の入門書で、簡潔なものであるが其の造詣と見識を

傾けて懇ろに書いた、圓熟した國學書である。

國の歴史精神の立つところを言ふのに「歌を詠ますしては」知り難いと斷言して言ふのも、世界に類のない大事なこと
で、全く皇國の道をそのままに物語つてゐるのである。古事記、日本書紀、殊に萬葉集といふ上古の寶庫は實に神な
らの神庫であるといふべく、宣長はさういふ古風をまづ主としてまなび詠むことを教へた。皇國の歴史が斯くの如く
無比にかがやいてゐるのは、普通の賢い智慧でも測り難いこまやかな所が古からあつての事で、それは又其のこまやか
に豊かな心を歌つてきた「みやび」の歌を今もみづから詠むことによつてのみ知り得るのである。恰も今日は長くも
天皇此の古道のまにまに大御歌始め給ひ、臣民又同じ心に 天皇に歌獻るといふ、神ながらに尊い日で 明治天皇御製
にも「千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ萬代までに」「千萬の民のことばを年毎にすゝめさせても見るぞたの
しき」と遊ばされてゐる。(蓮田善明)

一月十九日 勝海舟歿

學者になる學問は容易なるも無學になる學問は困難なり

——海舟全集—— 勝海舟

勝海舟(文政六年(一八一八)生、明治三十二年(一八九九)歿)、通稱麟太郎、諱は義邦、後安芳と改む。はじめ幕臣、年少劍を
島田虎之助に學び、長崎傳習所に修行、萬延元年(一八六〇)外國奉行新見正興等渡米の際、咸臨丸艦長としてこれを護衛し

た。明治元年(一八六八)鳥羽伏見戦後、將軍徳川慶喜恭順の態度を示した時、海舟は陸軍總裁の職にあつたが、官軍參謀
西郷隆盛と會見して、江戸城を無血開城することに決定した。その後、明治政府に出仕、參議、海軍卿となり、伯爵を
賜はり、正二位に敘せられた。その編書著書は『海舟全集』十卷に收められたが、『陸軍歴史』『海軍歴史』は最も有
名である。

本文は『海舟全集』に見ゆるのであるが、いかにも海舟らしい表現である。その意味は、物識りになるための學問は
容易だが、さうした虚學を脱却し、自分が無學なものであるといふ眞の見識に到達し、道の眞義に徹するやうな學問修
行をするのは容易でないといふことである。海舟はよく「山岡ほどの馬鹿にならなければ」と人に語つたが、これは山岡
鐵舟の道義觀の徹底を稱揚し、鐵舟を眞の學問をした人と見抜いてゐたからであつた。(佐藤堅司)

一月二十日 木曾義仲死

兵の剛なると申すは、最後の死を申すなり

——源平盛衰記—— 今井兼平

兼平は中原兼遠の第四子、木曾の今井に住したので今井四郎といつた。義仲の四天王の一人でかつ乳母子である。壽
永三年(一一八四)三十三歳で戦死したと傳へらる。この句は、源平盛衰記三十五卷粟津合戦事に出てゐる。つはもの剛
なる者と申すのは、最後の死に方如何をいふのであつて、武士らしい見事な死が望ましいといふ意味である。

この意味を平家物語の方では、「弓矢取は年來日比如何なる高名候へども、最後に不覺しぬれば永き瑕にて候なり」と敷衍して説明してゐる。木曾が最後の合戦に今井と只二騎になつて、共に斬死せむといふを、兼平がとどめて、ものふの最後の死のあり方を教へた。武將たる者が雑兵ばらの手にかかつて討たれることは末代の恥辱である、よろしく武將として相應しい自決を遂ぐるこそ剛なる者なれ、と兼平は諫めたのである。

嘗て武士は疊の上で死ぬのを恥とした。戦場での美しい死が彼等の理想であつたのである。武士の本分はこの死際の潔さにあつた。

しかもこれはただに武士のみの誠ではない。士魂を有する日本國民各自の箴言である。即ち、すべて人はその最後の瞬間の處し方にこそ、彼の一生の價值が決定されるといふ意味に外ならないのである。(塩田良平)

一月二十一日 (大寒)

一夫耕さざれば天下その飢を受け、一婦織らざれば、天下その寒を受く

—— 潜夫論 —— 王符

耕織は各人の自由のやうであるが、これが勤惰は影響するところ實に大きい。一人の男の田を耕さぬ結果は、天下に飢に迫るものができ、一人の女の機を織らぬ結果は、天下に必ず寒に泣くものを生ずる。古來勸農は治道の要諦である。我國に於ては、列聖深く勸農を農事に垂れ給ひ、農民の勤勞を察し給へる大御心が宸藻によつてありありと拜せ

らるるのである。身農業にたづさはるものは、よくその天職を重んじ、側目をふらず、日々勤勞、奉公の誠をささげ、歳々益々豊かなる收穫の實をあぐべきである。殊に現時に於ては、千歳一遇の大東亞戰を勝ちぬくためには、是非とも食糧の充實を圖らねばならぬ。食糧の増産は、とりも直さず國民血肉の強化であり、飛行機の増産であり、一路戦捷への階梯であるのである。

漢の王符が著、潜夫論の浮修篇に、

一夫不耕。天下必受其饑者。一婦不織。天下必受其寒者。

とある。王符字は節信、年少にして學を好み、志操堅固の人であつた。和帝(南)安帝(七七)の後、漢の世は人競うて獵官につとむる状態であつたが、王符は獨り節を守つて仕へず、潜夫論の一書を著して、當時の得失利病を痛論し、一世の耳目を警醒した。(土屋竹雨)

一月二十二日

何しに劣るべきと思ひて一度打向へば最早其の道に入りたるなり

—— 葉隠 —— 石田一

石田一鼎 (寛永六年(三六九)生、元禄六年(三三三)歿) 通稱安左衛門、諱は宣之、佐賀藩主鍋島勝茂、同光茂二代に歴仕、祿二百五十石を食み、さらに七十五石を加封された。後故あつて出家す。一鼎と號し、儒佛經史を研究し、『要鑑抄』

を著はした。同書における「武士道に於て未練を取るべからず」以下三ヶ條の所願は、『葉隠』の四誓願の示唆となり、また武士道三段「一には士の意地、二には如睦、三には甲冑」の解釋は、山本常朝の武士道觀に影響するところが大であつた。

本文は『葉隠』に收められたものであるが、その頭に「名人の上を見聞きて及ばぬ事と思ふは、ふがひなきことなり。名人も人なり、我も人なり」を附けて見れば、意味がはつきりする。人間といふものは初一念が肝要だ。三つ子の魂といふが、その意氣が大切である。志を固めて修行を怠ることがなければ、立派に道に入ることができ、名人にもなれるのである。本文の終局の意味は、決して名人に劣つてなるものかの意氣で修行に志せば、その時既に道の第一歩に入つたといふことで、初一念の氣魄が躍動してゐる。(佐藤堅司)

一月二十三日 軍旗制定さる(明治七年)

彼を知り己を知れば百戦殆からず

孫子 孫武

此の句は孫子の「謀攻篇」に見えてゐる。全句を擧ぐれば「彼を知り己を知れば、百戦殆からず。彼を知らずして己を知れば、一勝一負。彼を知らず己を知らざれば、毎戦必ず敗る」といふのである。彼我の情勢に通曉すれば毎戦必ず勝を得べしとの意であり、正に兵法の鐵則である。我陸海軍の開戦以來擧げ來つた赫々たる戦果が、凡て皆周到なる準備によつて、彼を知り己を知つた賜に外ならないことを考ふると、此の句こそは國民にとりて生きた教訓である。萬一國民が支那事變が起つて始めて支那を眺め、大東亞戰が始つて漸く南方に注目したといふ嫌があつたとせば、其れは過去の懈怠であつた。將來はなほ追ふべし、國民は擧つて支那、大東亞共榮圈、延いては敵國米英の實情をも究め盡くし其の長短優劣を正視して備ふる所が無ければならぬ。而して一面また其等と對比して、皇國の萬邦無比なる國體たるを確認し、日本精神の優秀性を發揮しなければならぬ。其れこそ今日我等國民に課せられた重要な實踐道である。

「孫子」は春秋時代、吳王闔閭に仕へた將軍孫武(皇紀一八〇年頃)の作と傳へられる書である。吳起の著した「吳子」と共に孫吳の兵法と稱せられ、古來兵家の祖と仰がれてゐる。孫子に説く所は戰術の方面のみならず、戰爭開始前の準備、或は戰費、戰鬪力、中立國の向背、乃至はスパイの種類用法等まで委しく記載せられてあるものであつて近代戰術上にも益する點は極めて多いのである。(諸橋敏次)

一月二十四日

打明け過ぐるも悪しく、物隠すやうに見ゆるも悪しきなり

智慧袋 森鷗外

森鷗外(文久二年(二三三)一月十九日生、大正十一年(二五二)七月九日六十一歳にて歿)、本名林太郎。陸軍軍醫總監、日露戰役に出征して功三級金鷄勳章ならびに旭日重光章、後に旭日大綬章を賜はり、危篤の日に從二位に叙せらる。

皇室博物館總長兼圖書頭、帝國美術院長、臨時國語調査會長、文藝委員會委員、文部省美術展覽會審査委員等を歴任、醫學博士、文學博士、作家にして評論家、明治最大の文豪なり。

右の言葉は「智慧袋」中の一節。「智慧袋」は明治三十一年(二二六)八月より十月まで當時の時事新報に連載せるもので、鷗外の人生智の閃きを最も端的にあらはした箴言集である。現在の鷗外全集(岩波版)第十八卷に収録されてある。その中に「打明くると隠すと」といふ一節があつて、全文を記載すれば次のとおりである。

「打明け過ぐるも悪しく、物隠すやうに見ゆるも悪しきなり。打明くる弊の己れが短を示す一面をば上に言へり。猶説くべき一面こそあれ。そは人に打明けて物言ふ習となるときは、敵手の人先より先へと問ひ極むることゝなり、果ては我一舉一動彼の知らで協はぬ事のやうにせられ畢るべし。さればとて物隠すやうに見えて、歐羅巴人の所謂領まで控紐掛にしたる態度をなさんには、我に接する人、その相識ることの新舊によらず、少くも我に心を置き、甚しきに至りては我を氣味わるきものにおもふべし」

鷗外自身の解説はかくのとほりである。要するに社交その他すべてにつけて、人間禮節の微妙に適度であるべきを教へてゐる。微妙によく通ずる人が、眞の意味における教養人であり、すべて過度なるものは精神の不健全を意味するといふべきであらう。(龜井勝一郎)

一月二十五日 源空寂

一丈の堀をこえんと思はん人は一丈五尺をこえんとはげむべきなり

——一言芳談—— 源空 (法然)

法然は長承二年(一一七三)四月七日、美作國久米の南條、稻岡の北の庄に生れ、建曆二年(一一七〇)のけふ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨の文を唱へ、念佛しながら壽八十をもつて京都に入寂した。

智慧第一の法然坊と呼ばれた身にもかかはらず、善導の「觀經散善義」に一心專念彌陀名號の句を得るや、法然は末代無智の凡夫もなほ阿彌陀佛に救はれうることを信じ、雜行雜善を捨ててひたすら念佛するにいたり、つひに淨土宗をひらいた。時に承安五年(一一三三)四十三歳であつた。

この法然をはじめ鎌倉時代初期の念佛者三十餘人を選んで、その熱烈な信仰を簡明にあつめ述べたのがすなはち「一言芳談」である。「標註一言芳談」には、「一丈の堀、一念十念むなしからずと安心決定せる人も、心口に油断なく多念をばげむべし」「二間の堀をこゆるに、二間とおもひてゆるとべは堀の中ほどに落つるなり」と説明してゐる。けれど「百里を行くものは九十里を半とす」といふ『戰國策』にいへる古詩の語(九月五日参照)に通じるものであり、これを逆にいへば「溝をばすと飛べ、危しと思へばはまるぞ」(五月三日の銘)との澤庵の一喝にもかよふものであらう。(西村幸次)

一月二十六日

農は萬業の大本なり

——二宮翁夜話——

二宮尊徳

二宮尊徳の四大門人の一人福住正兄(明治五年歿、年六十九)が師の教を筆録した名著「二宮翁夜話」に出づ。尊徳によれば、萬人が従事して差支へなき業は農業のみである。農は國家の大本そのものである。農は根であり、他の業は枝葉である。深く大地に根をおろすことなくしては如何なる道もあり得ない。尊徳はつねに物の理を農耕の道に照らし合はせて検討したのであつた。「至道は卑近にありて高遠にあらず、實徳は卑近にありて高遠にあらず、卑近決して卑近にあらざる道理を悟るべし」。かくの如く考へた尊徳は終始「農は本なり、厚くせずばあるべからず」と力説したのであつた。非常時にのぞんでいよくその立場の眞理性を確證するところに、二宮尊徳の眞面目があるのであるが、この一句の立言の如きもまたその一例といへるであらう。彼の重農主義は單なる封建的政策以上の根柢をもつてゐる。農に携はるものは農の國家的意義に深く思ひを致すべく、他の業に携はるものは農民の辛苦に對し深き感謝の念を忘れてはならないであらう。「在々村々の難澁は筆紙に盡し難く御察し下さるべく候」と書き、また「入作小作の作徳を頼みに生活を立てる賤女賤男に至つては、苗代の時より刈り收むる日まで、片時も忘るる暇あるべからず、その情、實に憐むべし。」と語つた尊徳の精神は、ながく爲政者その他の心魂にひびくものをもつてゐる。上下ともに日本の大地を離れぬ

限り、何等かの意味で我國の生命はこの句の示す精神の通り深き根柢からたえず深めらるるのである。(下程勇吉)

一月二十七日 國旗制定さる(明治三年)

よき人のしかもよくみて、定めたるこそものはよけれ

——萬葉新採百首解——

賀茂眞淵

賀茂眞淵(元祿十年(三三三)三月四日生、明和六年(四四九)十月三十日歿)の萬葉新採百首解に見ゆる句である。眞淵は遠江國數智郡岡部村に生れて七十三歳で江戸に歿して居る。二十七歳の時、初めの妻に死別し二十九歳の時、濱松本陣の梅谷甚三郎の養子となつたが、學問が好きで國學、儒學を學んで居た。偶々眞淵の友人の神官杉浦國頭の妻眞崎は荷田春滿の妹の茂子の娘であつた關係から春滿は江戸へ下る途次、度々國頭の家泊つたので、眞淵は春滿と知り、その關係から三十七歳の頃、京都へいつて春滿に師事した。元文元年(三三六)四十歳の時春滿が歿したので一旦郷里に歸り、更に元文三年(三三九)四十二歳の時、江戸に出て、それ以後歿するまで三十年間は江戸にあつた。その間春滿の甥在滿が仕を辭した後をうけて五十歳の頃から六十四歳に至るまで田安宗武に仕へた。眞淵は春滿の精神をうけ古事記による古道の研究に目標をおくとともに先づ古語を修得するために萬葉集の研究に没頭し、古語の闡明のために自ら歌文の創作を行ひ萬葉風の歌人としても名をなした。萬葉考、冠辭考、祝詞考等は主著であり、また國學の大系をば國意、歌意、語意、文意、書意の五考によつて表した。その包容的な人格が幾多の門下を養成し、國學をして近世學問の中心ならしめ

た。而してその古道研究の志は門人本居宣長によつて達成せられた。

此句の出典である新採百首解は眞淵が萬葉集の中から古道のよく現れたすぐれた短歌百首をえらんで解釋した書であつて、この句は 天武天皇の御製「よき人のよしとよく見てよしといひしよのよくみよよき人よく見つ」の註の中にある。よき人といふのはすぐれた人であるが、すぐれた人がよく見て定めたのがよいといふのである。人を得、その人の力をこめた努力によつて眞實の判断に達する。よき人は具體的には皇國の道をわきまへた人でもある。國旗の制定も眞に皇國の道をわきまへた人のよく皇國の精神をみて定めた所に日の丸の旗の萬國に冠絶する所以がある。(久松潜一)

一月二十八日 古事記撰上(和銅五年)

古に稽へて今を照らす

—古事記上表—

太安萬侶

この句は、先に 天武天皇が稗田阿禮に勅語して誦み習はしめたまへる帝皇の日繼及び先代の舊辭を、撰録して献上せよとの 元明天皇の詔が、和銅四年(三三)九月十八日、太朝臣安萬侶に下つたので、安萬侶は詔旨に隨ひ撰録にあたり、翌五年正月廿八日、『古事記』三卷として献上した、その上表に記したことはであつて、このやうに對をなすまことに本文より切り出したものである。即ち『古事記』に記し奉れる神代この方の御世御世の御事蹟を要約し奉つて後、

步驟各異なり、文質同じからずと雖も、古に稽へて以て風猷を既に頽れたるに繩したまひ、今を照して以て典教を絶えむとするに補ひたまはずといふことなし。

と申し上げてゐるのであつて、『古事記』の内容が、常に「古に稽へて」「今を照し」たまふ御統治、御教化、即ち古の御世の事に順ひ考へてそれを本として今の進むべき道を照したまふ大御業を仰ぐものであることを申し上げてゐるのである。「古に稽へて」「今を照し」たまふとは、大御業を仰ぐ上に重要なことばであることがわかる。「稽古」は漢籍に出典を見出すことばであるのに對して、「照今」は恐らくは安萬侶の立てたことばであらうが、宣命に「中今」と拜する天つ日嗣の御隆えを仰ぐ皇國史の立場を表はすにふさはしい句であると思ふ。稽古はやがて學問、體得を意味するやうになるが、われらの學問修行は、結局、皇國の古典を味讀し歴史を體認して、わが祖本來の志を繼ぎ、業を承け、皇國の道を顯揚して、以て皇運の隆昌に歸一し奉るに在る。皇國の一貫生成の道を身證し體現するものが歴史であり、古に稽へて今を照らすものが學問である。(志田延義)

一月二十九日

愚人の一徳智者の師なり

—維摩經義疏—

此句は、聖德太子の維摩義疏卷下、菩薩行品第十一の、菩薩行を説く條に、百行に云くとして註し給うた句である。

維摩經の句は「不輕未學敬學如佛」(註に不を莫とし給ふ)で、註し給うて

「慈下敬上天之大義也。所以外老亦云、不善人善人資。不愛其資不貴其師、雖智大迷也。又書云、予示天下匹夫匹婦一能勝予。又百行云、愚人一德智者之師。此四但言少異內意皆同。然則憍是惡中之極明矣」

と仰せられてある。百行といふのは明らかでないが、隋末唐初の人、杜正順の「百行章」のことではないかといはれてゐる。

維摩經の本文は、菩薩慈悲の故に空に住して空に住せず、有の活動、行にいつる様を述べてゐるのであるが、學といふことにも空が行ぜられてゐるさまを實によく示してゐる。學ぶとは全くそのやうなものである。愚人の一徳云々は、智行に於て行の貴いことをいつてゐるのであるが、その意味でも教訓とすべき語である。が、御註は更に深い意味で之を採上げ給うてある。即ち菩薩行の空の行ひ、慈悲が、學ぶといふことに現行された時、精進と敬虔の念を以てする學の態度が生れてくるのであつて、その時かなる者の所業であつても、又取るに足りぬ學であつても、それが學ぶに足り敬ぶに足りるものとなるので、愚人の言行も師とし得るのである。道に對する精進と敬虔の念がさうさせるのであつて、その根本は空の行ひにあるからである。ここからすべてが價值轉換をなして新しく見直され、惡も善の爲に存することを知り、愚人も又師なることが認められてくるのである。況してや徳行である。行を重んずる菩薩の立場から、智者の師なりといふべきである。この句の意味はよく判つてゐて、それが眞實身に信じられないといふことは、道の爲に、といふ空を行する念がないからである。自らより、道が尊いのであつて、道に敬虔な人は、眞實かく信ぜらるるのである。すべてに新たな價值を見出し、此世を豊かに益するには、まづ自らを空しうせねばならない。(筑土鈴寛)

一月三十日 勝海舟生

宜しく身を困窮に投じて實才を死生の際に磨くべし

——海舟全集—— 勝海舟

この句は「海舟全集」にある。その意味は讀んで字の如く思はるるが、海舟自身の年少時代における修行の實境を檢討するのでなければ、その眞相に觸るることはできない。海舟は二十歳頃劍客島田虎之助の門に入つたが、日中の猛稽古を濟ましてから、師の命により、嚴寒を冒して毎夜只一人で王子權現へ夜稽古に出掛けた。さうして拜殿の裏手の土臺石に腰を掛けて、沈思默考、心膽を練り、また立ちあがつて數百回木劍の素振りを試み、さらに沈思默考と木劍の素振りとを幾度となく繰り返すといつたやうな、猛烈きはまる修行をしたのであつた。そこで海舟は、山岡鐵舟を評論した際、偶々自分自身の少年時代の修行を回顧し、

「己れは是迄幾度か生死の間を出入したけれども、如何なる艱難辛苦も遣り脱けて來たよ、是れは全く此時分の修行のお蔭だ」(『鐵舟隨筆』)

「此修行の功は忽ち彼の瓦解當時に現れ來つて、様々の刺客や亂暴者にに出合つても、平氣の平左であの生死の境を往來して、見事維新の改革も其難關を處理する事が出來た」(同上)

と語つてゐるが、この生きた事實ほどよき教訓となるものはない。「艱難汝を玉にす」といふ諺があるが、この諺をそ



のまま實現したのが海舟の生涯である。(佐藤堅司)

一月三十一日

凡そ思慮は、平生黙坐靜思の際に於てすべし

—大西郷遺訓—

西郷隆盛

「大西郷遺訓」に出てゐる。その文は

「事に當り、思慮の乏しきを憂ふること勿れ。凡そ思慮は、平生黙坐靜思の際に於てすべし。有事の時に至り、十に八九は履行せらるるものなり。事に當り率爾に思慮することは、譬へば、臥床夢寐の中、奇策妙案を得るが如きも、翌朝起床の時に至れば、無用の妄想に類すること多し」とある。

これについて「とかく寝てゐて考へた妙案ほど愚なものはないのぢや」と頭山滿翁が註してゐる。常に豫め準備をしておけといふ意味である。しかし萬端に生起するものを豫め考へておく方法はないから、その準備は應變の心の準備である。この準備は、常に道を行ふといふことだと云うてゐる。

平生の志がないから、事に當つて斷行できない。押しつまつてから狼狽する。寝てゐて考へた妙案は、概して他人様のまねとなるのである。事に當つて急に對策を考へて、狼狽し、俄に調査研究といふのが、大體世の中に多いことだ

が、さういふことでは大事は行へないのである。

「平日道を踏まざる人は、事に臨みて狼狽し、處分の出来ぬもの也」「平生道を踏み居る者に非れば、事に臨みて策は出来ぬもの也」いづれも大西郷遺訓にある。

かういふ言説を、今日の状態では迂遠だと思ふ者は、我已のいのちを以て、道と神國とにつながつてをらぬからである。しかし今になつて平生を反省してみても、今さら遅いと思つて、一層狼狽するなら、おしまひである。今からその志を立てたなら、次の大事に堂々と應對し得るのである。これが迂遠の道の大事なる所以である。(保田與重郎)

二

月

二月一日

日に新に日々に新に又日に新ならん

——大——
——學——

これは聖人と稱せらるる殷の湯王（紀元前二〇六年より一〇五年まで在位）が日々用ひられた洗面手洗ひの盤に刻みつけてあつた句である。乃ち之を見て修養に勵まれたのである。人は一日一日と新しい進境が見えなければならぬといふ意である。古人は自ら誠むる銘文を日用の器物に彫りつけて、朝夕の鑑誡とした。わが國民座右銘も意味は同じである。聖人は徳の至れる者、而も日々の修養に於て斯の如く精進する。以て湯王の聖たる所以を知るべきである。夏の禹王も亦聖人であつた。而も寸陰を惜んだ。衆人は當に分陰を惜むべしとは晋の陶侃の言ふ所、聖の聖たり、凡俗の凡俗たる所以は、精進すると否とに存する。
借問す。世の老幼男女、毎朝口をそそぎ、顔を洗ひ、手を淨むるであらうが、諸賢は何の爲に之を行ふや。徒に外面の塵垢を去るのみで、心の染汚を濯ひ、善に遷ることを忘れて居るならば、日々に面貌を洗ふこと百回なるも、其の心身依然として醜陋を免れぬであらう。

この句は大學の朱子定本の傳の二章に出てゐる。朱子の言ふ所に従へば、大學は孔氏の遺書、初學徳に入るの門であつて、學者必ず是に由つて學べば、道に差はずといふ。聖人の道を學ぶものは、大學の門より入るべく、この門に由ら

ずして、齷を超えて入らんとするものは、聖學の偷盜である。

蓋し大學は士人の學である。東洋に於ける政治理念を盛つた經書として第一の書である。（鹽谷 溫）

二月二日

心は大磐石の如くおし鎮め、氣分は朝日の如く勇しくせよ

——教の五事——
——黑住宗忠——

黒住宗忠は黒住教（神道一派）の教祖。安永九年（一七九〇）（江戸時代）生る。嘉永三年（一八三〇）二月二十五日歿す。時に七十一歳。文化九年の疫痢大流行に際して兩親を失ひ、心痛のあまりみづからも肺を患ふ。醫藥效なく、文化十一年（一八二四）つひに再起不能なるを自覺し、天神、地祇、祖先を拜して従容死を待つ。然るにここに到つて忽焉として悟るところあり、いまひとたび身を養ひ大生命を自覺して生くることを思ひ、且つそれが報恩の道なることを覺つて大歡喜を覺ゆ。病は不思議にも次第に癒えてきた。文化十一年十一月十三日冬至の旦、出でて太陽を拜せしところ、日輪忽ち己が胸中に入ると感じ、いはゆる天命直受を得たといふ。この日を成道の記念日とし、以後死にいたるまで 天照大御神の神徳を天下に宣揚するを以て己の任とした。

黒住教には教旨、教基、教の五事があつて、右の言葉は教の五事（一、誠を取外すな。二、天に任せよ。三、我を離れよ。四、陽氣になれ。五、活物を捉へよ）の中の第二にある言葉である。心は大磐石の如くおし鎮めといふのは養心

法であり、氣分は朝日の如く勇しくせよといふのは養氣法であるといふ。死から蘇つた人の旺盛強烈な信念として、萬人の誠となる言葉であらう。(龜井勝一郎)

二月三日

食物をよく説くともひだるき事は直り申さず候

——不動智神妙録——

澤庵(宗彭)

澤庵禪師(二月十五日の項参照)の「不動智神妙録」に出づる句である。本書は十三章より成り、禪師が柳生但馬守宗矩に、劍道によせて、禪の心要を説き示し、且つ宗矩の缺點をよく誨へたものである。その主旨は、心の執、滯りを拂ひ、無念無分別の心をもつて劍を執るべきこと、それが忠孝の道に達することを説いたものであるが、不動智とはそれをいひ、内外の邪惡魔事はこの智によつて破せらるるとし、不動とは動顛せぬ心、動顛せぬとは一所に心を止めぬこと、常に心を空し、水の流れの如く凝滯せぬ、無執の心境を指していつてゐる。それは神の如き叡智であるので、神妙、といつてゐるのである。

句の意味は、晝餅は現實に役に立たぬ。食物の事をいくら口でいつても空腹は満たされないといふので、論より證據、口説より行ひを肝要とすることをいつてゐるのである。前云つたやうな叡智は萬人誰も本來具へてゐるものなのであるが、それが行ひの上に眞實に現れて來なければならぬのである。行ひによつて叡智はいよいよ深まる。まづ説くを休め

て實行第一とすべきである。無執無欲の行三昧そのものに成りきつて行へば、かの不動の妙智、神業にも近いものが現成するのである。

食物の乏しきを口にするより、まづ自ら作り、あるひは作るやうな助縁となるべきである。(筑士鈴寛)

二月四日 (節分)

外其の威儀正しき時は内其の徳正し

——山鹿語類——

山鹿素行

山鹿素行 後水尾天皇の元和八年八月十六日、會津若松に生る。祖先は藤原氏、中興の祖は贈從四位山鹿秀遠である。六歳、父と共に江戸に出で、九歳、林羅山の門に入り文學を修め、十五歳、小幡景憲、北條氏長につきて兵學を修めた。卅一歳、赤穂藩の兵學師範となり、九年にして辭して浪人となつた。四十五歳、その著聖教要録が治安に害ありとて赤穂に流謫され、謫居約十年免されて江戸に歸り、名聲舊に倍し、門人常に數百人或は千人に及ぶといふ。著書も亦多く、就中「中朝事實」「山鹿語類」等最も有名である。貞享二年(三三三)九月廿六日、淺草田原町積徳堂に歿す。明治四十年(三三七)正四位を贈らる。

素行の著述は文武を合せて約五百數十冊、一々枚舉に追がない。併しその一貫したる主張は、國體に基づける勤皇武士道である。故に全著悉く武士道學といつてよい。その中でこれを通俗的に解説したのは山鹿語類である。ここに引用

せる句は、その士道篇の第三章第一節、「敬せずといふこと毋れ」の中にある。即ち本文にいふ、

「すべて心性は内にして、身體の動靜視聽の物にまじはるは是れ外也。内外は本と一致にして別ならず、外其の威儀正しきときは内其の徳正し。外にみだるる處あれば、内必ず是れに應ず。唯だ外の威儀を詳に究明して、其の天則に相かなふが如く守らんには、心術の要自然に明かなるべし。云々」

大意は、人間は心と形とは同一のものであるが、いきなり心を正すことはむづかしいから、先づ形を正して、以て心を正すべしといふことである。

まことに説き得て妙。節分は立春の始め、舊套を脱して新進發足の時機である。萬事に敬しみて、先づ威容を整へ心を正し、邁進の心構をなすべきである。(廣瀬 豊)

二月五日 (立春)

天晴れぬれば 地明かなり

—— 観心本尊抄 ——

日蓮

蓮

日蓮、立正大師(承久三年〔一八八二〕二月十六日「現行曆四月六日」生、弘安五年〔一四二四〕十月十三日「現行曆十一月廿一日」寂)は世に法華宗又日蓮宗の開祖として知らる。但しそれは本人の志ではなく、「日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にも當らず」と、その言にある。日本國の東南隅、安房の海濱、小湊の漁家に生れ、幼時から、世態の變、

佛法の雜亂について疑をおこし、出家修行し、叡岳や南都で學智を研ぎ、結局この日本國を本源として、法華一乘の眞理を末法の全世界に宣布するの任、己れにありと自覺し、その宣言を故郷清澄山頂で發表した。故郷を追はれて、幕府のある鎌倉でその傳道を始めたが、その爲に他の佛徒の憎悪を受けて迫害に圍まれ、又内憂外患について幕府に諫言を呈し、蒙古來襲について警告を疾呼し、爲に暗打にあふ事二度。一度は伊豆に流され、二度目は龍ノ口で斬に處せられようとして、果さず、五十歳の時、佐渡島に遠流、二年半で赦免、鎌倉に歸つたが、轉じて甲州身延の山中に入つて隠棲。そこで國の爲、法の爲に熱禱をこめつつ門人を養成して八年餘。最後、山を出て、武州池上の里で、六十一歳を一期として入寂。大正十一年〔一九二二〕立正の諡號を賜はる。

この一句は、日蓮が佐渡遠流二年餘の中間、文永十年〔一二三三〕四月、一生弘法の中軸として述作した「本尊抄」の結尾に、力をこめた一言。一般に云へば、總て物事は、根本を把握すれば、末は自ら照明を得るといふ意。日蓮にとつてはこの言に信仰又理論の背景があるが、其等には入らず、その意義を一般に見れば、「天が晴れて日光が照れば、地上萬物皆あかるくなる」といふ自明の事である。然し世間の實情として、光があつても之に背く者、眞理だとは知つて居ても、自己に都合のわるい方面には目を閉ぢることも少くない。國民生活で云はば、國のいのち、國の道が國民生活の本源であり、光明であるから、この本の光に照らして萬民萬事各々その處を得る。然るに、各自の利害、私情偏見に執着して、爲に此の光に背くことがある。その私を滅するのは、正直に身心を光に照らし見るにある。「光があれば、暗は消ゆるぞ」「光があるぞ、暗を拂はうぞ」といふ心地を常に活き活きと保つべきである。

この自明の様な事を宣言した日蓮その人は、光に向ふ心、光を慕ふ心で一生を貫いたといふ點にも、此言の意義がある。日出の國の中でも日の先づ照りそむる安房に生れたといふ自覺。三十二歳の初夏、故郷の山頂に立つて、大洋に出

る日に向つて行つた大法の初宣言。晩年甲州の山中では、秋光爽かな空に「身のうきくもはれ」た思ひの生活など、皆此であつた。

此言をあてた立春は、冬至と春分との中間であり、春分を春の央とすれば、立春はその始め、この日に「天晴れぬれば」の心でいのちを照明し、「地明か」に、總て世事生活に光明あらしめたい。(姉崎正治)

二月六日

男子何程剛腸にして武士道を守るとも婦人道を失ふ時は一家治まらず

武教全書講録

吉田松陰

吉田松陰(文政十三年(二四九〇)八月四日生、安政六年(三三三)十月二十七日歿)は名を矩方、通稱を寅次郎と云ひ、松陰及び二十一回猛士の號を以て有名である。萩藩士杉百合之助の次男に生れ、叔父吉田大助の後をついで、山鹿流兵學師範となる。夙に外夷の東亞侵略を憤り、銳意國防に力を注ぎ、佐久間象山に師事して開國攘夷を唱ふる傍ら、國史國典を研究して尊皇の心を養つた。安政元年(三三四)三月二十八日未明、下田に於て米艦搭乗を企てて失敗し、江戸の獄より萩の野山獄に移された。翌二年の暮、萩の東郊松本村の實家に歸つて幽囚の身となつたが、爾來幽室及び松下村塾に子弟を集めて尊皇攘夷の大義を教へ、安政の大獄に坐して、遂に江戸傳馬町の獄に斬らる。享年三十。贈正四位。明治二十一年(二五〇八)靖國神社に合祀せらる。

この句は、幽室で先師山鹿素行の著武教全書的首篇武教小學を講じた際、「子孫教戒」について説いた一節から採つたもので、女子の教育が一刻も忽せに出来ないことを道破してゐる。原文には、「夫婦は人倫の大綱にて、父子兄弟の由つて生ずる所なれば、一家盛衰治亂の界全く茲にあり。故に先づ女子を教戒せずんばあるべからず」とあり、後に「子孫の教戒亦廢絶するに至る。豈慎まざるべけんや」とある。女性の役割が過小に評價せられた封建時代に、日本女性の偉大な道義的役割を強調した松陰の達見に服すべきであるが、今日の日本女性は單に一家の内治を支ふるのみでなく、妻として夫と共に國の盛衰を擔ふもの、國に捧ぐる子の母として皇國の未來を決定するものであることを自覺すべきである。國家の敗亡を手傳ふものが必ずその國の道義にくだらない女性であることに思ひを致して、日本の全女性は獻身の美德を以て家と國の内をかためなければならぬ。(岡 不可止)

二月七日

朝に道を聞けば夕に死すとも可なり

論

語

孔

丘

(孔

子)

殆んど語句の解釋の要はあるまい。論語里仁篇に見ゆる孔子(周の靈公二十年(二九六)十月二十一日生、敬王四十一年(二四九)四月二十一日歿)の語である。

孟子は孔子を評して「仲尼は己甚しきを爲さざる者である」といふが、この語の如きは甚言と言つてもよく、孔子が

如何に人として道を知ることの必要な所以を、重要視してゐたかが分る。伊藤仁齋先生の論語古義に次のやうに述べられてゐる。

多くの人は或は老衰に託し、或は少しの病氣に託し、學問が怠り勝になる。人として道を學び道を知らない者は、雞犬草木の類である。道を開き知つてこそ人たる一生を終ることが出来る。君子は死と言はずして終といふは死滅せぬ義である。世人この章を評して、朝に道を開き夕に死すとは甚だ念であるといふ。自分はさうは思はぬ。人にして道を開かぬものは人ではない。道は實に大切なものである。孔子の言は決して強過ぎはせぬ。(意解)

と。誠に道こそ人の人たる所以、相互親和の根柢、共存共榮の要諦、而して萬代不易の眞理である。アジアは何によつて一つになるか。大東亞共榮の鍵は何れに在るか。言ふまでもなく 皇道である。而して孔子の道も亦、皇道の一翼である。

父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信ジ

と諭させ給ふ五倫五常は夫子の道の根本である。(鹽谷 温)

二月八日 針供養

針に隨ふ絲のみち、夫に隨ふ女の道

道二翁道話

中

澤

道

二

道二(享保十年(三六)八月十五日生、享和三年(四三)六月十一日歿)は京都西陣の人、手島塔庵の門に入つて心學を修め、江戸に出て參前舎(關東心學の總本山)を營み、斯の教を關東、奥羽、中部の諸地方に擴め、また商人農民のみならず大名、旗本の間に普及せしめた。道二は道を以て教義の中核として、その道を心に備はる條理、地位職分に即する定規と解した。それ故に教義を道學と呼び説話を道話と言つた。『道二翁道話』の著ある所以である。

物は筋目によつて立ち、筋目は組織あるによつて起り、組織は「全體」とその使命とから来る。針だけ絲だけのばらばらでは縫ふ働きが成り立たない。絲が針に隨ふ大きな筋目の内に編込まれてこそ、針が針、絲が絲の役目をつとめることが出来、そこにやがて着物が出来、やがて健康と禮節との保全が出来……出来出来て全體に參し全體を浮び上らせるのである。夫と妻との間柄も同様である。隨ふといふのは正しく大きな筋目の中に身を置いて、正しく大きなもの働きをこの身の内に體現するの意である。だから徹し切つた聰明と捨身の勇猛心とがなくては、ほんたうに「隨ふ」とは出来ない。針供養は身をすりへらし、折れくたくまでわが分を盡して呉れた針への、ゆかしくも優しい心遣りには相違ないが、「隨ふ」心を學んで男の道、女の道を偲び、子たるの道、臣たるの道を想ひ起す嚴かな儀式でもあらねばならぬ。

因みにいふ、この句は『道二翁道話』第五編卷之中、並に『心學道の話』第二編前席にある。(石川 謙)

二月九日 仁川沖海戦(明治三十七年)

百發百中の一砲よく百發一中の敵砲百門に對抗し得る

東郷元帥詳傳

東郷平八郎

明治三十八年(三三〇)十月二十二日、横濱沖において凱旋觀艦式舉行され、十二月二十日に至つて聯合艦隊の編成を解かれた。よつて東郷聯合艦隊司令長官は翌二十一日を以て聯合艦隊の解散式を旗艦朝日に行ひ、召に應じて來會せる各司令長官、司令官、艦長、司令等に告別の辭を與へ、相共に祝杯を舉げて 天皇陛下の萬歳と帝國海軍の萬歳とを三唱して全く式を終り、なほ麾下一般に左の訓示を與へた。

二十閱月の征戰已に往事と過ぎ、我が聯合艦隊は今や其の隊務を結了して茲に解散する事となれり。然れども我等海軍々人の責務は決して之が爲めに輕減せるものにあらず、此の戰役の收果を永遠に全くし、尙益々國運の隆昌を扶持せんには、時の平戰を問はず先づ外衛に立つべき海軍が常に其の戦力を海洋に保全し一朝緩急に應ずるの覺悟あるを要す。而して戦力なるものは艦船兵器等のみにあらずして之を活用する無形の實力に在り。

これに續くものがすなはち本日の銘であつて、軍人たらん者は「主として戦力を形而上に求めざる可ら」ざる所以を説いたものである。けれど一砲をして百發百中たらしむるこそ、この旺盛なる戰鬥精神に加ふるに平素千磨必死の訓練を措いて他にあり得ないからである。(小笠原長生)

二月十日 日露戰爭開戦(明治三十七年)

卒伍として起たん

伊藤博文

大正十二年(二五三)三月二十五日子爵金子堅太郎氏は東京麻布、本郷兩聯隊區將校團總會の席上に於て左の要旨の講演をされた。伊藤博文公(天保十二年(二五〇)生、明治四十二年(二五九)死)の「卒伍として起たん」の言葉は躍如としてこの講演の中に入り敢て説明を加へずとも十分に掬み取ることが出来る。

「……明治三十七年(三三〇)二月四日午後三時、宮中に於て御前會議が開かれまして、元老を始め關係の大臣列席の上、日露開戦の決定をなされました。而してその夜六時半、伊藤樞密院議長より私(金子子爵)に電話が掛りまして、即刻私に會ひ度いから靈南坂官舎に來るやうにと云ふことでありました。私は當時内閣には列せずして一つの貴族院議員でありましたが、直ぐ参りまして伊藤議長の書齋に入りました所、伊藤議長は安樂椅子に腰を掛けて只一人限り外に誰も居らぬ。さうして下唇を噛んで下向いて考へて居られた。

私は常に伊藤公が國事に就き不安のある時の態度を知つて居りますから、此様子を見て何か今日は大事件が起つたのだらうと推察しました。其處で私は何の御用か伺ひたいと聞きました所、一言も發せられない。五分間も互に無言で向ひ會ひたるまま伊藤公は尙憂鬱何も言はれない。暫くすると女中が食膳を運んで來た時伊藤公は、君、食

事をしたかと言言はれた。はい私は済みましたと、答へた所、それでは僕はちよつと食事をするからと言つて箸を取られたが、一口箸を附けられたのみで膳を下げられて仕舞ひました。さうして尙無言で居られる。それ故私は一體何の御用ですかと再び尋ねました。さうすると漸く口を開いて、君を招いたのは國家の重大事件に付相談したいからだ。今日は御前會議で日露開戦の御裁可があつた。さうして唯今僕は御裁可を承つて歸つて來た所であるが實に日本帝國の前途は憂慮に堪へぬ。陛下も非常に憂慮を惱ましていらせらる。就ては君に至急亞米利加へ行つて、大に彼の國民の同情を惹くやう、戦争の終局まで彼國に逗留して十分國家の爲に働いて貰ひたい、君が渡航の件は既に閣議で定まつたから是非承知して貰ひたい。(中略)

それから翌朝また電話が掛つて直ぐ來て呉れと申されました。併し私はどう考へても使命を果し得る見込がないから前言を繰返して断りました所、いや君の成功の見込のあるないは今日は問ふ所でない。今度の戦争については實は陸海軍でも成功の見込はつかない、併し日露の形勢已むを得ず、日本は國を賭して戦を始めた譯で勝敗は眼中にない。あの強大な露西亞の大軍が朝鮮へ侵入すれば總て朝鮮の土地は奪はれるかも知らぬ。それ故陸軍では朝鮮にて之を防ぎ止むる戦略なれども、之が十分の成功さへ見込が定まらぬのである。我が海軍は旅順浦潮の艦隊と戦つて或は皆沈没するかも知れない。是等に對して勝算は誰もないが、博文は獨り茲に決心して一身を捧げて聖恩に報いる覺悟である。若し我軍が朝鮮にて破れて露西亞軍が侵入して來た時は、博文は昂然北條時宗の故事に倣つて自ら武器を取つて身を卒伍に投じ、又時宗の妻女の如く飯を焚いて兵卒を勞ふよう我妻に命令し、夫婦共々九州或は長州の海岸に出掛けて國の爲に戦ふ決心である。若し軍人が皆死んだならば、博文は國民と共に海岸を守つて、露軍には一步も日本の土地を踏ませない決心である。成敗利鈍は我が眼中にはない。博文の爵位も財産も生命も皆

陛下の賜物である、君の爵位も財産も生命も博文と同様なれば、同様の決心を以て國事に盡くして呉れ、と熱誠を以て説かれましたから、其處で私も伊藤公の至誠に勵まされて、成敗を問はず一命を捧げて君國の爲に盡しませうと決心して承諾いたしました」

國難茲に到り皇土夷狄に汚されんとする時は、一國の宰相と雖も身を卒伍に投ずるをよろこび、その持てる總てを大君の爲めに捧げまつり仕へまつり、誓つて 聖慮を安んじ奉るのである。そして今日只今がその秋なのである。吉田松陰先生が「聖天子上にあり、忠魂義魄下に充ち満つ、神國日本は萬代安泰なり」と申されたが、實に然り、一億總てこの決心、この覺悟、この奉公あつてこそ、神國日本は天壤とともに窮りないのである。(矢萩那華男)

二月十一日 紀元節

日本は浦安の國、細戈千足る國

——日本書紀——

大日本の讀へ名の最古いもの一つ。古代の風俗諺である。日本書紀 神武天皇卷の末に 伊弉諾尊、此國を褒めさせられた御詞から出たものと傳へてゐる。浦安の浦は宛て字で心(うら)の意、語自身は、水に關りはない。心安らなる國と云ふ義であるらしく、此國形を見舞すと、我が心自ら心安なる國との仰せであらう。其意を擴げて、民なりはひを樂しみ、憂ふることなき國と言ふ程には、古代人も感じて居たであらう。細戈千足るといふのも、すべて圓滿具足し

てゐる國、と云ふ義だとする説が、よいやうである。さうすると、細文は「ちたる」のちの枕詞である。美し梓は、
靈梓と同じで、神聖な杖である。「たまほこの」がみちにかかるやうに、此も亦道に續くのである。併し此方は、時代
によつて、立派な鋒の充満して居る國と武徳を讃める方に考へて居たことも勿論ある。又、梓は武器であり又神事の具
だから、神事武事又整備して行はれてゐる意にもとれぬではない。(折口信夫)

二月十二日 四條暇祭

武士道といふは死ぬ事と見付けたり

——葉隠——山本常朝

『葉隠』に見る本文は、死を武士道の極致とする表現の鋭さにおいては、恐らく空前絶後であらう。山鹿素行の『武
教全書』に「死を常に心にあつる事」を武士の本意とし、その門人十道寺友山は、さらに『武道初心集』第一條冒頭に
「武士たらん者は、正月元日の朝雑煮餅を祝ふとて箸を取初るより、其年の大晦日の夕に至るまで、日々夜々死を常に
心にあつるを以て本意の第一とは仕るにて候」と記して、一層この事を強調したが、武士の死の覺悟を最も痛烈に表現
したのは、山本常朝(萬治二年(三二九)六月十一日生、享保四年(三三九)十月十日大十二歳歿)である。常朝の著書『錢別』
に「御主人様へ身命を抛ち、十二時中、出息入息、無二無三、奉公三昧に成り、生きながら死にて居るが一人當千の御
被官なり」とあるのはその一例だ。『葉隠』の「武士道は死狂なり」「武士たる者は武勇に大高慢をなし、死狂ひの覺

悟なり」「武邊は敵を討取りたるよりは、主君の爲に死にたるが手柄なり」は、以上に續く適例であり、さうして、本
文「武士道は死ぬ事と見付けたり」は、それら一切の總括である。常朝の力説した死を以て仕ふる忠節の對象が一藩侯
であつて、天皇でなかつたのは遺憾であるが、死の徹底觀は参考に値するものがある。(佐藤堅司)

二月十三日 續日本紀撰上(延暦十六年)

すべて何事をいはむにも内外のわきまへなくてはあるべからず

——暇我慨言——本居宣長

「暇我慨言」は宣長四十八歳、安永六年(西三)の著述で、宣長の三大著の一つとされてゐる。天地の間に照りかがや
くべき祖國本國たる皇國の尊嚴を、中世以降儒佛思想の言よきに惑はされて、とかく外國を崇拜して之を上にし、皇
國を従にさへ考ふるやうな政治、外交、學問、思想のはびこりのため、歴史に尊外卑内の汚點を残してゐるのを慷慨
し、上古以來豊臣秀吉の遠征に至るまでの、對外關係上有りとする事蹟、文書、漢籍にまで互つて、精細に論評を加
へ、汚雲をはらつて皇國國體の尊嚴を仰いだものである。これはさういふ史論書として未曾有の名著であり、又國際外
交的に絶對尊外卑の本義を明徴にしたばかりでなく、この書によつて、皇國が天皇の大御國であるといふ大事を刻
明に書いてゐることによつて、嚴として國內の幕府思想を討つてゐる點に、非常な意味があつたので、實に稀有な本で
あつたのである。すべて一言の端々にも内(皇國)外(外國)のわきまへなくてはならぬことだといふ、短く靜

かな言葉に断々乎たる信念と決意がひらめいてゐる。かういふ國柄を古のままに明らかに明らめた宣長の功績も無上にありがたいことである。(蓮田善明)

二月十四日

口に才ある者は多く事に拙なり

——聞居筆録——
伊藤東涯

伊藤東涯は徳川中期の儒者で、寛文十年(一七三〇)四月二十八日に伊藤仁齋の長男として生れた。幼年、父の教育を受け、長じては家學を大成するを以て己が任務となし、波瀾のない學究生活を續けた人であつた。父と同じく終身民間にあつて、専ら研學と著作とに従事し、傍ら家塾に於て多くの子弟を教養した。そして父の創唱した古義學は、東涯が之を紹述し大成して堀川の一派を成すに至つたのである。丁度其頃、江戸では物徂徠が古文辭學を唱道して群儒を睥睨し、一世を震撼するの概があつたが、ただ伊藤東涯を氣にしてゐた。東涯は徂徠に對して毫も氣を揉むやうなことはなかつた。著書の主なるものは、制度通、辨疑錄、古學指要、學問關鍵、天命或問、復性辨、古今學變、經史論苑、經學文衡、詩文集、遺稿其他甚だ多い。元文元年(一七三九)七月十七日歿、年六十七。

此句は閑居筆録、卷中に出てゐる句で、

「才於口者、多拙於專、技藝尙然、學者議論可聽、而驗之事實、不相掩者多」

とある。即ち口達者な者は大體實行が伴はないことを戒めた句である。口才ある者は辯説がうまいので議論に聞く價値あるものがあつても、それは議論のみで、實行は必ず伴なふものではない。孔子は多言を誡めてゐるが、それは言行の不一致を誡めたのである。それ故、寧ろ實行が先で、言は後にあることを望む。(澤田總清)

二月十五日 シンガポール陥落(昭和十七年)

人退くとも退かず、人進めば我いよいよ進む

——東海夜話——
澤庵(宗彰)

澤庵禪師(天正元年(一五七三)生、正保二年(一三〇五)十二月十一日歿)は但馬出石の人、姓は平氏、三浦義明の裔である。一統紹滴の法嗣、慶長十四年(一六〇九)大徳寺第一座となり、寛永十五年(一三九八)召されて、後水尾上皇に法を説き奉り、御感に契ひ國師號を賜つた。同年徳川家光東海品川に寺を建て、請じて東海寺一世となした。和歌をよくし、烏丸光廣、細川幽齋と深交があつた。

澤庵の垂示語録である東海夜話(二卷)にある句である。本書は實に訓誡の語に充ちてゐて注意さるべき書である。奉公の心がけを説いた句であつて、人の難しとするところを敢てするのが、奉公の志であるともいつてゐる。又人進まば我いよいよ心を捨てずともいひ、又人の難しとし意力盡きんとして、尙たわまざるは道ある人ともいつてゐる。鐵石の意志力、不退轉の決意と共に、逞しい突進精神が説かれてゐて、澤庵の面目が發揮されてゐる。

此日、姦邪の敵英が、東亞侵略の據點として、難攻不落を誇つたシンガポール陥落の日である。怒濤の如く進撃した皇軍將士の意氣は、まさに我いよいよ進むのそれであつて、世界の難事とした攻略を忽ちに成就した。御稜威の下、皇軍將士鐵石の奉公心を志とし、一億いよいよ進軍すべきである。この日釋迦の涅槃日であり、東方に法の榮ゆることを豫言したといふが、御稜威の讚へとして、奇しき因縁のある豫言である。大東亞結團進軍の歩みは、永遠に生成進行する、神聖なる歴史の歩みに外ならない。それが大東亞の行く道であり、行ふ法である。それは一人一人の、いよいよ進むの奉公の信念が成就しつつあるものだといつてよい。(筑土鈴寛)

二月十六日 西行寂

神の御めぐみ疑ひ思召すべからず候

贈定家卿文

西

行

西行法師(元永元年〔一〇七〇〕生、文治六年〔一一五〇〕二月十六日寂)は、俗名佐藤義清、田原藤太秀郷九代の末、富裕なる武門に育ち、鳥羽院に北面として仕へ、歌詠射御蹴鞠にすぐれた才能を稱せられたが、二十三歳出家してよりは、或は野山に入つて佛道に參じ、出でて諸國に杖をひいたが、歌名すでに一世に高かつた。常に朝家に度みの心を忘れず、時に野山より晏駕の列に參し、展尊貴の陵墓に展じて誠恭の心を失はなかつた。晩年は神路山をしたひ伊勢に住み、その生涯の詠歌から自撰して、御裳濯河、宮河の二の自歌合をつがへ、内宮外宮に奉納しようとして、前者を藤原俊成に、

後者をその子定家に囑して判を乞うた。俊成の判成り、ついで定家の判が病んでゐる西行の許に届けられた。その喜を記して定家に贈つた書簡が「贈定家卿文」として傳へられてゐる。即ち、今日の此の句はこれから採られてゐる。赤誠は神に通じる、感應あらたかなる神々の御恵を疑ふなどいふのである。國民の誠忠報國の精神の感應によつて、奇蹟を生み神風をおこしたる事實は、日本歴史上に數々の例證を持つばかりでなく、現に我々は大東亞戰爭に於いて、神々の御恵を、まさやかに見聞してゐるのである。正に神助疑なきものがある。

西行は文治六年〔一一五〇〕二月十六日河内弘川寺で、「その如月の望月の頃」とかねて願うた如く、七十三歳を以て入寂した。即ち今日は其日である。(伊藤嘉夫)

二月十七日 祈年祭

狭き國は廣く、峻しき國は平らけく

延喜式祝詞

醍醐天皇延喜五年〔一一六五〕八月の勅により、延長五年〔一一五七〕十二月に功成つて撰上せられた『延喜式』所收の祝詞のこ
とば。祈年祭並びに六月、十二月の月次の祝詞の中で、先づ生島の御巫の奉仕する生國、足國の神に申し上げること
ばとして、

皇神の敷き坐す嶋の八十嶋は、谷蟻の狭度る極、鹽沫の留まる限、狭き國は廣く、峻しき國は平らけく、嶋の八十

嶋墮つる事無く、皇神等の依さし奉るが故に、皇御孫命のうづの幣帛を、稱辭竟へ奉らる

と宣べてある。ここに地の果、海の涯まで、せまい國は廣くなるやうに、けはしい國は平らになるやうに、國土の生成發展を掌らるる神々も、この御業を以て皇御孫命に奉仕せらるることが明らかにせられてある。この國土の無窮の生成發展は、同時に道義の樹立せられゆくことを表はすものであつて、皇國日本の生成發展と、神も人も大御業に歸一し奉る皇運扶翼と、大御稜威に生くる者をしてその道を得、その所を得しめたまふ 天皇の御統治、御教化とは、更に右に續いて、辭を改めて 天照大御神に申し上げる部分に表現せられてゐる。即ち

皇神の見霽し坐す四方の國は、天の壁立つ極、國の退立つ限、青雲の靄く極、白雲の墜坐向伏す限、青海原は樟柀干さず、舟の艦の至留まる極、大海原に舟滿ちつづけて、陸より往く道は荷の緒縛堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至留まる限、長道間なく立ちつづけて、狭き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打掛けて引寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば、と宣べてある。

なほ祈年祭の祝詞のこれらの表現は、『古事記』の上表や『萬葉集』の山上憶良の歌などに用ひられて、昔から行はれてゐる様子が窺はるる。(志田延義)

二月十八日

鈍刀の骨を切る必ず砥の助に由る

— 三教指歸 — 空海 (弘法)

弘法大師空海(寶龜五年(四四四)六月十五日生、承和二年(四九三)三月廿一日寂)は讃岐の人、姓は佐伯氏。延暦二十三年(四四四)(三十一歳)支那に入り、大同元年(四六六)(三十三歳)歸朝した。其後に於ける空海の活動に就てはここに改めていふまでもないが、日本思想史文化史上に印した足跡は甚だ巨大なものであつた。

この句は、空海二十四歳の時、延暦十六年(四四七)十二月に成つた三教指歸(三卷)に出でてゐる。三教指歸の思想は、空海十八歳の頃にすでに成つてゐたものであるが、發心の動機を同胞知己に發表し宣言したもので、儒道佛三教の優劣を論じ、各思想を代表する人物を假構して對論せしめ、問答小説ともみらるる形式をもつてしてゐる。

これは「兎角公」なるものが、「龜毛先生」に教を乞ふところにあつて、なかなか口を切らぬ龜毛先生に懇に頼む時の言葉であるが、その次に「重き輅の輕く走るは抑亦油の縁なり」とある。

すべてものの用、活動は縁によつて發揮される。鈍刀の用に立つのは砥の助があるからである。又別にいへば砥の用を發揮するのは切れない刃物があるからである。物事すべてに相互關聯して面目が發揮される。それが縁である。つまり縁といふのは、この世に於ける一切のものが有機的にかかはりあひ、一つの統一をもつてゐることを示してゐる。よ

き縁を世の中に與へ、よき縁に自らも與り、以て自他一體に推進すべきがこの世である。かかる場合、悪い縁もそのまま善縁に轉じえらるのであつて、鈍刀といへども役立つのである。一人一人がよき縁のために存在するものであつたら、世の中に無駄と見ゆるものは何一つもなくなるのである。又自分だけで生きてゐるのでなく、縁によつて生かされてゐるものであることを、はつきり知る必要がある。(筑土鈴寛)

二月十九日

學道勤勞して他事を忘るれば病も起るまじきかと覺るなり

——正法眼藏隨聞記——

道

元

道元が宋の天童山に學んだ折のこと、極寒極熱には發病の恐れがあるとて、みな身學道を放下する慣はしであつた。——われ其の時自ら思はく、設ひ發病して死すべくとも、猶只是れを修すべし。病ひ無うして修せず、此の身をいたはり用ひてなんの用ぞ。病ひして死せば本意なり。修し死に死して、よき僧にさばくられたらんは、先づ勝縁なり。身を全うし病起らじと思はんほどに、知らず亦海にも入り横死にもあはん時は、後悔いかん。——かくの如く案じつづけて、思ひ切つて晝夜に行じたが、少しも發病しなかつた。今各も、一向に思ひ切つて勵んで見よ。——かう言つて、道元は一座の弟子達を見渡した。隨聞記の中に、弟子の懷契が、これを書きとめてゐる。七百歳の後、まことに懦夫をして起たしむる話である。

學道勤勞して他事を忘るといふのは、修し死に死ぬといふ大決心である。道元は、この大決心に隨つて病も轉ずるかと思ゆるなり、と言うたのである。身を以て古人の示した道であるから、み國の大事に勤勞するもの座右に銘して、わが身心の無限の鼓舞とするにこよなく尊い言葉である。(田中忠雄)

二月二十日

人は巧にして偽らんよりは、拙うして誠あるに如かず

——會我物語——

この句は會我物語卷八「祐經を射んとせし事」の條に引かれて居る。これは、その讀み方に従つたものである。韓非子には「巧詐は拙誠に如かず」とある。故に「上手な胡魔化しよりは、下手ながらも誠意あるがよい」と言ふ意味で、「巧」と「拙」とは、字面の上から對に用ひたに過ぎない。要は「嘘や胡魔化しは駄目だ。誠心誠意が大切だ」と言ふのである。會我物語は「詐り」を「偽り」に改めて通俗化して居る。

この句の作者は不明である。三國志の魏志の、劉曄傳の註には「諺に曰く、巧詐は拙誠に如かず」とあるから、本來は支那の古い諺であつたらしい。韓非子がこの句を用ひたのは、次ぎの様な事情の際であつた。それは韓非子卷七、説林の上篇なる「樂羊といふ者、魏の將となつて中山を攻む云々」の條に見えて居る。

樂羊は、魏の文侯の將となつて、中山といふ處を攻めた。その時に樂羊の子供は中山に居た。中山の君は、この子供を

高い處に懸けて樂羊に見せ、攻撃の心を鈍らせようとしたが、却つて逆に樂羊は愈々急激に攻撃して來た。因つて中山の君は、遂にこの子供を煮て樂羊に送つてやつた。樂羊は平然として使者の面前でその一杯を食べた。(淮南子には、ペロリと三杯食べたとある)。ここに至つて中山の君は「その子の肉をすら食ふ。誰をか食はざらん」とて、遂に降参してしまつた。樂羊の行爲は壯とすべきも、人情を巧に詐つたと見て、文侯は樂羊の功を賞しながらも、その心を疑つた。又、魯國の大夫である孟孫が狩に出て鹿の子を獲て、秦西巴といふ者に持ち歸らせた。然るに、母鹿が啼いて慕つて來たから、秦西巴は逃がしてやつた。可愛さうでたまらなかつたからである。歸宅後、その由を孟孫に告げた。孟孫は立腹し、秦西巴を解雇して追ひ拂つた。それから三箇月後(淮南子には一年後とある)に、又呼び戻して、子供の「もり役」に任じた。人々は怪しんで「前には罪人扱ひにして、今度は、大事な子供の『もり役』とするのは、どういふわけか」と問うた。孟孫は「鹿の子にすら忍び得ない同情がある。況して人の子たる自分の倅に於てをやである」と答へた。これは、主人の命令に反したりして、そのやり方は拙いけれども、人の誠の心から出た行爲である。樂羊の場合と、丁度反對になる。

故に「巧詐は拙誠に如かず。樂羊は功有つて疑はれ、秦西巴は罪有つて信ぜられた」と述べて居る。韓非子は戰國時代の人で、秦に使した事もある。又、その撰にかかると二十卷の書も、韓非子と言はれる。

この語は、その後、劉向の説苑卷五貴徳篇にも、同卷十六、説叢篇にも見えて居る。それに次いで、前記の魏志である。樂羊の事は、呂氏春秋卷十六悔過篇にも見える。又、この諺は無いが、樂羊と秦西巴との説話だけは淮南子卷十八、人間訓にも出て居る。これに類した形のものに「巧遅は拙速に如かず」と言ふのがある。(山岸徳平)

二月二十一日

一日延しは時の盗人

—うづまき—

上

田

敏

上田敏(明治五年(三三)生、大正四年(三三)歿)英文學專攻の學者であるが、後、大陸文學紹介者、特に譯詩家として明治の新詩壇に貢献した。京都帝國大學文學部教授。句はその唯一の創作小説で高踏的な教養小説「うづまき」の會話中の一節、

「一日延しは時の盗人、明日は明日は明日はか」

の前半を採つた。原典の一句全體の意味は、世上一般の人々が人生の急務を怠慢に附して刻々偷安の生を食つて、緊張した第一義の生活を忘れてゐるのを冷嘲し、柔かに咎めたのか。否、むしろ自戒し自嘲した口吻であるが、このなまぬるい口調が今日の時勢に合はないのを嫌つたのであらうか、難解としたのであらうか。一見無用の如く實は重要な後半の部分を削り去つたから、終に眞意を失ひ「時ハ金ナリ」とか「忽チニ事ヲ處スベシ」とか、又は「一寸ノ光陰輕ンズベカラズ」などの陳套平板な處世訓を輕妙に言ひ直しただけのものやうになつてしまつたとも見られるが、自身の手になる言葉が、こんな意外な姿で世上を通行するのを柳村先生は地下で溫雅に微笑さるであらう。(佐藤春夫)

二月二十二日

君子の徳は風なり、小人の徳は草なり、草之に風を尙ふれば必ず偃す

論語——語——孔子——(孔子)

論語顔淵篇の句。魯の大夫で久しく權柄を執つた季康子と孔子との問答に出てくる。この前後三章とも季康子が政に就いて質ねてゐる。季康子がいふ。

「この頃、國內がどうも穩かでない。これは無道の小人がはびこつて、正義の士を迫害するからである。この際無道の者を殺して善良な人々を用ひようと思ふが、どうであらう」

と。孔子は對ふる。

「それは面白くない。政に人を殺すといふことは、已に行き過ぎである。唯上に立つものが自らを修めて不正不義を行はず、率先して善を爲せばよい。下々は自ら化せらるるであらう」

と、そして次に「君子の徳は風云々」と述べてゐる。

説苑の君道篇にも「上の下を化するは、猶ほ風の草を靡かすがごとし。東風なれば則ち草靡きて西し、西風なれば則ち草靡きて東す。風の由る所に在りて、草之が靡を爲す」とある。

此處にいふ君子小人は位を以ていふので、君子は官吏、小人は一般民衆の意である。民衆は必ず爲政者の下風に從

二月二十三日

勇者は外をあらくせず

武訓——貝原益軒

ふ。ここに注意すべきは孔子は「君子は風、小人は草」とは言はず「君子の徳は風」といふ。暴風にも草は靡く。然しここは徳風である。南風である。仁風である。惠風である。

徳治主義は實に東洋政治理念の根本、王道の源泉である。(鹽谷 溫)

世には粗暴な態度を執る人が往々あるもので、ちよつと勇者の如く思はるるけれども、さういふ人は決して眞の勇者ではない。眞の勇者は沈着にして何處か奥床しい所のあるもので、而してさういふ人がまさかの時には眞の勇者となつて立派な働きをするものである。

第一勇者といふものは先づ己に克たなければならない。己に克つといふのは、誰でも私欲私情などの少しも起らないといふことは無いものであるが、その私欲私情に打克つて、それを徹底的に抑制して沈着な態度を執る人は即ち己に克つた人である。己に克つた人にして始めて外敵に膺るべき資格がある。一體私欲私情に打克つと否とは賢愚聖凡の分る所である。

此の名言は『武訓』の下巻に見えて居るが、『武訓』の著者益軒は寛永七年(三三〇)に生れて同じく正徳五年(三三五)に

歿した人で、今から約二百五十年前に生存して居つた人であるが、徳望一世に高く、八十五歳の長壽を得て他界したのである。益軒は謙遜な立派な性格の人であつた。曾て上方より郷里の福岡に歸る時に、船中に諸種の人と一緒に居た時、青年の學者が頻りに『經書』を講じて人に説いて居つた。益軒も衆と共に黙つて之れを聴いて居つた。馬關に上陸するに及んで、相互に名刺を交換した時に、青年の學者は益軒の名刺を見て大いに恥ぢて倉皇として立去つたといふやうなことが傳へられて居る。如何に益軒が謙徳の勝れて居つたかを知ることが出来る。この人は決して外をあらくするやうな人ではなかつた。(井上哲次郎)

二月二十四日

只臨終の夕までの修行と知べし

獨言——上島鬼貫

鬼貫の傳については八月二日の項に述べて置いた。この言葉はその著獨言の中に次のやうな形で出てゐる。

「俳諧をする人、あらましにもいひこなせば、はや得たり顔に止まるあり、無下にほいなくぞ侍る。或時は句もなりやすきやうにおぼえ、又或時はひたすらなりがたくもなり侍らん事幾かはりも有ぬべし。深く入なん人は其程々に功つもりて、猶むつかしき事を覺侍らん。修行の道に限りあらざれば至りて止まる奥もあらじ、只臨終の夕までの修行と知るべし」云々。

少しでもやうになると直ぐお天狗になるのは、何の道でも變りはない。しかし八月二十六日の條にも述ぶるやうに、藝道上の精進は身を終るまで止まる期は無いのであつて、所詮は臨終の夕までの修行である。この苛烈な鍊成道精神は、日本のすべての藝道を貫くものであるが、ひとり藝道の上ばかりでなく、今日の時局にあつてあらゆる國民の上にこれを弘通せしめたい。若いうち懸命に働き小金をためて、老後を安樂に送らうといふやうな俗物的根性を排して、私達はいまどこまでも働き抜かなければならない。働いて働いて、そして斃れて後止むばかりであるが、この精神は、日本の藝道の上には昔からあつた。一藝に達した人の生涯はみなかかる敢闘精神によつて貫かれてゐて、鬼貫のこの言葉も、それをいつてゐるのである。俳諧は學ばずとも、このきびしい心構へを學んで欲しい。(伊東月草)

二月二十五日 菅原道真歿

未だ曾つて邪は正に勝たず

菅家後草——菅原道真

菅原道真は醍醐天皇の昌泰四年(一〇一五)(七月改元、延喜元年となる)正月二十五日、太宰權帥として流された。その年九月十日には、「九月十日」と題して「去年、今夜侍清涼云々」を作り、同十五日には「秋夜」と題して「黄菱顔色白霜頭云々」を作つて居る。その十日乃至十五日の間に作つた「叙意一百韻」と題した詩の中に、この句が出て居る。その時、道真は五十七歳であつた。

道眞は 宇多天皇の寵を辱うし、儒門から出て遂に右大臣に昇進した。異数の拔擢である。萬人、眼を側つるのは、當然と稱すべきであらう。即ち、源光は 仁明天皇の皇子であり、藤原定國は、高藤の子にして 醍醐天皇の外舅であるが俱に道眞の下に在るを潔しとせず、苟に含む所があつた。又、藏人頭藤原菅根は、元來は道眞の推舉によつて侍讀ともなり、榮達もした者であつたが、嘗つて庚申の夜、頬を打たれた事によつて、道眞を恨む所があつた。これ等の人々と相結んで、時平は、屢々、道眞を讒奏する事があつた。加ふるに、道眞には 今上の御弟、齊世親王を立て奉らんとするの隱謀がある由を、密奏する者があつた。齊世親王は、橘廣相の女の御腹で、道眞の御婿に當らせ給ふ方である。かかる機微を察したのであらうか、かつて文章博士三善清行は、昌泰三年(二五〇)十月十一日に、一書を裁して道眞に贈り、辭職を勸告したのであつた。然し、道眞はこれに従はなかつた。(六月二十日、仲尼の智も云々の項参照)かくて道眞は、右大臣の大將を奪はれ、太宰權帥として左遷せられ、延喜三年二月二十五日、配所に於て薨じた。年五十九歳。

菅家後草は又菅家後集ともいふ。西府新詩といふのが原名である。道眞が太宰府で作つた詩文を纏め、薨するに臨んで封緘して、中納言紀長谷雄に送つたものである。叙意一百韻は、左遷が意外であつた事を述べ、且つ悲しみ且つ歎いて「落涙、朝露を欺き、啼聲、杜鵑を亂る」と言ひ、又、悪名は除きたいものだと思つて、「未だ曾つて、邪は正に勝つた例がない」と、自ら慰むる所があつたのである。「曾つて」は「とても」とか「到底」の意味の副詞である。この句は大鏡に見える海ならすたゞよふ水の底までも、清き心は月ぞ照らさんとある歌にも通ふ心情である。蓋し、邪が正に勝たぬのは、古今不變の眞理である。「正直の頭に神宿る」といふにも等しい。この句は支那の文獻に出典があるかとも思はるるが、さうでなくて、道眞の造語の様である。(山岸徳平)

二月二十六日 室鳩巢生

道理にて極めたる事は、たとひちがひても後悔なかるべし

——駿臺雜話—— 室鳩巢

鳩巢(萬治元年(二三八)生、享保十九年(二五〇)歿)は徳川幕府の儒員。名は直清で滄浪、駿臺の號がある。木下順庵門の朱子學者で、將軍吉宗の侍講として眷遇甚だ厚かつた。明治四十二年(二五九)に従四位を贈られてゐる。この句の出典である「駿臺雜話」五卷は享保十七年(二三〇)成立、寛延三年(二五〇)の刊行で、道義をすすめ修身齊家に資する目的で書かれたものである。行文も勁拔で隨筆として愛誦するに足る。この句は卷二の一節で、「しあはせをたのみては覺悟も定まらぬものなり」と續く文章である。事の成就を願ふあまりに道理を見失つては、たとひ成功しても快くない。道理に従つて事を行へたとひ失敗しても悔ゆるところのないのが日本人である。(暉峻康隆)

二月二十七日

信ずるは力なり

精神界——清澤滿之

明治維新の當初、いはゆる廢佛毀釋なるものが全國に行はれ、僧侶たちは甚しい困窮に陥つた。これは、一方ではわが國惟神の古義によつて祭祀、信仰のことを司つてゆかうとする神道の復活であるとともに、他方において江戸時代以來墮落に墮落を重ねてきた當時の佛教界に對する一大痛棒でもあつた。これによつて佛教界は内外ともに淨化され、新しい信仰の灯を點するにいたつた。その最初の灯を福田行誠（十一月一日の銘参照）とすれば、第二のそれは井上圓了（十一月五日の銘参照）や原坦山、村上專精、南條文雄らによる佛教の「學」としての復興である。それをさらに「行」として確立した人こそ、清澤滿之にほかならなかつた。

清澤は眞宗大谷派の僧、明治二十年（三〇七）文科大學東大哲學科を卒へ、翌年京都大谷尋常中學校長となり、兼ねて高倉學寮に哲學を講じた。のち、宗門の教育および行政に盡瘁したが、三十三年東京本郷に浩々洞をひらき、同志門下と雑誌「精神界」を發行、當時の功利的文明思潮にたいして精神主義を唱へ、宗教界を風靡した。明治三十六年（三五三）六月六日、肺を病んで歿、年四十一。

信ずるは力なり——これこそかれの生涯と精神の結晶であり、「歎異抄」における親鸞の信仰を明治時代に生かし耀

かした源泉であつた。信とはひとつの力である、行爲となつて顯現する勁い力である。（西村孝次）

二月二十八日 千利休死

家は洩らぬ程、食事は飢ゑぬ程にて、足る事なり

南方錄——千利休

利休（大永二年〔三〇八〕生、天正十九年〔三五二〕二月二十八日死）は通稱與四郎、宗易といひ、拋釜齋・不審庵と號す。堺の魚問屋千與兵衛の長男として生まれ、北向道陳及び武野紹鷗に茶の湯を學び、自からまた一家を成し、信長及び秀吉に仕へ、のち利休居士の號を授けられ、天下一の茶匠と謳はれたが、天正十九年〔三五二〕故あつて罪せられ、二月二十八日に自刃して果てた。時に歳七十。茶道を通じて日本人の生活文化を建設した偉人である。南方錄は、門弟南坊宗啓が茶の湯に關する師の口傳を覺書にしたもので、前半には利休校閲の極めがあり、千家茶道の祕傳書として名高い。この句は、茶會の規模の大小如何に就いての宗啓の質問に對し答へたもので、精神本位の茶の湯は草の庵の小座敷で催すに越したことはない。茶の湯の極地は佛法の修得にある。家居の結構や食事の珍味を楽しむとするのは俗世のことである。家は雨の洩らない程度、食事は飢ゑない程度でよい。それで満足し感謝してゐるのが佛の教へであり、茶の湯の本意である。元來、茶の湯は、禪僧が佛に仕ふる行事から起つたもので、僧侶が水を運び、薪を採り湯を沸かし、茶をたてて佛に供へ、人にも施し我も飲み、花を立て香をたく、といつた修業の精神を一般の人間生活の上に移し植ゑたもの

に外ならない、と茶道の本義を説明したのである。

茶の湯は、祖先以来日本人の實生活に浸潤した生粹の藝道であり、その根本精神は、決戦體制下のわが國民生活改革の鍵となるものであると信ずる。茶の湯といふと、世間では、すぐに贅澤や遊樂を聯想し勝ちであるが、それは、本當の意味を誤解してしまつてゐるからだ。人間本來無一物、萬事感謝の心を忘れず、家は洩らぬ程、食事は飢ゑぬ程にて満足し、食欲の煩はしさから超脱してこそ、茶道の奥儀に徹し、眞の幸福感は得らるのである。茶聖利休の名句、漱し味はふべきではなからうか。(桑田忠親)

二月二十九日

己れを潔くせんと欲して大倫を亂るは異端なり

——山鹿語類—— 山鹿素行

これは山鹿語類士道篇附録の「先生自警」章に出てゐる句である。先生自警とは、素行先生が自ら格言を作つて、自分の日常生活を警めたものを、門人が語類士道篇の附録に載せたといふ意味である。自警は全部で十五條ある。その第十一條に、

「己れを潔くせんと欲して大倫を亂るは異端なり。己れを立てんことを欲して衆人を顧みざるは不仁なり。己れが名聞を達せんことを欲して舊官(舊慣)に背くは不忠なり。己れの孝を先にせんと欲して親族と與にせざるは不孝なり。

り。一善を行ひて之れに伐るは不知なり。義を見て爲ざるは勇なきなり」(原漢文)

と。己れ一個人を満足させる爲に、他人を、又一般の風俗習慣、道德を顧みないのはよくない。例へばよくある事であるが、無欲恬淡の心を満足せしめんが爲に、世に出でず、國家の危急も顧みず、山間に隱居するが如き、或は又質素を行過ぎて禮容を缺くが如きは、自分の心持には恥ぢないかも知れぬが、人倫の大道は全くしたものである。本文の最後に異端と記したのは、人間の正道と違ふの意味である。(廣瀬 豊)

三
月

三月一日 滿洲建國祭

誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり

——中庸—— 庸—— 子思

宇宙萬物一切のものにわたつてその中心をつらぬく根本精神は誠である。誠とは言ふまでもないが、眞實無妄なる「まこと」である。人は生れながらにして此の誠を本性の中に具へてゐる。天賦天稟の誠である。然し琢かぬ玉は光を發しないやうに、此の誠も放任してゐた儘では十分にその徳性を發揮することは出来ぬ。もつとも天性聰明叡知の聖人は、此の天より受けた誠の性を完全に充實して發揮することが出来る者であるが、賢人以下は努力勉強によつてこれを充實發揮することを勉めねばならぬ。その方法を中庸では博學、審問、慎思、明辨、篤行の五者によつて示し、又「人一たびして之を能くすれば、己れ之を百たびし、人十たびして之を能くすれば己れ之を千たびす」と謂つてゐる。これが「之を誠にする」賢人以下の努力の道である。孟子は子思の學統を繼ぐ者であるが、此の句は「誠は天の道なり、誠にせんことを思ふは人の道なり」(離婁上篇)と云つてゐる。中庸は孔子の孫の子思(皇紀三百年前後、周の顯王時代)の著す所の書である。もと禮記の中の一書であつたが、其の内容の秀れてゐる故を以て、宋の朱子が同じく禮記中の一書である大學と共に表彰して之を單行の書と爲し、論語孟子に配して四書と云ひ、五經と並べて四書五經と云ひ、東洋古典の最も權威あるものと爲したのである。中庸の誠の思想は東洋精神の根幹を爲すものである。(高田眞治)

三月二日

文は人なり

——樗牛全集—— 高山樗牛

高山樗牛、名は林次郎、明治四年(二三二)一月、羽前莊内鶴岡に生れた。東京帝國大學哲學科に在學中、「瀧口入道」の一篇を以て、文名を得、卒業後は雑誌「太陽」に據つて文明批評の筆を揮ひ、また「世界文明史」、「倫理學」、「近世美學」等の著述を物した。明治三十五年(二三三)十二月二十四日、病を以て逝いた。享年わづかに三十二歳であつた。遺志によつて、駿州興津に近い龍華寺に葬つた。

「瀧口入道」の一篇を以て出發した樗牛は、冷淡な哲學者ではなくて、平家に泣き、近松に泣き、佛陀に泣き、菅公に泣いた純情な詩人批評家であつた。「櫻井驛の訣別に忠孝の義烈を感じたる涙は、即ち蜷川の夕風にまゝならぬ戀路を叩つた涙なり」といふのが、樗牛の面目であつた。樗牛の日本主義も、さういふ浪漫主義が、國家主義の論理をまとうたものであつたから、論理に倦きると、樗牛はまたニイチエや日蓮へ轉々して行つた。「げに文は人なりけり」は、樗牛が日蓮の文章を評した言葉で、「上人の文は文に非ずして精神也」と言つてゐる。「文は人なり」といふことは、文章の上での一大事であるが、人とか精神とかいふことより先に、みたまわれの悲願が大切なことを、樗牛は十分自覺せぬままに逝いた。樗牛の日本主義のはかなかつた理由も其處にある。心すべき點である。(淺野 晃)

女はやはらかに心うつくしきなんよき

源氏物語 紫式部

紫式部は藤原爲時の女、その生歿年月日は不明であるが、大體貞元三年(一三六)前後に生れ、長和五年(一三六)前後に四十歳位で歿したらしい。二十一二歳の頃、藤原宣孝に嫁し、一女賢子(後の越後の辨即ち大貳三位)をあげたが、間もなく夫に死別。寡婦生活の中に、源氏物語五十四帖を著し、寛弘四年の十二月二十九日、中宮彰子に仕へ、同五年後一條天皇御降誕、同七年 後朱雀天皇御降誕の御模様を日記に書いた。

「女はやはらかに心うつくしきなんよき」といふ言葉は、源氏物語宿木の巻に見え、匂宮が中の君を教へられた語である。「心うつくし」は、すなほな、無邪氣なといふ意味で、美麗なといふ意味よりも深い。女は柔順であれといふのは、紫式部の婦道觀の根本をなすもので、末摘花、紅葉賀、初音、常夏、若菜上、柏木、夕霧、竹河、總角、宿木、東屋などの諸巻にそれぞれ一箇所又は二箇所出でゐる。この考方は、紫式部日記にも見えてゐるが、ひとり式部のみならず、平安時代の女子教育の理想となつた觀念であつた。(池田龜鐘)

何事も本つ心の直きにかへりみよ

國意考 賀茂真淵

賀茂真淵(一月二十七日の條にある)の國意考の結末の句である。國意考は歌意考、語意考、文意考、書意考とともに真淵の國學の體系を表して居るが、殊に國意考は真淵の國家的精神が表れて居り、國學の根本精神を説いた書であり、萬葉考とともに真淵が歿するに至るまで力をそそいだ書である。明和元年の書簡にも

萬葉註、或は國意といふものなどを寸暇には書候。是は生涯の願に候へば筆を起候へ共寸暇無之候へば、いつ終らんともなく命かぎりに考可申候。

とある。「何事も本つ心の直きにかへりみよ」といふのは短いがこの句の中に真淵の精神をよく表して居る。本つ心といふのは皇國の本來の精神である。神の肇め給ひし皇國の本來の精神である。肇國の精神こそこの本つ心である。かういふ本つ心は直くして少しの曲れる所がない。明淨直は智慧の明らかな點と感情の純粹さと、意志の率直さとの一體になつた境地であるが、かういふ點は本つ心に備はつて居る。特に本つ心の直きを顧み、そこにすべての根柢を見出し出發の基礎となすのは何よりも必要であるとの意である。

真淵は歌に於ても眞實なる感動の率直なる表現をますらふりとして尊重して居るが、かういふ點は本つ心の直きを

重んずる精神と一致する。ここに眞淵の古道論の根本があり、國學の精神の基調も存する。一句千鈞の重みのある所以である。(久松潜一)

三月五日

怠惰の時は怠惰を知らず

丙寅録——春日——

人は怠けてゐる時は、怠けてゐるといふ自覺がない。自覺があれば怠けてはゐられぬといふのである。怠惰のものは志なき徒輩であり、志あるものは常にその嚮ふところを指して緊張してゐる。孔子の弟子の宰予が晝間寢室に入つて樂樂と寝てゐた。孔子はこれを知つて、「朽ちた木はどんな上手な人も細い雕刻を施すわけにいかぬ、糞土を以て拵へた土塀は鏝をあてることができぬ」といつて叱りつけたと論語にある。つまりその志に倦むを戒めたのである。今日は疲れた、今日だけならよからうといふ。これが志のない證據である。志あるものは終始一貫その事に勵精し、毫も安佚を求めない。安佚に居るものは安佚に慣れ、その自ら怠惰なることに氣がつかない。深く自省自覺すべきである。この句は、春日潛庵の語録、丙寅録に

「怠惰ノ時ハ怠惰ヲ知ラズ、怠惰ヲ知レバ則チ怠惰ナラズ矣」

とある。潛庵名は仲襄、字は子贊、文化八年〔西曆一八三二〕公家久我氏の大夫の家に生れ、十七にして崎門派の鈴木恕平に就

いて朱子學を修めたが、王陽明文錄抄を讀むに及び、遂に陽明學に歸した。幕末勤皇の事に力を竭くし、安政大獄の厄に遭つたが、櫻田の變後、時勢亦一變して赦免となり、西郷、大久保其他の志士とも相往來した。維新後、召されて奈良縣知事となり、幾許もなく辭して優遊餘生を送り、明治十一年〔西曆一八七八〕三月廿三日、六十八歳を以て歿した。贈正四位、王學の大家として有名である。(土屋竹雨)

三月六日 地久節

大和心し長くば

後拾遺和歌集——赤染衛門

赤染衛門の歌

さもあればあれ大和心しかしくば細ちにつけてあらずばかりぞ

からとつた一句である。作者赤染衛門の傳は詳ではないが、平兼盛の女で、大隅時用の養女で、大江匡衡(長和元年〔西曆一〇三二〕歿、年六十一)の妻になつたことは確かである。藤原道長の室倫子の女房になり、後上東門院彰子に仕へた。「榮華物語」の作者かとも言はるるが定かではない。歌に秀で「赤染衛門集」がある。この歌は子どもの乳母にならうと言つて來た者が、乳が細いので、どうしたらよからうかと迷つた夫の大江匡衡が「はかなくも思ひけるかなちもなく博士の家の乳母せむとは」と詠んだのに對する返歌である。大江匡衡は漢學にも通じ、歌もよくした博士である。乳

と智とをかけて言つたのである。妻の赤染衛門がこれに答へて假令乳は細くとも大和心さへ優れてゐれば、よいではありませんかと答へたのである。やまとごころといふのは、今日言ふ大和魂のこと。肉體の機能のすぐれてゐることもよいには相違ないが、その精神が、その大和魂がすぐれてゐればよいではありませんかといふのである。「かしこし」は「優れてゐる」の意味。乳母を選ぶにも精神の優秀なのを選んだ古人の心を貴ぶべきである。我々は技能と共に精神を忘れてはならない。地久節の銘としてふさはしい。(茅野雅子)

三月七日 中江藤樹生

天地の大徳を生といふ、人を受け以て孝徳となす

孝經啓蒙 中江藤樹

これは中江藤樹の『孝經啓蒙』に出て居る文句で、孝徳の見方が普通の人々と大分違つて居る。天地の働きはなかなか廣大無邊のもので、一秒たりとも止まることなく、無始無終に亘つて萬物を發生するのである。易の繫辭に、「生々之を易と謂ふ」とあるが、あれは天地の大徳を形容したもので、生々發展は宇宙の大生命である。藤樹は孝徳を非常に廣大に見たもので、『孝經援神契』といふ書物に、「元氣混沌、孝、其の中にあり」といふ文句を引いて孝徳を説明するが藤樹の立場である。云ひ換へてみれば、藤樹は孝を以て天地萬物の生々發展する中にありと見たからして、その立場から孝徳を解釋しないと分らない。唯々父母に孝道を盡くすといふだけでなくして、父母は勿論、總ての祖先に對し

て孝道を盡くすのが人間の道である。それをすつと擴大して行くと、天地發生の道に隨順することになる。さういふ信念を以て孝道を全うするのが人間の道である、と斯う考へたのであるから、なか／＼孝の見方が普通の狭い意味の孝とは餘程違つて居る。藤樹は一種宗教的の信念を以て孝道を實行した人で、聖人の性格を有して居つた。その信念が藤樹の一切の行動を律したからである。藤樹は慶長十三年(三三〇)に生れ慶安元年(三三六)に歿した人で、享年は僅かに四十一であつた。(井上哲次郎)

三月八日

道に當りて死を厭はず

獨行道 宮本武藏

宮本武藏(天正十二年(三三四)生、正保三年(三〇六)五月十九日歿)、姓は藤原、苗字は新免、又宮本といふ。幼名辨之助、後武藏と稱し、玄信とも號した。生國は播磨で、赤松氏の出といはれてゐる。父無二齋も、美作國新免伊賀守に仕へ文武の師範であつた。武藏は始め父より兵法を授けられ、後自ら且暮に工夫鍛錬して遂に二天一流を大成した。一生のうち眞劍試合をなすこと六十餘回、一回も後れをとつた事はなかつたといふ。晩年はひとり兵法のみならず、書、繪畫、彫刻等の諸藝にも深く參入し、獨自の境地を開いた。

この句の原典『獨行道』は武藏が、その莊嚴な自己鍊成の行路に在つて、平生自らの短所を自誠する爲、壁書として

ゐたもので、廿一條（或は十八條ともいふ）より成り、昔より心ある人々によつて深く愛誦されてきたものである。就中『世々の道に背くことなし』『萬づ依估の心なし』『我事に於て後悔せず』『戀慕の思なし』『神佛を尊み神佛を頼まず』等の箇條は有名である。

標題の意は、おのれが信ずる道を實踐するに當つては、死も厭はないといふ決意を吐露したもので、この不退轉の勇猛心こそ、道を修する者の持たねばならぬ信條であらう。この場合の「道」とは、彼が五輪書あたりでいつてゐる「諸藝諸能の道」といふやうな概念よりも、もつと深く、大義に通ずるものがあると見た。さうである限り、この短い一句は、現代に於ても不滅の光りを放つのであつて、皇道の開顯のためには、萬死を厭はぬ皇國民の心境が、この寸鐵の如き句によつて鼓舞せらるるを覺ゆるのである。（井上司朗）

三月九日

我誠意を盡くし道理を明にして言はんのみ

—— 沼山閑話 —— 横井小楠

道理を明らかにし、偏見を去り、利害得失に超越して至誠以て事に當らば、信を天下に得、大道必ず通すべきである。この語、小楠が心術の高亮なるを見るに足る。彼又曰く、凡そ天地の間、只是道理のあるあり。道理を以て諭さんには、夷狄禽獸と雖も服せざること不能也。

と。又二姪の外遊に對し、

木石をも動かさし候は、誠心のみなれば、窮する時も誠心を養ひ、うれしき時も誠心を養ひ、何もかも誠心の一途に自省被致度候。

誠意と道理、二者その一を缺いてはならない。心に誠を抱くも、理に味くして通せざれば人これを信ぜず。いかに條理井然たるもその言に誠の認むべきなくば人を動かすに足らず。況んや國家を経綸するもの、人の師表たるものは、常に天理を體し、至誠を行ふの覺悟がなくてはならない。

小楠、横井氏、名は存、沼山の號もある。熊本藩士にして幕末四傑の一人である。四傑とは東湖、象山、松陰と小楠とを指す。その學風は、實學を旨とし、學政一致を主唱し、文章章句の末に拘泥せず、他國の文化をとり入れ、我が本質に培ひ、以て大道を世界に宣揚せんとしたのである。事歴は十月三日の條参照、この句、沼山閑話に出てゐる。

（土屋竹雨）

三月十日 陸軍記念日

功の成るは成るの日に成るにあらず

—— 管仲論 —— 蘇老泉

唐宋八大家の一人、宋の蘇洵（景德三年（一〇二六）生、治平三年（一〇七二）歿）の管仲論から採つた語である。蘇洵、號は老

泉。今の四川省眉山縣の産で、二十七歳の時、始めて發憤して學を修め、遂に當代屈指の大文章家となつた。その子の東坡(軾)、穎濱(鞏)いづれも皆文章家で、當時三蘇の文は洛陽の紙價を高からしめたものである。全文は

「功の成るは成るの日に成るに非らず、蓋し必ず由つて起る所有り。禍の作るは作るの日に作らず、亦必ず由つて兆す所有り」

とあるのであつて、何事もその成功は一朝一夕のよくするところではない、凡て平素の努力によるものであり、一面、禍の起るのも此亦久しきに亘つてその原因が潛むものであるといふことを戒めたものである。一步一步を積み重ねば千里の道は致されぬものである。老いも若きも只黙々として其職域に盡くすが宜しい、目に見えぬ不斷の努力はやがて巨大なる成績となつて現れ来るであらう。之に反して一刻を怠り一事を忽にすれば、始めは何の恐るべきをも見ないが、いつかは拾收することの出来ない大禍となつて現る、釘一本の手抜かりが幾萬噸の巨艦を沈めた例もあると聞いてゐる。小事は必ずしも小でなく、大事は必ずしも大ではないのである。(諸橋徹次)

三月十一日

綾羅錦繡にたのしむ時は樂つきて後たのしむものなし

——風俗文選——各務支考

支考(寛文五年〔一七二五〕生、享保十六年〔一七三九〕二月七日歿、年六十七)は、美濃國山縣郡山縣村に生れ、幼にして僧と

なつたが、後還俗して各務姓を名乗つた。元祿四年大津の無名庵で芭蕉に對面して入門、俳論家として知られ、蕉門十哲の一人に數へられてゐる。

この言葉は、許六の風俗文選卷之五に收められた宴柳後園序と題する文章の中に

「世にあそぶ人ありて、綾羅錦繡にたのしむ時は、樂つきて後たのしむものなし。山林樹下にあそぶものは、心にみたざれば、世にうらやむかたも出きぬべし」云々

といふ形で出てゐる。綾羅錦繡の物質的な享樂には限度があるけれども、山林樹下の精神的清興には底がないといふ心持であらう。物質的な享樂には限度があるといふばかりでなく、この言葉は一度樂盡きた後の荒涼たる人生の淋しさに觸れてゐる。物質的な享樂主義を排撃する意味で、今日の心に通ふものがある。(伊東月草)

三月十二日

皇大御國は大地の最初に成れる國にして世界萬國の根本なり

——宇内混同秘策——佐藤信淵

本文は佐藤信淵(明和六年〔一七六九〕六月生、嘉永三年〔一八二〇〕正月六日歿)、畢生の名著『宇内混同秘策』(文政六年〔一八二五〕)の冒頭の句にして、北畠親房の「大日本は神國なり」(『神皇正統記』一月一日の條)に照應する大文字である。信淵によれば、皇大御國は大地の最初に修理された國であり、世界萬國の根本であり、従つて神道によつて世界萬國は修理

固成さるべき運命にあるといふ見透しであつたのである。信淵は産靈兩神修理固成の神教を諸書に力説し、八紘爲宇の國策を實現するために、「混同秘策」を書いたのである。本書に見る宇内混同の意味は、帝國主義的な所謂世界統一とは趣きを異にし、眞の意味における神道、即ち産靈兩神修理固成の神教によつて、全世界を安集し、世界の萬民を救済することであつた。岡倉天心は「アジヤは一なり」と叫んだが、それ以上に「世界は一なり」を確信してゐたものは信淵である。神道の本義を理解するものは、當然信淵と同様の結論に到着すべきであつて、松宮觀山、本居宣長、平田篤胤、會澤正志齋、二宮尊徳、吉田松陰、大國隆正等はいづれもさうであつた。しかしながら、その意識が最も徹底し、最も明瞭な具體策を發表したものは信淵である。(佐藤堅司)

三月十三日 上杉謙信歿

生を必する者は死し、死を必する者は生、

上杉謙信言行録

上杉謙信 信 價

上杉謙信(享祿三年(二九〇)生、天正六年(三三〇)三月十三日歿)、越後春日山の城主長尾爲景の第三子。幼名虎千代、天文十三年元服して景虎と改め、宇佐美定行を軍師として越後を平定し、家督をついだ。爾來約三十年に、大小の攻城野戰七十餘回に及んだが、未だ一回も私利の爲に兵を動かさず、且つ一回も敵に敗れたことのない無双の名將であつた。その長期にわたる征戰は先づ第一期が北條氏康を敵とする關東經略戰、第二期は武田信玄を敵とする信濃爭覇戰、第三

期は上洛稱覇を目的とせる北陸平定戰と大別できる。この最後の征戰は着々進捗し、謙信の勢力は遂に飛驒、若狹に迄及んで、織田信長の勢力と直面するに至つた時、惜むべし、恐らく腦溢血の爲であらう、急逝したのである。之によつて天下は信長の懐にころがり込んで来た。

標題の句は大正六年牛込東亞堂發行、内藤貞太郎氏編『上杉謙信言行録』に見ゆるもの。その意は、戦ひに臨み、どうにかして生きのびようと願ふ者は必ず戰死してしまひ、是非死んでやらうと捨身で勇戰する者は、却つて生き延ぶるものだといふに在る。

之は兵法の書『吳子』治兵第三の「必死則生、幸生則死」といふ語あたりから示唆を受けたとも考へらるるが、同時に、これは謙信四十九年の苛烈なる戰闘生活の體驗を通じた信念の言葉であることも疑ひない。吾らの實人生に於ても重大な關頭に立つとき、この一句に教へらるるところ極めて大である。猶、永祿九年、謙信三十九歳の時、春日山城内に壁書したと傳へらるる一文のなかには、次のやうな表現をとつてゐる。

「運は天に在り、鎧は胸に在り、手からは足に在り。何時も敵を掌中に入れて合戦すべし、疵付くことなし。死なむと戦へば生き、生きんと戦へば必ず死するものなり。家を出づるより歸らじとおもへば又歸る。歸ると思へば是非歸らぬものなり(以下略)」

川中島合戦の時、單騎武田信玄の本陣に斬り込んだ彼の不敵の豪勇も、かかるふかき信念に基づくものであらう。

(井上司朗)

三月十四日 三浦梅園歿

學文は置所によりて善惡分る、臍の下よし鼻の先惡し

梅園拾葉——三浦梅園

學問とはいつたいどういふものであるか、この疑問に眞正面から答へてくれた秀れた先覺者の中で梅園(享保八年「三八三」八月二日生、寛政元年「四九」三月十四日歿)は山鹿素行や貝原益軒などと共に學問論史上に特に輝いてゐる。梅園の主著は『玄語』であるが、稿を換ふること二十三回、そして完成までに二十三年の歳月がかかつてゐる苦心の大著である。この中で學問とは眞箇何であるべきかを哲學として探求してゐる。學文についての梅園の此の誠は、如何にも俗に應じて面白く解り易くできてゐるが、この背景には哲學の體系があるのである。この言葉は九ヶ條から成る「戲示學徒」なる一書のうちの二ヶ條である。その九つのうち、どの一つも寸鐵の鋭さと醍醐の滋味とを備へてゐる。「戲示學徒」の戲とは「戲畫」といふ語に示されてゐるそれと同じで、「戲れに示す」のではない。嚴たる誠である。「戲示學徒」は『梅園拾葉』に入つてゐる。この書は明治末年刊行の『梅園全集』下巻に入つてゐる。「戲示學徒」のみならず、『日本科學古典全書』第一巻に收めてある。

學文とは學問である。(學問の代りに昔の人は學文と屢々書いた)といふと文學を學問の意味に解した場合の意味にやや近よることは否定できぬが、今日いふ「學問」であり、一般的にいつて「科學」のこととみてよい。私たちがこの句を讀んで、銘記し置くべきことは、まづ學文は置所の在るものであることである。これは歐米人のほとんど言はないことである。しかしその「所」こそ人生第一のものである。梅園のいふ臍の下、これを私たちは各自に眞剣に見出さねばならない。私たちは戰場にある將士たちと共に戰鬪の眞中にある覺悟で、この臍の下を見つけねばならぬ。學文はそこへ置くのである。三月十四日は、學問と日本精神との關係を考へぬいた梅園の死歿の日である。(三枝博音)

三月十五日

事を聞いて喜ばず驚かざる者は以て大事に當るべし

從政名言——薛敬軒

小膽なるもの、肚の据わつて居ないもの、心の落ちついて居ないもの、かかる人間は、ちよいとした事にも、喜んで悲しんだり、泣いたり騒いだりするが、それは全く醜態の極みである。それも、子供の世界に於ては、當然許さるべきことであるとしても、苟も一人前の人間ともあるものが、そんな状態では、大事どころか、小事も成し遂げ得ないであらう。是を以て、喜怒哀色に現さずなどいふ訓言もある。

定見なく、自信なきものは、進退を決する基準を有しないから、小成に歡喜したり小難に驚愕したりする。恰も、羅針盤の無い船の如く、航路を定め難いばかりでなく、或は漂流し、或は暗礁に乗り上ぐるにも至るであらう。凡そ人、定見あれば、心平にして、事に臨んで動搖せず、自信あれば、氣和にして、難に處して泰然たることが出来るので

ある。

敬軒（六月十六日、八月三十日の條参照）は又、

安重（沈なる者は、能く大事を處す。輕浮淺率なる者は、能はず。（原漢文）

とも言つて居るが、輕浮淺率だから、小事にも動かされて、喜んだり驚いたりして、節度を失ひ舉措を誤る。だから、大事を成すことが出来ないのである。「風吹けども動かす天邊の月、雪壓すれども摧き難し澗底の松」。吾々は、今この國家の大難局に遭遇して、「浮草や、今朝はあちらの岸に咲く」（乙由）と言つたやうな、そんな落ちつきのないことと何とする。白刃頭上に閃くとも、びくともしない、泰山前に崩れるとも、徐ろにこれに對處する態の、大膽さと、度胸とが無くてはならない。（高嶋米峰）

三月十六日

父の誠は皆我身の幸

——父の終焉日記——
小林一茶

一茶（寶曆十三年〔西曆一七六三〕生、文政十年〔西曆一八二七〕十一月十九日歿、年六十五）は、信州柏原に生れ、早く江戸へ出て、俳諧を二六庵竹阿（ちくあ）に學び、夏目成美（せいび）と交はつた。自ら乞食首領と稱するやうな俳諧による放浪の生活を續けてゐたが、晩年は柏原に安住した。一風變つた性行と作風とを以て知られ、家庭的には不幸な生涯であつたが、父への孝心は一入深

いものがあつた。この言葉は、その著「父の終焉日記」に出てゐるが、この日記は父のチブスを看病した時のもので、全篇父に對するこまやかな心情があふれてゐ、一寸した誤解から父にひどく叱られたのち、この言葉を記してゐる。そして「さるにても父のいかり給ふ聲の細り」と心をいたため、「よべは父に長の別れと思ひしに、今朝は父のせつかんにあふことのうれしさ」と勇んでゐる。この親をおもふ切ない心情は、身に沁みるものがあつて、父の叱言を「我身の幸」と感じる氣持は萬人のものではあるが、一入あはれに尊く思はるる。（伊東月草）

三月十七日

智に働けば角が立つ、情に棹させば流される

——草枕——
夏目漱石

夏目漱石（慶應三年〔西曆一八五七〕一月五日生、大正五年〔西曆一九一六〕十二月九日歿）の明治三十九年の作「草枕」の冒頭に出て來る言葉である。「草枕」にあらはれたものは漱石の藝術觀であり、自然の風物を人事のもつれから切り離して眺むる時の愉しさをよく傳へてゐる。

眞實の意味に於ての「智」は圓滿であるべき筈なのだが、とかく智者は智をひけらかすために周囲の反感を買ふことさへある。智を誇り、智に恃み、みづからの思ふが儘に、みづからの計畫の儘に手腕をふるふ人がある。一往成果を擧ぐるが、衆の愛敬を受くるに至らぬ。共に在る人々の無能を指摘するを喜ぶかの如き誤解をさへ與ふる。自己の智にのみ

たよるために、傲慢になり「角が立つ」のである。智は圓熟すべきもの、周囲の人々を心服せしむる筈のものである。さりとして又一方には感情を主として動くことの危険をも警戒せねばならない。いはゆる「人情家」を以て任じてゐる士が、事理を見究むる明察力を缺いて失敗する場合が屢々ある。人情一點張り、感情のみで事を辨じようとすれば、周囲から乗じられ、侮らるる。正しい感情に公平なる判断を加へ、圓熟した境地を作り出して、その中に於て活動する時、他をも我をも伸ばしてゆくことが出来る。共存共榮の理はここに潛むとも言ひ得るのである。(村岡花子)

三月十八日 (彼岸入)

葦原の水穂の國は神ながら言擧せぬ國

——萬葉集——柿本人麿

「萬葉集」卷第十三、相聞に「柿本朝臣人麿歌集歌曰」として出てゐる長歌の歌ひ起しの句である。従つてこれを柿本人麿の語と認めてもよいであらう。その歌は、

葦原の水穂の國は神ながら 事擧せぬ國 然れども 辭擧ぞ吾がする 言幸く 眞福く座せと 恙無く 福く座せば 荒磯浪 有りても見むと 百重波 千重浪敷きに 言上す吾れは

反歌

志貴島の 倭の國は 事靈の 佐くる國ぞ 眞福く在りこそ

といふのであつて、「水穂」は「瑞穂」に同じく、この歌は、わが國は「神ながら言擧せぬ國」といふ「ことだて」と、「言靈の佐くる國」といふ「ことだて」とを以て、この兩者が一なる本然の表裏兩面を表はすことを表示してある。「ことあげ」すること、即ち揚言し主張することは、我を立て、ものごとを局限し、偏執に落ち入り、道の履踐から離れゆく結果を招き易い。これによつて不言實行を尊ぶ。それと共に、言と業とを一とする「まこと」は、言靈の力に佐けられて祝ひをなし、そのはたらきを現してゆくのである。一度は否定せられる「ことあげ」も、わが「まこと」の心を表すものとなる時、言靈の支持するところとなり、壽詞をなし、いはひをなし、歌をなし、みやびをなすのである。この神代の手ぶりを今に相續して、「まこと」を根本とし、揚言を排し、理論に執する態度を退けて、現實を直視し、實踐を第一義とするのが、道を貫いて榮えゆくわが國ぶりである。

作者柿本人麿は 持統天皇の御代、文武天皇の御代に歴任した人であつて、その中央より地方に亙つて歴任した官は低かつたやうであるが、「萬葉集」といへば先づ人麿を想ひ起すといふ程の代表歌人である。(志田延義)

三月十九日

聽くことを多くし 語ることを少くし 行ふところに力を注ぐべし

——日記——成瀬仁藏

成瀬仁藏 (安政五年(三二八)生、大正八年(二五九)歿) 夙く女子教育の必要なことを痛感し、歐米に漫遊研究し、歸來明

治三十四年日本女子大學校を創設した。

この句は明治二十六年在米中の日記の一節である、作者が毎日新しく珍しい生活に接觸し、特に亞米利加人の口先ばかりで種々な宣傳をやかましくして、実行力がこれに伴はないのを見ての感想であらう。一見すると受動的で消極的であるやうに見ゆるが、實は行ふところに力を注ぐべしといふところに強調をおくべきだと思ふ。徒らに「言あげ」しないのがわが國民の特徴である。聽くことを多くして、修養を積むことを薦めてゐるのは近代的にしてしかも、さすがに日本人の本領を示してゐる。先生は此句を自書して學生の誓ひの言葉に與へ、今も先生臨終の室の額となつてゐる。(茅野雅子)

三月二十日

博く學びて篤く志し切に問ひて近く思ふ

論語 子

夏

論語子張篇の句である。子張篇は論語二十篇中の第十九篇、後に加へた部分と考へられ、論語としては比較的重要な視されぬ。全篇凡そ二十五章皆門人の語で、孔子の言はない。

この章は子夏が學問の要諦を説いたもので博學、篤志、切問、近思の四事を能くすれば仁道は求めずして自ら其中に在りと訓へてゐる。中庸(二十章)の博學、審問、慎思、明辨、篤行と意義相通する。

學は博きを貴ぶ。出來得る限り見聞を廣めねばならぬ。しかし徒に博覽多識を誇り所謂物識りでは役に立たぬ。學問

は何の爲にするぞと正しく志を立てそれを貫徹せねばならぬ。孔子は十有五にして學に志し、七十餘歳に至るまで道を學ぶことに精進した。そして聖域に入つたのである。道に志すこと篤くなければ學は成就せぬ。

博學と篤志とは學道の關鍵である。だが長い精進の路には惑もあり迷もあらう。そこに師友に就いての切實詳審な質問の必要が生ずる。

學は向上一路である。だが脚下には大地を踏んで立たねばならぬ。徒に思を高遠の理想に馳せ現實と游離するのは嚴に戒むべきである。これを近思といふ。

學と問とは知の事、志と思とは行の事である。朱子は知は眼で行は脚であると言つた。眼を塞いでは千里行くとも目的地へは着けぬ。眼力鋭しといふも、唯障るのみでは百年一物も捉めぬ。前者を妄行、後者を徒知といふ。

智慧と議論は多いが、意思實行の伴はぬやうでは到底難局は乗切れぬ。(鹽谷 溫)

三月二十一日 (春季皇靈祭)

神代も今もへだてなく

直 毘 靈 本 居 宣 長

「直毘靈」は古事記傳一之卷に附載せられ「此篇は、道といふことの論ひなり」と註がある。後にこれだけを單行本としても出されたが、はじめ書かれたのは明和八年(二三二) 後桃園天皇御即位の年、宣長四十二歳の時であつた。古來

世の人心が儒佛意に惑うて皇國の道を穢してゐた禍事を直毘神の御靈を蒙つて清い皇國意に直さうとの、いきどほりと祈りをこめて書かれたもので、それを古事記の註釋によつて爲さうとの念願であつた。

さて「神代も今もへだてなく」とは、天照大御神の御子とましまして、天照大御神の御心を大御心として治め給ふ天皇上にまして、臣民また祖神たちと同じく唯一世の如くに奉仕り、神ながらの大御世を受け保ち傳ふる、その皇國の姿を申したのが此の言葉である。簡潔な中に宏遠な皇國の國柄をすかくと申し得て美しい言葉である。

本日は、天皇が、鳥見山に靈時を立てて、天照大御神を祀り大孝を申べさせたまうた、神武天皇の大御わざにならひ、祖宗の皇靈を御追遠あらせられ皇國の彌榮を祈りたまふ其の御祭の日にあたり、此の國學者の言葉をよむのも思ひ深いことである。(蓮田善明)

三月二十二日

但だ奪はれざるものは志、滅びざるものは業

——戊午幽室文稿—— 吉田松陰

この句は、松陰(略傳、二月六日の條参照)の文集「戊午幽室文稿」の「八十に與ふ」(原漢文)といふ一文に出てゐる。安政五年(三二〇)十二月二十六日に、松陰は藩政府の命によつて再び野山獄に下つたのであるが、その數日前に最愛の門下佐世八十郎(後の前原一誠)に宛てて、

「生死離合、人事倏忽たり。但だ奪はれざるものは志、滅びざるものは業、天地の間恃むべきものは獨り是れのみ。吾れ公を見ずして獄に投ず。獄脱すべからざれば、公吾れを見るを得ず。而れども志業の天地に寓る、吾と公と當に努むべきのみ云々」と教へた。

天地の悠久に比すれば、人間の生死離合はまことにあわただしい瞬時のことである。この瞬時の人生を以て、よく天地の悠久に參じ、毅然としておのが生命の意義を不朽に價値あらしむるのは、唯だ志と業の遂行達成のみである。皇國日本に生れた大丈夫の志はいふまでもなく國體を擁護し皇運を扶翼し奉ることである。然もこの志は各々の本分とする業を通じて實踐する以外にはない。松陰は楠公の七生滅賊を志として尊皇攘夷の大業を實踐し、松下村塾の若き青年にその志業の繼承を教へた。これより以前、嚴囚に處せられたときにも、

「嗚呼、匹夫も志を奪ふべからず。況んや十志士をや。一寅二は嚴囚すべし。其れ能く十志士を嚴囚せんや」と云つて、門下の志士を激勵したことがあるが、國の大義を踏まへて立つ大丈夫の志は、水にも流されず、火にも熔かされず、まして權勢利祿や淫聲美色等の如何なる壓迫や誘惑によつても微動だもするものでない。この志にいのち貫くとき、如何なる大事難業も達成されぬ道理がない。果せる哉、松陰三十年の形骸は劊手の刃によつて冷たくなつたが、その奪はれざる志と亡びざる業は悠久の歴史に生きてゐるではないか。大御心を奉體して、われ等の志業はすでに決してゐる。右顧左眄することなく、一路邁進あるのみである。(岡 不可止)

三月二十三日

桃李言はず、下自ら蹊を成す

—史記—

此の語は「史記」の、李廣の人物を贊へた「李將軍傳の贊」に引いてゐる諺である。桃や李は花もあり實もある。故に特別に人を招くことは無くとも、人は自ら争つて之に趨き、自然に其下には蹊が出来るといふ意であつて、忠實の心があり、才能が備つてさへ居れば、辯舌は用ひずとも人は自然に之に歸服するといふことを喩へたものである。「聲色の民を化するに於けるや末なり」。徒らに自家の宣傳に狂奔して自ら養ふ所を知らぬ人々の正に三思すべき警句である。李廣(四〇頃生、五三年歿)は漢の武帝の頃の人で、北平太守となつてゐたが、匈奴は畏れて廣を飛將軍と呼び、爲に數年間境を侵さなかつたといふ。廣はまた驍直の人でもあつた。賞賜を得れば悉く部下に頒ち與へ、自らは貪る所無く、家産の事は一生之を口にしなかつた。戰場では士卒が飲食し終らぬ間は自らも食をとらなかつた。且極めて無口で功に誇らない人であつたから、士卒は皆廣の爲に死ぬことを楽しんでゐたといふ。司馬遷が之を評して「傳に曰く、其身正しければ令せずして行はれ、其身正しからざれば令すと雖も従はずと、其れ李將軍の謂なり。」(下略)と云つて居るのは當れりと謂ふ可しだ。

史記は前漢の司馬遷(五六年生、五〇年頃歿)の著、支那の上代から前漢の武帝までのことを敘した有名な歴史書である。(諸橋轍次)

三月二十四日

春風を以て人に接し秋霜を以て自から肅しむ

—言志後録— 佐藤一齋

佐藤一齋(明和九年(二四三)十月二十日生、安政六年(二五九)九月廿四日歿)名は坦、捨藏と稱す。字は大造、一齋はその號で、又愛日樓、老吾軒ともいつた。一齋八世の祖、六左衛門清信は、美濃鉾尾山城主であつたが、曾祖父廣義は周軒と號し、始めて儒者として岩村侯に仕へ、後家老に進み、祖父も父もその職をついだ。父は信由、文永と號し、蒔田氏を娶つて二男二女を生んだが、一齋はその二男である。

一齋の少年時代は可なりの腕白ものであつたが、讀書好きで、書を好くし、早く射騎刀槍の術を學び、又小笠原流の禮を學んで、十二三歳の頃には既に成人の風があつたといふ。十九歳で近侍となつたが、後に林大學頭の家を嗣いだ藩侯の三子の述齋と兄弟のやうに親んで、共に研學に勵んだ。二十歳にして仕籍を免ぜられ、翌年大阪に赴いて、曆數の大・家間大業の家に寓して、中井竹山に學び、京都では皆川淇園の家に寓した。その時、淇園の娘が、一齋に戀して寄せた文を、一齋は父の淇園に見せたので、娘は耻ぢて自殺したといふやうな逸話がある。その頃の一齋には、まだ少時の客

氣が残つてゐたのである。二十二歳江戸に歸つて林簡順の門に入つたが、簡順歿して述齋が林家を嗣ぐに及んで、一齋はこれに師事して終生變らなかつた。後には林家の塾長となり、老齡に及んで幕府に徴されて昌平齋の儒官となつたが、安積良齋、竹村悔齋、吉村秋陽、山田方谷、栗本鋤雲その他、多くの秀俊をその門から出した。

天保十二年(三〇二)一齋は古稀の齡に達した時、生れ落ちるときからの友であり師であつた述齋を喪つたので、一齋は轉無常を感じて退隱の準備をしたが、幕府は一齋を起用して昌平齋の儒官に任じたので、一齋は「近く幽棲を築く墨水の涯。豈圖らんや今日公車に赴かんとは」。云々と詠じ、湯島の官舎に移つて、經書の講義に寧日ない繁忙の晩年を送つたが、その門に學ぶもの無慮三千人と稱された。

安政六年(三三九)の九月、風邪がもとの喘息で廿四日に官舎で歿した。享年八十八。麻布の深廣寺に葬る。

遺著としては、壯年に「言志録」、六十餘歳に「言志後録」、七十歳に「言志晚録」、八十歳に「言志叢録」、の各一卷があり、一齋の學問と性格とが遺憾なく發露されてゐる。外に傳習録、中庸、論語、孟子、小學、近思錄、周易等の欄外書、計廿三卷、又「古本大學旁釋」一卷、「愛日樓文詩」四卷その他がある。

一齋、始め阪本氏を娶り、離別して中根氏を娶つて、三男十女がある。阪本氏の出の長男湜は出て、幕臣田口家を繼いだが、明治の經濟學者で史學者の鼎軒田口卯吉博士はその孫であり、前藏相河田烈氏は、河田迪齋に嫁いだ八女神の孫に當る。一齋の青年時代は、夜吉原堤に出て遊治郎を投げ飛ばしたりした亂暴武士であつたが、成年に近づいて、憤然志を立て、修養の功を積み、早く壯年にして、學徳圓滿の君子人と稱せらるるに至つた。「人に接するに春風駘蕩、自から肅むに秋霜烈日」といふころこの標語は、さうした自家修養工夫から滲み出た心情で、單なる「言葉」ではない。(長谷川如是閑)

三月二十五日

一字の師恩たりともわするることなかれ

行脚拵 松尾芭蕉

芭蕉が門人に書き與へたと傳へられてゐる行脚拵に

「一字の師恩たりともわするることなかれ、一句の理をだに解せず人の師となることなかれ、人に教るは己をなして後の事也」

といふ形で出てゐる。この拵は十八ヶ條から成つてゐて、大體芭蕉のいひ出しさうな言葉が根幹となつてはゐるが、まを芭蕉にしてはどうかと思はるるやうな言葉も交つてゐて、その眞偽については説のあるところである。右の條なども、芭蕉の言葉としては少し迫力がにぶいやうであるが、はじめの一句だけを抜き出して、單獨に味はつて見ると、心持にもいひ方にも芭蕉らしいところがある。

俳句にしても連句にしても一句の形が小さいために、特別に一字が大切であつて、芭蕉は別のところで「手にをば專要也、我國も手には第一の國なれば、先哲の作を味はひ、一字も龜末なることなかるべし」(祖翁口訣)といつてゐる。唯一字の添削によつて、死んだ句の生かさるる例も多く、またそこから初學の啓發さるところは量りがたいものがある。字義通り單に恩を忘れるなといふ消極的な意味ばかりでなく、その一字を身につけて、そこから進んで自分の道を

啓いてゆくことを忘れてはならぬといふ意味をも汲みとるべきであらう。(伊東月草)

三月二十六日 柳生宗矩歿

刀劍短くば一歩を進めて長くすべし

柳生宗矩

柳生宗矩(元龜二年(1581)生、正保三年(1630)三月二十六日歿)、飛騨守宗巖(石舟齋)の次子で、又右衛門と稱し、後但馬守と名乗つた。父の教を受け、幼少より劍法を善くし、出藍の譽あり、後年柳生流を大成するに至つた。徳川家康に臣禮を執つたのは文祿三年であるが、後、關ヶ原役の戦功により、郷里柳生に於て一萬三千石の大名となつた。將軍家光は少時より宗矩に劍を學んだが、宗矩は劍より悟入し、能く萬法の要理を辨へたので、家光在職中、時務に就ても獻替の功大なるものがあつた。傑僧澤庵禪師を家光に推舉したのも彼である。正保三年三月二十六日、七十六歳にて歿したが、翌月從四位下を贈られた。著書に『兵法家傳書』三卷あり、上卷は「殺人刀」中卷は「活人劍」下卷は「無刀之卷」と稱し、彼の一生の刻苦研鑽の跡を要約したもので、武道に志す者必讀の書とされてゐる。

『刀劍短くば一歩を進めて長くすべし』といふのは、彼が日常劍法鍊磨の體驗から滲み出た言葉であつて、敵と相對して、敵の武器よりも、自分の武器が短かつたら、その短くて不利な分だけ、積極的に踏み込んで、間合を詰め、以て有利な態勢を展開せよといふ、日本の武の精神の極致を示した訓へである。之はひとり劍法に於ける眞理なるのみならず、實人生に於ける石火の活機も、かかる積極精神によつて把握さるるだらう。寡兵よく桶狹間を衝いた織田信長の如きは、軍略の上にこの精神を活かしたものである。山岡鐵舟が常に太く短い竹刀を愛用したのも、この精神に基づいてゐた。之を大きくしては、眞珠灣の大奇襲作戦もこの傳統に立つものといへる。(井上司朗)

三月二十七日 旅順口第二回閉塞(明治三十七年)

總員死方用意

東郷元帥詳傳 野村貞

海軍大佐野村貞は弘化二年(1845)、北越の俊傑河井繼之助の從弟として生れ、箕作塾に學んで明治三年には二歳年少の東郷平八郎とともに龍驤艦乗組となり、爾來雁行して累進、相許した親友であつた。

野村は身長五尺八寸、容貌魁偉、風骨堂々、あくまで東洋式の豪傑であつた。かつてわが國海軍による最初の建造艦たる清輝艦の艦長時代、海上で颶風に遭ひ、漂ふこと一晝夜、兵員ら疲勞困憊して艦まさに危険に瀕した。このとき、野村は總員を集め、艦橋に仁王立ちとなつて大喝したのがすなはち本日(三月十三日)の銘なのである。ために全艦の士氣大いにふるひ、つひに暴風を克服してよく死線を突破することを得た。生死の巖頭に立つや、まことに上杉謙信の喝破せるごとく「生を必する者は死し死を必する者は生く」(三月十三日の銘参照)である。

右の物語は小笠原長生著『東郷元帥詳傳』に出てゐるが、なほ傳聞するところによれば、明治二十六年三月二十一日、

高千穂艦が布哇に派遣されるや、當時艦長であつた野村は眞珠灣の軍事的重要性に着目し、他日米戦はば日本海軍はまづここを衝くべしと、小笠原子爵をして調査せしめたことである。その眞珠灣を、大東亞戦争の緒戦に衝いた元帥山本五十六こそ、實に野村の従弟であつたのである。(西村孝次)

三月二十八日

此時命を輕んぜずんば、まさに何れの時をか期すべき

——太平記——新田義貞

太平記卷二十にあり、義貞(正安三年(一九一)生、延元三年(一九八)閏七月二日歿)が御宸翰を賜はり「當家超涯の面目なり」と感佩して打ち立つ際に發したる言葉である。

勅諭を拜し「弓矢取る身の面目何事かこれに過ぎん」と感激した楠正成も、「忝くも十善の君に憑まれ進らせて、骸を軍門に曝すとも名を後代に残さん事、生前の思ひ出、死後の名譽たるべし」とて主上を迎へ奉つた名和長年も、思へば君恩に奮ひ立つ日本武士の典型であつた。

これらの人々の事蹟はすべて太平記の中に記してある。太平記四十卷は、後醍醐天皇の關東御討伐の御企に筆を起し、建武中興を経て、足利義滿が將軍となるまで凡そ五十年間の争亂時代を記述したものであり、殊に孤忠を守つて君國の爲に身命を捧げた吉野朝の忠臣の事蹟を委しくかつ同情的に書いてゐる。平家物語の如き詩的精神には乏しいが、

尊皇精神や武士道を強調する烈々たる氣概が全卷を蔽つてをり、國民思想に至大の影響を及ぼした。作者は洞院公定(日記によれば小島法師と謂はれ、今はこれが一般に認められてゐる。しかし小島法師の素姓はわからない。佛法に委しく叡山に縁故を有し、吉野朝に隨從した僧侶ではないかと推察さるる。

本書の題名「太平記」の出所には諸説がある。題名がその内容にふさはしくないが、恐らく結語「中夏無爲の代になつてめでたかりし事どもなり」によつたのであらうか。(塩田良平)

三月二十九日 平野國臣生

吾恐るるところは敵にあらすして我に有り

——神武必勝論——平野國臣

平野國臣(文政十一年(西一八二八)三月二十九日生、元治元年(西一八五九)七月二十日歿)は、福岡黒田藩士である。國事に奔走して、勤皇志士と交はり、倒幕攘夷の擧に挺身した。その間、藩獄に繋かれ、紙縊の文字をもつて、神武必勝論を始め、征寇説、制蠻礎策、大體辨、及び歌集を著はした。遂に、但馬生野銀山で澤宣嘉を擁して義擧を起したが、事挫折して豊岡藩兵に捕へられ、京都六角の獄に投ぜられたが、長州藩の京都に迫るに際し、獄中で斬られた。年三十七、正四位を贈らる。三月二十九日は國臣の生れた日に當る。

神武必勝論(三卷)は文久三年三月、獄中で著はした書の中、最も烈々たる氣魄に富む長篇であつて、戦つて必ず勝

つ、皇國神武の必勝の根本を明らかにした。而して今や「萬々歳の後迄、神國の武威は海外に輝き、皇統の神脈中興し、永く萬國を制馭せん」とする好機であるが、むしろ、捷利を手中に收むるか否かは、國民の覺悟如何にかかつてゐる。「年來、吾恐るるところは、敵にあらずして我に有り。畢竟、彼を制すると、彼に制せらるるとは、我勞すると勞せざるとに在り。勝つと勝たざるも、又我勉むると勉めざるとによるなり」。この一事こそ、必勝の道への鍵である。國內の體制が「武を講じ兵を練り、庶民も（中略）家業を力め農事を勵みて、軍費を助け兵糧を償ひなば、必勝の英策は極めて凡慮の測り知るべからざる宏遠恢潤たる聖明の神武より輝き出でんことを、歛んで疑ふべからず」といふ信念に結集することこそ最も重大な根本事である。（藤田徳太郎）

三月三十日

行路の難きこと水にあらず山にあらず、只人情反覆の間にあり

——新樂府——白樂天

白樂天の新樂府「太行路」の末尾の句である。原意は夫婦を借りて君臣の關係の終始變らぬことの難きを諷したもので、人生行路の艱難なるは水の深き、山の高きにあらずして、親しきに馴れて義を失ひ、故を棄てて新に就く、その人情の移り目にあるといふのである。古より秋の扇は捨てらるるの習ひ、寵遇の變、人心の險、古今一揆である。更に況く人世に眼を轉すれば、權勢に奔り利欲に迷ふは小人の常、利の爲めには恩を忘れ人を陥るることをものともせぬ輩が多い。

昨日の親朋は今日の仇敵、白氏の歎息ある所以である。

白樂天名は居易、香山居士と號す。唐の代宗の大曆七年（皇紀二四三）に生れ、武宗の會昌六年（皇紀二五六）に歿してゐる。彼は官仕して顯要に登り、又佛を信じて香山に淨業を修めし心境曠達（くわうたつ）の詩人である。彼の地位は、李白、杜甫に次ぎ、韓愈と共に太宗と稱せられ、その詩は、平易精切を主とし、難解の句を用ひず、文字を知らぬ老嫗もよく解したといふ位であるから、一時を風靡したること推して知るべきである。我が國に於いても白氏の影響は大きい。殊に平安朝には、その詩風が盛行し、菅公の鐘、清少納言の簾、いづれも白詩に關係があり、和漢朗詠集十卷中には、白氏の詩句を引くこと一百三十八條の多きに達してゐる。（土屋竹雨）

三月三十一日

世の中にひまある身こそ悲しけれ

——兼載雜談——高山宗砌

高山宗砌（寛正二年〔三三〕正月十六日歿）は山名宗全の臣、俗名民部丞時重、宗砌は入道後の稱。梵燈菴主の教を受け、連歌七賢の隨一。伊勢の北畠氏の爲に古今連談抄を著し、北野會所の花下宗匠となり、一條攝政兼良の命を奉じ連歌の式目を改む。宗祇の如きもその教を受けた。この句は猪苗代兼載の兼載雜談に引用されてゐる。兼載雜談は和歌連歌等に關する隨筆で群書類從に收めてある。

句の意は明瞭であるが、人は身分の如何、年齢の高下に拘らず、終始致々としてその志す道やその職に勉むべきである。由來富貴の人、又は年老いたるものの中には隙で無聊に苦しむ輩がある。これは人として眞に慙むべきものである。人の此世に生るるや、鳥の飛ぶが如くその職能にいそむべきである。徒に暇を作るときは所謂小人閑居して不善をなす類も生ずべく、心裡常に空虚であつて倦怠を生じ、公益を擧ぐる如きことは思ひもよらず、天より受けた生命をも短くするに至る。特に今日の如き時局に際しては隙を求むる如きは非國民である。國家としても一人の有閑圖に住する者を無くしてしまふやうにせねばならぬ。(福井久藏)

四 月

四月一日

春は曙あけぼの

枕草子まくらのかさ 清少納言せいしょうなごん

これは有名な清少納言の著「枕草子」の一番最初の句である。作者清少納言の傳は詳かではないが、清原元輔の女で、正曆三年しやうりやく—五年ごねん〔天喜〕四頭に宮中に召されて 一條天皇の中宮定子さだこに仕へ、かれこれ十年程宮中に奉仕したことだけは明らかである。本文には「春は曙、やうやう白くなりゆく山際あかりて……」とあつて、春の曙の長閑な風景が書いてあるが、座右の銘としては長過ぎるので、これを略したが、それによつて一層餘情が出て來たやうに思ふ。戦時緊張した我々の生活では、自然の風物をたのしんでゐる餘裕はないやうにも思はるが、時々疲れた眼をあげて美しい自然の趣を味ひ、或は仕事につく前に豊かな春の曙の限りなく美しい情調を喜ぶ襟度をほしいものだと思ふ。春も漸くたけなはにならうとする四月の始にこの句の深い意味をかみしめて貰ひたい。(茅野雅子)

四月二日 愛林日

山高やまたかきが故ゆゑに貴たつとからず、樹きあるを以て貴たつとしとす

實語教じつごけう

これは、實語教の巻頭に在る句である。實語教一卷は、古來、弘法大師の編纂と傳へられて居るが、眞偽は明らかでない。恐らくは、弘法大師よりは、遙かに後世の編纂になるものであらうと思ふ。

その内容は、童蒙の爲に、卓近にして理會し易い、且つ實用的とも稱すべき、知識や道德やの句を集めたものである。謂はば、通俗教育用の教訓や道德の書である。故に、格言もあり、格言的な語句もあり、或は佛典に關するものも存在する。しかも、すべてを五言の句となし、且つ對をなさしめた點は、童蒙の讀誦と記憶とに便宜な點を顧慮したのである。その對句にも、積極的なものと消極的なものとを、相對せしめた所に、編者の苦心が存すると思ふ。全部で九十六句から成つて居る。それらによつて、編纂目的は凡そ推測出来るのであるが、編者は、儒者か又は僧侶の中の、童蒙教養に關心を持つた者であらう。この實語教に類するものには、童子教と題するものもある。

この句の意味は自ら明瞭であらう。山は單に高いといふだけでは、價值がない。樹木の繁茂して居る點に價值がある。人も、體軀が肥滿して居るだけでは、尊重する價值がない。智識才覺がなくては、全く駄目である。「獨活の大木」とか「無藝大食」は、世の中に尊重せらるる何等の理由も價值も無い事を意味する。さういふ事實が、左の如く連續し

て、實語教の巻頭を飾つて居るのである。

山高 故不貴 以有樹 爲貴
人肥 故不貴 以有智 爲貴

要するに、自分だけ高くても駄目である。國家に役立つ所のある人間が大切である。「一人だけが偉くなれ」ではなくて、國の爲に役立てといふ時局の聲にも通ふものがある。(山岸徳平)

四月三日 神武天皇祭

是のただよへる國を修理り固め成せ

—古事記—

皇國日本の「國生み」「國つくり」の精神を宣示せられた天つ神の命として、「古事記」(一月二十八日銘参照。)に掲げられた重要なことばである。即ち「古事記」上巻、神代の巻は、天地の初發の時、高天の原に成りませる天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神、宇摩志阿斯訶備比古遲神、天之常立神の五柱の別天つ神に説き起し、この天つ神諸の命を以て、伊耶那岐命、伊耶那美命二柱の神に、このやうに詔せられたことを、先づ物語つてゐる。この「みこと依さし」(命)によつて、伊耶那岐命、伊耶那美命は、先づ大八嶋國を生みまし、更に神を生みまして、國作りに全力を擧げさせられた。天照大御神はこのみおや伊耶那岐命の「みこと依さし」のまに、高天の原を知ろしめす神と

ならせられたのである。ここに皇祖皇宗の御遺訓を奉じ御遺業を恢弘したまふ大御業を仰ぐ次第が拜せらるるのであつて、祖孫一體、「おや」の志を繼承してわが道義秩序の建設に邁進する皇國の根本義が示されてゐる。(志田延義)

四月四日 山本五十六生

いまの若い者はなどと口はばたきことを申すまじ

—書簡— 山本五十六

大東亞戦争開戦劈頭のハワイ眞珠灣攻撃部隊中、特別攻撃隊員の壯烈に感激したる山本聯合艦隊司令長官(明治十七年(西曆)四月四日生、昭和十八年(西曆)四月戦死)は、内地の某大將宛左の手紙を書き送られた。

「……ハワイに乗込みたる特別攻撃隊にいたりては未だ十分申上べき時期に至らざるも(中略)少くも戦艦一隻を撃沈したることは明瞭にして、兵學校卒業一年前後の若武者どもを加ふるこの決死隊が、敵港に突入してこの成果を擧げたるを思へば、いまの若い者はなど、口はばたきことを申すまじきことしかと教へられ、これまた感泣に堪へざることに御座候」とある。

「この頃の若い者はやるわい」「若い者の一途の忠誠心には教へられる」と、大に壯年者を禮讃せられ、且つ壯年の奮起を促がされたものである。時潮は洵に迅速である。

自由主義華やかなりし時代に生れ育つた中老の人々は、現時局下その悪思想の殘滓を拂拭し去ることは中々難しい。然るに現時の青少年は、滿洲事變前後に生れ、支那事變の中に育ち、そして濼洲たる青少年時代に大東亞戦争といふ前古未曾有の國難に遭遇したのであるから、その心構へも當然違はなければならぬ。

私は茲に於て皇國の將來の運命に輝かしきものあるを待望するものである。

一ノ谷、屋島、壇ノ浦の各戦ひは總帥源義經三十代の時であつた。元寇の役に於ける執權北條時宗は三十代の壯者である。楠正成の幾つかの鮮かな勝戦もやはり三十代でやり遂げたのであつた。川中島決戦に於ける上杉謙信は三十二歳、武田信玄が四十一歳であり、長篠の役では織田信長四十三歳、武田勝頼三十歳、關ヶ原の天下分け目の戦ひは徳川家康四十九歳の時であつた。かくの如く將帥は赫々たる武力戦の戦果を何れも壯年期に戦ひとつてゐる。現在歐洲そして又大陸の戦場に於て悽愴なる戦ひを戦ひ続け戦ひ抜きつあるものは何れも青少年が中心であることは事實だ。前大戦後疲弊のどん底にあつた獨逸に活を入れたのがヒットラー總統であり、彼のナチス黨であるが、復興の運命を托して養成されたのが實にヒットラー・ユーゲントであつた。革命後の蘇聯に於てスターリンは「子供は國家の子供である。母親の子供ではない」と稱して、國家に於て、之を取り上げて育成し訓練した。重慶の蔣介石すら中國革命の完遂を若き軍官學校の候補生に托して、一意専心之を愛撫し教育した。これ等の青少年が今第一線に銃後に一國の興亡を擔つて戦つてゐるのである。國家の將來の運命をトするには之を青年の上にてせよといふのはこの點である。相續く若い者によつて國家は老衰と死滅とから救はるるものといふべきである。

然し若い者の天下だと謳歌するのめどうかと思ふ。老人は若い者をけなし、若い者は老人を輕んずる様ではうまくゆくものではない。飽く迄和を以て貴しとし、億兆一心でなければならぬ。若しも老成者の頭腦が尙新しい思想を懷抱し且つ吸收する能力を有し、不慮の衝擊に堪へ、大膽且つ傳統に囚はれぬ計劃を實行し得るならば、彼の有する優秀なる知識と判斷とは青年よりも有利な地位に就くであらう。他方又若くして有能なる壯年は勿論、有能なれども老齡なる人に勝つことは疑を容れない所である。だから國家の集團有機的行動に方つては、老壯相混じ、一致の和偕に出でなければならぬと思ふ。

要するに飽く迄山本元帥の言葉の如く、老成者は壯年を禮讚し、壯年者は先輩に敬服する如くあり度いものである。大東亞戦争は悽愴なる決戦の連續する長期戦である。そして之を勝ち抜いた後に於ても大東亞共榮圈及世界新秩序の建設といふ更に大きな複雑な仕事が存在するのである。従つてこの連續永きに互り青年の負擔する任務は大且つ重なるを自覺し、之に應じ得る様に今日只今より忠良なる日本臣民としての鍊成に之れ努むべきである。(矢萩那華雄)

四月五日

花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは

徒然草

好

兼好、性は卜部氏、神祇大副兼茂の曾孫であるが、生年歿年ともに確實な資料なく、通説としては正平五年(1110)四月八日六十八歳にて歿すと傳へらる。これによつて逆算すれば、誕生は弘安六年(1193)であるから、鎌倉期の後半(北條時宗執權の頃)より吉野時代中期へかけて生きてゐた人と思はる。この言葉は徒然草百三十七段に出づ。

「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬもなほあはれになさけふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見所おほけれ」

春の爛漫たる風景よりも、むしろ春のあはれを感じさす情景に對する、兼好の感覚がよく出てゐる言葉で、日本人の情感の多様さを示す一例といへるであらう。花は眞盛りを、月は満月を見るのが普通のならばしであるが、しかし、それのみが見所ではない。雨にむかつて月の出を戀ひ望み、また垂れこめて春の行方のさだかならぬのを思ふもあはれ深い。未だ咲かぬ梢、或はすでに散り果てた後の庭、夫々おもむきがあつていい。自然の微妙な移り變りに、心こまやかに接するのが日本人の特色であり、そこに一切の功利感を捨て去ることを、この言葉は教へてゐる。(龜井勝一郎)

四月六日

はやりにしたがふは、いやしきなり

——女訓——佐久間象山

この句は、江戸お玉ヶ池寓居時代の佐久間象山が故郷松代にある姪北山りう女に贈つたと傳へらるる「女訓」の中の一節で、元來女の衣服のことについて教へたものである。上に

「もやうもいろも、すぬぶん花やかにて、しかも、じんじやうなるよろし」

とあつて、模様色柄に女らしい花やかさの必要なは言ふまでもないが、然もそれが尋常で中庸を得てゐることを必要とする。唯だ時の流行をのみ追ふは、みづから品格を貶すものである。そして、この句の下には、

「殊にわざをぎ、まひ子などのしだしたらむをば、いかに人はもてはやすとも、おのれの身にはあるまじきことにおぼして、きたまふべからず」

と云ひ、「おとなしく位あるやう」に仕立てて、決して物好きや奢りがましきことがあつてはならぬと説いてゐる。

ここに擇ばれた句は、まことに平凡であるやうに見えて、實は千古不易の眞理を物語つてゐることを見逃してはならぬ。

殊にこの句の眞意をよく味へば、女の衣裳だけに止まらず、思想や文化、藝能等の流行に對しても、わけもなくそれに流されることの賤しさを教へらるる。花やかにしておとなしく、氣品あるわが國ぶりの傳統に思ひを深くすべきではなからうか。(岡 不可止)

四月七日 愛馬の日

良馬は毛にあらず、士たるは其の志にあり

——約山詩集——尾藤二洲

尾藤二洲は徳川中期の儒者で、延享二年(西暦一七五〇)に生れた。名は孝肇、字は志尹、二洲又は約山と號し、通稱は良佐と云つた。伊豫川江の人、父は舟を操るを業としてゐた。幼より足疾があり、大阪に行つて片山北海に學んで復古學を受

け、頼春水より程朱の書を得て之を修めた。彼は音吐爽亮、識悟衆に超えてゐたが人と爲り恬澹簡易であつた。寛政中幕府に召されて昌平費の教官となり、俸二百石を給せられた。柴野栗山、古賀精里と共に所謂寛政の三博士と呼ばれた。その著に稱謂私言、素餐錄、正學指掌、靜寄餘筆、冬讀書餘、中庸圖解、易係廣義、論孟講旨、學庸衍旨、靜寄軒文集、約山詩集等がある。文化十年(西曆)十二月四日歿、年六十九。

此の句は約山詩集中の「男子」と題する詩の末句「良馬、不在毛、爲士在其志」である。「良い馬は毛色の如何にあるのではなくして、その質にあるのである。士たる者も亦其の志によつて價值が定まるのである」といふ意であつて、外貌の美よりも、心の美を貴ぶことを云つた句である。外貌の美を務むるのは婦女子のことであるから、男子たる者は斯かる婦女の態をば恥ぢねばならぬ。宜しく先づ剛正を貴ぶべきである。剛正の志こそ眞に男子の務むべきことである。ここに日本男子の本領が發揮される所以である。(澤田總清)

四月八日 灌佛會

道心あるの人を名づけて國寶となす

——山家學生式(六條式)——

最

澄

道心ある人、即ち道に活き、道を實行して社會を感化する人、此が國の寶。寶は物でなく、人にあり、人もまことの人、まことの道を行ふ人にある。

此は弘仁九年(西曆)最澄即ち傳教大師が嵯峨天皇に奏上し、比叡山で法華宗の修行者を養成するについて、その目的規模を具して御裁可を仰がうとした上奏文中の一句。即ち國の爲に國の寶を養成する理想信念を開陳したものである。而して、道心ある人といふのは、西(印度)では菩薩と稱し、東(支那)では君子と號すると加へてある。之を今日のことばに移せば、總て學校、道場、訓練所は、國の寶として眞に道心ある人、國の道を心として、身に世に道を行ふ人を養成するを目的とすべしといふに歸する。

此句をあてた四月八日は、古から卯月八日とて釋尊の誕生を祝することになり、灌佛會、佛誕會、花祭などと名づけて、朝廷でも民間でも行はれた。道心ある人の誕生を春の花によせて祝ふのである。(姉崎正治)

四月九日

面白の春雨や花の散らぬ程降れ

——隆達小歌集——

隆

達

隆達(大永七年(西曆)生、慶長十六年(西曆)十一月二十五日歿)は堺の藥種商であつたが、出家して、禪を學び、後還俗して、小歌をもつて稱された。その歌を隆達節といふ。近世の流行歌謡の源である。又、筆道に達してゐた。歿する時、年八十五。

その小歌を集めた書を、隆達小歌集といふ。この歌は、それにも見えてゐるが、當時廣く愛誦せられたことは、「陰

徳太平記」といふ書に、林吉兵衛入道梅林が京都より下つて三原の城に参り、小早川隆景に對面した時、隆景が、近頃都では何が流行るか尋ねたところ、梅林は、この歌をあげて、男女僧俗、八十の老翁、三歳の孩兒まで、普く口吟してゐると答へたことを見ゆるのも明らかである。

又、大和郡山藩の重臣、柳里恭(寶曆八年(西一八)歿、年五十六)の「雲萍雜誌」にも、花見の景に傘をさしてゐる繪が描いてあつて、それに「おもしろの世の中や、恩をわすれぬほどあそべ。おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれ。おもしろの酒もりや、ころみだれぬほど斟」といふ三首の小歌の書いてあつたことが出てゐるが、この同じ繪と歌は、幕末の勤皇畫家の田崎草雲の寫したものもある。

「面白の春雨や」が本歌で、他はその替歌であるが、いづれも教訓の意味を含んでゐる。併し、本歌の自然の境地に徹底した心の美しさには及ばない。ただ、この歌の精神の解釋としては、生活に度を過さぬ情趣が必要であるといふ寓意だけは汲みとることが出来る。さうした心持を、和やかな春雨によそへて、おのづからに眺めやつた清純が、わが國民性の自然を愛し親しむ心情の表現として、この歌から、はつきりと理解せられなければならない。(藤田徳太郎)

四月十日

我職業は天與の任務なり、之を愛重せざるは天與を辱むるものなり

有限無限錄——清澤澁之

職域奉公といふことがいはれてゐる。今日われわれは誰しも各自の職業につとめ勵んでゐるわけであるが、いつたい職業に對する考へ方そのものが一新しないかぎり、ほんたうの御奉公もいたがたいのではなからうか。

明治の佛敎者清澤滿之(文久三年(西三三)生、明治三十六年(西六三)歿)は、職業をもつて天から授かつた任務であるとした。したがつて、これは私のものでありながらしかも隨意に取捨改廢しうるていの事柄ではない。天から授かつた任務である以上、その所以をはつきり認識して、これをいつくしみ重んじてこそ、われわれの職責をはたしうるのであり、しからざれば天のあたへを辱かしむることになり、ひいては自己自身をも辱かしむる結果となる。

わが職業は天與の任務であると自覺すれば、今日やかましい轉廢業の問題もおのづから解決さるるであらう。すなはち、これは個々人のちひさなはからひではなく、じつに國家が天に代つてわれわれ國民のひとりびとりに授くるところの至上命令だからである。このとき、國民の一員として、われわれは私を滅してこの國家目的に添ふべく心身の總力をあげて職域に奉公する以外に絶対に誠の道はないのである。(西村孝次)

四月十一日

深山に寶あり、寶に心なき者之を拾ふ

二程全書——程明道

程明道、名は顛、字は伯淳、明道は其諡である。宋の仁宗の明道元年(西一〇三)に河南洛陽に生れ、神宗の元豐八年(西一〇八)に

吾に歿した。年五十四。程伊川の兄で、明道を大程子、伊川を小程子と呼び、合せて二程子といふ。周濂溪に師事してその感化を受けた。進士に及第して、主簿、令などの官に就いたが、到る處善政を布いたので大に民の信用を得た。後、太子中元に任ぜられた。當時王安石が勢力があつて、所謂新法の實施を策しつつあつたので、彼は之を非とし、至誠仁愛を説いてやまなかつた。然るに神宗は之を迂遠なる説として採らなかつたので、遂に朝を退いた。後、宗正寺丞に召出されたがその任に就かざる前に病歿した。明道文集、二程遺書、二程外書などの著がある。彼は純然たる儒教主義の人で、學者としても徳行家としても政治家としても宋代有数の人であつた。而して宋學の勃興と共に、儒學の精神をよく哲學的に發展せしめた人である。

此の句は二程全書にある句である。寶は深山にあるが、深山へ行つても誰でも得らるるものではない。寶を得ようといふ野望を抱いてゐる人には得られない。寶を得たいといふ不純な慾心のある人には得られない。却つて寶を得たいと思はない、名利に淡泊な人が得るものである。總て人は名利慾心を持つてはならぬ。恬淡にして清心ある人を貴ぶ。虚心坦懐である人こそ眞に寶を獲得する人であり成功する人である。(澤田總清)

四月十二日 武田信玄歿

人は城人は石垣人は濠

— 甲陽軍鑑 — 武田信玄

武田信玄(大永元年(三二八)生、元龜四年(三三三)四月十二日歿)の家は、源義家の弟新羅三郎義光の後で、いはゆる甲斐源氏の名家である。天文五年十六歳で、時の將軍足利義晴より諱字を賜り、晴信と稱したのである。この年父信虎信州佐久の海ノ口城の平賀源心を攻めたが、城堅くして拔けず、圍を解いて引き上げたが、信玄わづか三百騎取つて返し、折柄年末で敵がホツとして休養してゐる油断に乗じて、城を陥れ城將源心を討ち取つた。兵馬精強、信州、駿州、上州等を勢力範囲として、越の上杉、關東の北條と鼎立の勢をなしてゐた。

この座右銘の文句は、戰國時代既に各武將の間に格言となつてゐたものらしく、信玄の創作にかかるといふか、疑問だが、しかしこの文句を、最もよく活用して享受したのは、武田信玄に相違なかつた。彼は、常に士民を城とも濠とも頼んでゐたらしく、將士に對しては勿論、百姓に對しても租税を軽減して、之を撫育した。今でも、甲州人は信玄公と呼んで、その仁政を四百年後の今も傳へてゐる。従つて、一生涯居城を築かなかつた。將士を城と考へたからである。子の勝頼が、躑躅ヶ崎に新城を築くと共に、武田氏は亡びたのである。(菊池寛)

四月十三日

まだ見ぬかたの花をたづねむ

— 聞書集 — 西行

西行法師(元永元年(一一七八)生、建久元年(一一九三)二月十六日歿)の歌集聞書集にある「吉野山こぞのしをりの道かへて

まだ見ぬ方の花をたづねむ」の下旬を採つた。聞書集は、晩年の西行の歌を或人が聞くに随つて書きつけた集で、數百年間埋れてゐたものを昭和四年(二五九)に學界に紹介されたのである。

西行法師が行雲流水の生涯に於いて、諷詠に對する執心は、月花への限なき愛着となつてあらはれ、また來む秋まで「月ゆゑ惜しくなる命」を経つつ、山櫻に「來む年の春のため」の思しげき年月を送つた。

わけても吉野山はその「花ゆゑ深く入りならひつつ」しかも「奥なく入りてなほ尋ねみ」ようとする執着は、攻學心にもゆる如く、求道の一念にきほふ如くである。かつて探り得た去年の花は花として、更にまだ見ぬ方の花をたづねようとする意力は、學問藝能の道に通ずるものがあるではないか。極まつては展けてやまぬ科學の道、殊更今日戰時下に於ける第一線の飛行機、船舶からあらゆる戰爭機材の一日の長短が、千年の勝敗をさへ時には決せむとし、戰時下國民生活運営の道から個人の生活にまで、「まだ見ぬ方」への關心と意力が、常にゆるびなく要請さるるのである。

猶この歌は、西行自撰の御裳濯河歌合に採り、異本山家集にいたし、新古今和歌集、御裳濯和歌集、玄玉和歌集等の撰集にも見えてゐる所である。(伊藤嘉夫)

四月十四日

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し

——與楊士德書——

王

陽

明

王陽明が楊士德に與へた書翰にある句である。山に棲む賊を討ちとるは、心に巢くふ賊を打ち破るよりはるかに容易であるといふのである。古より「心の鬼」といふ本心が留守居をすれば鬼がすむ。孟子が學問の道は放心を求むるにありというたのは、放ち去つた心の主人公をとり戻せといふことである。主人が歸れば鬼は獨りでに遁げる。この鬼を陽明は賊といふ。心中の賊は中々手強く、これを征伐し退治することは難事である。惡は小なりと雖もなしてはならぬ。これ位はくと許す心が、即ち賊の侵入する間隙である。一たび賊が侵入すれば窟に藏れ、壘を構へ、牢乎として抜くべからざるものになる。

王子名は守仁、字は伯安、餘姚(浙江省餘姚縣)の人、明の弘治二年(三三九)の進士、かつて佞臣劉瑾の爲めに貴州の龍場驛丞に謫せられたが、艱難の際、深く悟るところあり、遂に知行合一の旨を發明して儒學に新生面を開いた。劉瑾斃れて後重用せられ、明の正徳十四年(三三九)大帽山の諸賊を平げ、宸濠を生擒にしてから盛名一時に振つた。彼は兵馬倥傯の間と雖も、一日も講學を廢することなく、從游の弟子も頗る多かつた。世宗の時、新建伯に封ぜられ、嘉靖八年(三九九)正月歿し、文成と謚された。その學、陸象山より出で、心を盡くし、良知を致すを以て本旨となし、而かも知と行とは一體にして離るべからず、眞に行はざれば眞の知なしというてゐる。彼は實に朱子以後の大哲人にして、本邦に於ても古來その學を奉ずるもの多く、道に於ては中江藤樹、識に於ては熊澤蕃山を出だした。陽明とは、彼が曾て室を陽明洞中に築き、門人達が陽明先生と喚んだから、その稱となつたのである。(土屋竹雨)

四月十五日 佐久間大尉殉職

細心の餘り畏縮せざらん事を戒めたり

遺書 佐久間勉

佐久間勉(明治十二年(二三九)生、明治四十三年(二五七)歿海軍大尉)は明治四十三年四月十五日第六號潜水艇長として周防國新湊沖に出動、半潛航作業中遭難沈没し殉職した。その遺骸の衣囊裡から発見された遭難顛末を現場にあつて手記した遺書は、事の壯烈と人の沈毅、文の簡潔とによつて夏目漱石を太だ感激せしめたが、この句も亦遺書中の一節

「余ハ常ニ潜水艇員ハ沈着細心ノ注意ヲ要スルト共ニ大膽ニ行動セザレバソノ發展ヲ望ムベカラズ、細心ノ餘リ畏縮セザラン事ヲ戒メタリ……」

に據る。全文片假名を以て記され片假名の文章らしい性格があるが、選定委員會に於て全體の統一上特に平假名に代へることとなつた。

句の意は簡明この人によつて値あるものである。この句の普及によつてその文意と併せてその行爲とその人々が常に國民の記憶に新なやうにといふのがこの句選定の大きな理由であらうと思ふ。(佐藤春夫)

四月十六日

高くこころをさとりて俗に歸るべし

赤冊子 松尾芭蕉

原典赤冊子(一月六日参照)には「高くこころをさとりて俗に歸るべしとの教なり」とあつて、著者の服部土芳は「常に風雅の誠をせめたどりて、今なす處俳諧に歸るべしと云也」と註してある。風雅の誠とは、今日の言葉で詩精神といふに近からうか。常に高邁な詩精神を探究して、さて眼前に爲すところは、俗談平話の俳諧に歸すべしといふのが、土芳の解釋である。しかしこの言葉は、そのやうに直接俳諧技法に結びつけて解するよりも、態度、心構へについての誠めと受取る方が芭蕉の心に近いのではないか。即ち、常に心を高く深く澄ませて、しかもさりげなく世俗に立ち混れ、そこにほんたうの風雅があるのだと見るのである。

世俗の中に、無自覺な生涯を終る人は餘りに多く、心を高く遊ばする人は少ない。しかし折角高い心を持してゐても、世間を見下し、己れひとり高しとするのではだめである。心を高く遊ばせ、しかも世俗に立ち混つてさりげなく住みなす態度、これは芭蕉の俳諧の態度でもあつたらうが、またその處世哲學でもあつたにちがひない。少くとも永らく市井に漂泊した芭蕉の體感から發した言葉であつたと思ふ。今日の時世に於いてなほ私達の心に深く通ふもののあるのは、單なる俳諧技法の問題を超えて、心法に達し、生き方の問題に觸れてゐるからである。(伊東月草)

四月十七日

勇往向前、一日は一日より新ならんことを欲す

古學先生文集

伊藤仁齋

此の句は伊藤仁齋（七月十八日参照）の古學先生文集の書齋私祝に見ゆる句

「欲^ス勇往向前、一日^ハ新^ニ一日^ニ矣」

である。人はすべて、勇ましく前へ前へと進むことが肝要である。躊躇逡巡は甚だ禁物である。何事でも勇往邁進してこそ初めて成功の彼岸に達しらるるものである。そして昨日より今日、今日より明日へと、日々に新たなことが望ましい。殷の湯王の盤の銘に、「苟も日に新に、日に日に新たに、又日に新たならん」とある。日一日と新たなる處に進み行くことは最も大切である。日進月歩の此世にあつて、日一日と新たな知識を得、新たな境地に進むことは、決して忘れてはならぬ。吾々は肇國の精神を確把し、肇國の精神に生けると同時に、又一方、日に新たなるの精進を怠つてはならぬ。ここに時世と共に進むべきと同時に更に又、時世に先んずべき精神の重要さが現はされてをる。（澤田總清）

四月十八日

古今和歌集撰上（延喜五年）

古^をあふぎて今^をこひざらめかも

古今和歌集

紀

貫

之

この句は古今集の序の最後の一句である。古今集は勅撰歌集の最初のもので、この序は、その撰集の趣旨を明らかにし、日本の歌が神詠であるといふ意味を強調したのである。撰者は、貫之の他に、凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑すべて四人だが、中心は貫之で、序は貫之の筆と信じられてゐる。

撰集の趣意は、儒佛の文明の旺んな日に、國風の美と文化をうち立つるといふ志に發してゐる。しかし貫之に於ては、日本の美を、ことだまのいのちやみちとしてとらふるよりも、美の諸相としてとらふる傾きの多かつたことから、後世では誤解された。しかしながら貫之の志は、國風の文化を確立擁護するといふ點で、道眞の志に通じてゐる。

この句の語義は、後の人が、古の御世を仰いで、必ず今の御世をしたふだらうといふ意味で、即ち貫之の生きてゐた延喜のみかどの御世を讃へ、勅撰歌集の出現した大御世を最大限に讃へたものである。このこふといふことは、戀ふといふ字が當り、これには祈るといふ意味がある。だから、古を戀ふことは、今の世に古の道の現れを祈ることでもある。

わが武家時代の文人は、みなこの一句を、己のいのちのたよとして、古の官廷の文化に歸依するみちを生きてきた

のである。その意味で、この一句は日本人の歴史から云へば、單なる座右銘でなく、生命を托した深い信條であつた。古今集の撰上されたのは、延喜五年〔一零五〕四月十八日である。これがこの序文にしろされてゐる。けだしこの序文は日本の美の思想の根源を語つた最高の文獻の一つである。(保田與重郎)

四月十九日

事を先にし獲るを後にす

——二宮先生語録—— 二宮 尊徳

出典は四大門人の一人にして高邁清秀の士齋藤高行の著「二宮先生語録」。尊徳年少の頃、鋏を損じ隣の老人に借用を申込んだところ、老人は豫定があるからとて拒絶したので、尊徳は「今私は暇だから、耕してあげませう」といつて、畑を耕すのみならず種まで蒔いた。すると老人は快よく鋏を借して呉れた。この體驗は尊徳の一生を通じて大きな教訓となつたのであつた。人に要求するよりも、先づ自ら身をもつてはたらくことである。ここから道が開くるのである。他の何ものをもたのまず、赤裸挺身荒地に鋏を打込む心こそは一切をはじむる精神である。この精神に透徹し我を捨て誠をつくせば、天下何一つとして通ぜざるはなく、成らざるものはない。この精神こそは實に「神代の古、豊葦原に天下りしときの神の御心」であり「開闢元始の大道」の根源である。尊徳に依れば、この精神は我國を開くと共に、それに歸る限り我國は永遠に隆ゆるのである。この開闢創造の精神は「無」から一切をはじむる精神として如何なる逆

境よりも立ち上り得る道を開くのである。つねに上司に對し農民愛恤の道を力説した尊徳は、同時にまた農民に對してはかかる獨立獨歩の精神を強調したのであつた。一切を大地そのものからはじむる道は如何なる時にも最後の道たるの意味を失はぬであらう。

本句と同一系統に屬するものに次の如きものがある。「米を得んと欲する者は農業をなすべし。願はずして自然に米を得。」「女を得んとする者は男業をなすべし。願はずして女を得べし。」「男を得んと欲する者は女業をなすべし。願はずして男を得べし。」「萬物發言集」(下程男旨)

四月二十日

撃つべきの機は、その間に髪を容れず

——日本政記—— 賴山陽

賴山陽(一月十日の條参照)の、「日本外史」と並ぶ史書「日本政記」卷之十五 後奈良天皇の條の論文の中の言葉である。あとに、

「急にすればすなはち未だその機に及ばず、緩にすればすなはちすでにその機を過ぐ」といふ言葉がつづく。

天文永祿の際の「三大戰」すなはち嚴島ノ戦ひにおける毛利元就、河越ノ戦ひにおける北條氏康、桶狭間ノ戦ひにお

ける織田信長の、各一寡を以て衆に敵し、勝ちがたきに勝つ」たゆゑんを論じ、戦争における「機」の大事を説いたもの。

山陽は、廣島藩儒頼春水の長男に生まれ、幼時から天才の名を得た。二十歳のとき、父の位置を継ぐことを嫌つて脱走したため座敷牢に入れらるること數年。その間、不朽の名著「日本外史」の執筆を企て、のち廢嫡の身となつて京都に移り住み、塾をひらいて多くの子弟を養成すると同時に、詩文に縦横に天分を發揮した。前記の史書のほか、楠正成を詠じた諸詩、菊池武光を詠じた「筑後河をくだる」詩、天草ノ灘の詩、兵兒の詩等々、今も愛誦される名詩が數へ切れない。中年以後母に仕へた孝心も名高い。その子頼三木三郎は、勤皇の志士として「安政の大獄」に捕へられて小塚原に斬られた。(藤森成吉)

四月二十一日

他をかへりみずして自分の善き事ばかりをすべからず候

——修身二十則—— 山岡鐵舟

山岡鐵舟(天保七年(二)誕生、明治二十一年(三)歿)通稱鐵太郎、諱は高歩。幕臣小野朝右衛門の子、後出でて山岡氏を嗣ぐ。至誠純忠、劍術をもつてあらはる。明治元年(三)徳川慶喜恭順の際、生命を賭して駿府に赴き、西郷隆盛と會見し、慶喜恩赦の御沙汰をうくることが出来た。後侍従として 明治天皇に奉仕し、子爵を授けらる。

本文は鐵舟十五歳の時の作「修身二十則」のうちにある。その意味は、自分のために好都合な事ばかりをすることに心をとらはれ、他人の事を顧みないやうになつては駄目だ、我を棄てて他人のためにするやうにしなければならぬといふことである。鐵舟の武士道観は、一身の得失を顧みないといふところから出發してゐる。年少の折父母から刻みつけられた忠孝観が、初一念となつて鐵舟の一生を律してゐたためである。鐵舟は後に『武士道』(明治年間會つての劍術の門人男爵籠手田安定氏の懇請によつてした講話の筆記)のなかに「武士は君國の爲めに一身の得失は顧みる所でない。己むを得ざれば大義其の身を滅する覺悟だ。只だ恐るる所は醜名の末代に傳はらん事である」と述べ、その初一念を大義その身を滅して君國に報ずるといふ自覺にまで進めてゐる。(佐藤堅司)

四月二十二日

まことに一事をこととせざれば、一智に達することなし

——正法眼藏辨道話—— 道元

道元(一月十四日参照)の考へ方の根柢は 佛佛祖祖といふにある。佛々祖々は、燦かな皮肉をそなへて、道を繼ぎ傳ふるのである。病にかかり、また生き死ぬことの出来るうつそ身の所有者である。永久不死にして唯一絶對の癡然たる固まりではない。親もなく子もなく、畢竟して素性のさだかならぬ全知全能の抽象神ではない。そこから、有名な「一方を證すれば、一方はくらし」といふ悲しみとうらみのこもる道元の美しい言葉も生れた。

その語録、正法眼藏隨聞記には、人々の用心として、一事を専らにすべきことが繰返へし説かれてゐる。多般に涉ることを求むるのは、全知全能の抽象神を唯一の依據と仰ぐからである。汝が明らかにしたと思へる多般の知は、實地を踏むに至つて悉く無力無智である。

まことに一事を急切にせずしては、一智一藝に通達することは出来ない。しかも、一法わづかに通ずれば萬法おのづから通ずるといふ感應の道もある。博學多識はしばらく南都北嶺のゆゆしき學者達に一任し、假令一事なりとも、ほんものを身につくるやうに精進努力すべきである。この一句は、何ごとにもあれ志を立てて精進するもの片時も忘れてならぬ用心である。出典は道元初期の著、坐禪をなしつつ眞言止觀の行など兼ね修してよろしいかといふ疑問に對し、斷乎として否と答へたところに出てゐる。(田中忠雄)

四月二十三日

少にして學べば則ち壯にして爲すあり、壯にして學べば則ち老いて衰へず

—言志晩錄— 佐藤 一 齋

この句には、さらに「老いて學べば則ち死して朽ちず」といふ句がつづく。そこまで云はないと、一生を貫いた學の、身後不朽の力をうたつた言葉が省かれたことになるのだが、しかしこれだけでも確言であると思ふ。壯年の力を培ふものは少時の學であり、老後の心神を強健ならしむるものは壯年の學である。殊に老いも若きも全身の力を振はねばなら

ぬこの時局に、老いて心神の衰へを見ることは許されない。壯年にして、學成れりとして、一種の緩怠に陥る風を戒めねばならぬ。(長谷川如是閑)

四月二十四日

我が氣に入らぬ事が我が爲になるものなり

—葉隠— 鍋島直茂

鍋島直茂(天文七年(三九八)生、元和四年(三三六)歿)は佐賀藩祖、豊臣秀吉に仕へ、文祿慶長の兩役朝鮮に出陣して功を立てた。後徳川家康に屬して肥前三十五萬七千石を領す。本文は『葉隠』に見ゆる。「良薬は口に苦し」といふ諺のやうに、氣に入らぬ諫言が却つて藥になるといふ意である。直茂の臣藤島生益は、屢々主君の御意に逆ひながら、或は主君の面目を保ち、また或は主君の生命を救つたやうな場合もあつた。嘗て直茂が海上で風波に會つた時、元來船に弱かつた直茂は早くも死を覺悟した。そこで直茂は生益にむかつて「平に差させよ、脇差ばかりなりとも差させよ、不肖ながら天下に名を知られたる加賀守(直茂)が、何國の浦にても死骸丸腰と云はれん事子孫の恥なり」と仰せられたが、生益は耳を傾けなかつた。生益は主君が脇差をもつて自殺をしいはしなかつたかと思はれたのである。直茂はその時には生益に對して憤激を禁じ得なかつたのであるが、風波がをさまり、難船を免れたので、大に生益を徳とした。さうして、後に「生益脇差を呉れなば、喉を突くべしと思ひけれども呉れず、不届に思ひしに今は大慶なり」と、あつさり自分の

非を白した。(佐藤堅司)

四月二十五日

懈怠怯弱の百歳は、勇猛努力堅固の一日に若かず

——法句經——

『法句經』(Dhammapadam)とは、眞理の含まれた佳句を、澤山集めたお經のことであつて、佛陀所説の金言を、四阿含十二部經から、印度の學者法救が撰輯し、吳の維祇難等が漢譯したもので、これは三十九品七百五十二偈から成つて居るが、巴利語藏經に收めてあるものは、二十六品四百二十三偈である。これは、羅旬譯、佛譯、獨譯、英譯もあるが、和譯も數種出來て居る。

此の經の内容は、佛敎の原始經典の中でも、最も古いものに屬するのであつて、佛陀が、親しく述べたり説いたりせられた金言佳句を、そのままに、或は弟子達が、若干手を加へたとも思はるるものを、編輯したものであつて、佛敎の要義を、簡明に示したといふだけでなく、極めて實踐性の豊かなものである。佛敎とはどんなものかといふことを、手取り早く知るには、都合のよいお經である。

此の經全體が、金言佳句の寶庫であつて、茲に擧げられた句が、必ずしも最も勝れた句だといふのではない。もつと勝れた句が澤山あるが、たまく此の句が、取り上げられたといふだけのことである。

句の意味は、殆ど説明を要しないほど明瞭である。一日再び晨なり難きを思へば、精魂盡くして、充實した一日を送らなければならぬ。一日の油断は百年の悔ともなるし、道を行つた一日は、無爲の長壽の百年にも勝るのである。要はただ、今日一日を、意義あらしめよと言ふのである。(高鳴米峰)

四月二十六日

一道萬藝に通ず

——五輪書——宮本武蔵

標題の出典は『五輪書』とされてゐる。五輪書は武蔵の著で、寛永二十年(三三)十月、彼が肥後國飽託郡岩戸山の洞窟に参籠し、その六十年の生涯の工夫鍛錬によつて築き上げたその独自の兵法の精髓を自ら書き綴つたもの、その五輪と稱する所以は、その兵法を地水火風空の五大に象つて、五巻に書き分けたのに基づくのである。武蔵の壁書と傳へられる『獨行道』(三月八日参照)とこの『五輪書』とは共に、獨り武道兵法に志す者のみならず、道を求むる人にとつて、精神の糧として必讀の書と推されてゐる。

揚題の意義は、一つの道にふかく徹したならば、それは單にその道のみならず、萬づの藝道に應用でき、立派にそれに徹することができるといふことを道破したものである。武蔵はこのことを五輪書の冒頭に於て、

「其後なほも深き道理を得んと、朝夕鍛練してみれば、おのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。其より以

來は、尋ね入るべき道なくして光陰を送る。兵法の利にまかせて、諸藝諸能の道となせば、萬事において、我に師匠なし。

といつてゐる。寔に彼は五十歳にして劍道兵法の極意に到達して、以後は尋ね入るべき道とてもなく、怡然として光陰を送つたのであつた。而して劍道により悟入した心境を以て、書に、繪畫に、彫刻に、行くとして可ならざるなき境涯を自力で開拓して行つたのである。之はひとり武藏に限つた事ではなく、凡そ一藝に達した者は、どこかに實に偉大な力を藏してゐる。一禪僧にすぎぬ澤庵から、柳生宗矩が劍の上で學んだところ甚だ多かつた如きはその一例であるが、之は要するに、一藝一道を究めんとすれば、それがどんな些細なことでも之に全身全靈を投じなければ成就しないのであつて、結局一藝の奥義に達するには、既に心身の鍛錬が自ら成つてゐるのであり、さればこそこの自在の心身が、直ちに他の諸藝の祕奥を直指するが故であらう。(井上朔郎)

四月二十七日 結核豫防週間開始

心は常に樂しむべし、苦しむべからず 身は勞すべし、やすめ過すべからず

—養生訓— 貝原益軒

これは貝原益軒が其著『養生訓』卷ノ二に言つて居る言葉で、養生訓としてはなかく適切な言葉である。益軒は寛永三年(一六八六)に生れて正徳四年(一七一四)に死んだ福岡の碩學であつた。益軒の著書にはいろいろなものがあるけれども、

その中で『養生訓』といふのは廣く社會に愛讀され、今日に至つてもこれによりて裨益されて居るものは少くない。殊に専門の醫學博士が之れを尊重して居る。而して最近に至つては此書は支那に翻譯されて居ることは大に注意すべきであると思ふ。

益軒が「心は常に樂しむべし」と云つたのは衛生上非常に大切なことで、人生はなかく複雑で、何時でも順境で愉快な事ばかりあるわけではなく、随分懊惱苦痛を免るべきではないけれども、如何なる事があつても之れを克服し、樂觀し去るだけの力が無くてはならぬ。心は持ちやうによつて何んなにでもなるもので、苦しいと思へば苦しい、楽しいと思へば楽しい。如何なる勞苦も決して厭ふことなく、楽しい精神を以て之れを遣り遂げて行けば能率が上るばかりでなく、衛生上効果多大である。

いくら富裕で遊んで暮すことが出来るといふ境遇にあつても、何ら勤務勞動することなく、ブラ／＼して歳月を過し、國家のために盡くすことの無いのは人としての義務を怠つて居るのである。

尙注意すべきことは、益軒が「心は常に樂しむべし」といふやうなことは、彼の獨逸の生理學者フハランドの云つたことと殆ど符節を合するが如き感がある。而して益軒の方がフハランドより約二百年も前に出たことを注意すべきである。(井上哲次郎)

四月二十八日

世を安んじ、國を安んずるを、忠となし孝となす

——昨日御書——

日

蓮

此文の意味は殊更解説を要しない位である。只注目すべきは忠孝を人と人との関係といふ以上に、大義の上から見た點にある。情誼から出る忠孝は、勿論美はしい。然し只情だけでは、迷を生ずる危険もある。人間の至情から發して、國の道できたひ上げた忠孝にして始めて大義に徹する。情と義とが一つになり、之を道として、國の爲、世の爲に盡すのが君に忠に、親に孝なる所以となる（十二月三日の條参照）。

この一昨日御書といふのは、日蓮が國難に關して屢ば諫言を幕府に呈し、爲に權柄者ににらまれて危機が切迫してゐた。その際、文永八年（一一三〇）九月十日、召出されて、一層強く主張を明らかにした。越えて二日、一書を侍所司たる平ノ左衛門に書き送つたのが此書であり、中に「君の爲、一切衆生の爲」に諫言するとて、右のことばで結んだ。然るに、左衛門はその時、自ら兵を率ゐて日蓮逮捕に向向してゐて、手紙はすれ違ひになつた。かくて逮捕、糾問、宣告、而して日蓮を斬らうとしたが果さなかつた。此が所謂龍ノ口の法難であつた。

侍所の司といふのは別當の下役であつたが、左衛門は實權を握り、幕政の萬事を切りまはしてゐたので、日蓮の逮捕や斬もその人の采配から出たのである。此の下剋上の權柄者に向つて、忠孝の大義を説きかせようとした氣魄に特別

の注目を要する。

忠孝の實行は、人々の位置境遇や時の事情で、方法様式を異にする。只大忠大孝の根本精神は一つであり、あらゆる意味で世を安んじ國を安んずる爲の一分にでも身をささぐるにある。（姉崎正治）

四月二十九日 天長節

萬古 天皇を仰ぐ

——正氣歌——

藤田東湖

正氣歌の作者、藤田東湖（文化三年（一八二六）三月十六日生、安政二年（一八二五）十月二日歿）は諱を彪、字を斌卿といつた。大儒幽谷の子で夙に父の指導を受け、學問、武藝に勵み、偉才を以て深く嚮望された。二十二歳の時、父が卒去すると、家を繼いで進物番となり、ついで彰考館總裁代役となつた。

後、烈公德川齊昭が藩主となると、郡奉行に任ぜられ、江戸通事に進み、更に側用人に拔擢されて、政治上の樞機に參與したのである。當時、烈公は在來の宿弊を破つて、政教革新につとめ、殊に國防充實と國民道德の振興に力を入れ、尊皇攘夷に心を傾けた。東湖は之が參謀長となつて始終輔翼し、貢獻した所が最も多い。

ところが、保守を旨とした幕府は、東湖らの急進主義を忌み嫌つて、弘化元年、烈公を幽閉し、ついで東湖に向つても、幽囚、謹慎を命じた。之がため三年間の苦勞を重ねたが、屈せず、「正氣歌」を作つて尊皇愛國の精神を鼓舞し

た。後、免されて内政、外交上に活躍したが、安政二年、大震のため卒去した。時に年五十。贈正四位。

右の句は、「正氣歌」中に

「神州誰か君臨す、萬古 天皇を仰ぐ、皇風六合に洽く、明德、太陽に俾し」

とある所から採つた。萬古とは永久の意で、萬世一系の 聖天子を御主君と仰ぎ奉る日本國體の尊嚴、崇高なことを詠じたのである。天長の佳節に朗誦するに最もふさはしい句と思ふ。(高須芳次郎)

四月三十日 靖國神社例祭

勅を奉じて死す、死すとも猶ほ生けるがごとし

— 戊午幽室文稿 —

吉 田 松 陰

安政五年(三三八)三月二十日、畏くも 孝明天皇は老中堀田正睦を宮中に召して、暗に日米通商條約拒否の勅諭を下したまひ、あくまで攘夷の御精神をつらぬいて祖宗の御神靈に應へたまはんとあそばされた。在京門下生の報告によつてこれを知つた松陰及び松下村塾生の感激はたとへやうもなく、雀躍して天朝興隆の機至ると叫んだ。松陰はこの勅諭を拜した諸侯就中勤皇雄藩としての毛利藩のとるべき態度を、早速「對策一道」(戊午幽室文稿所收)といふ一文に草して藩政府に呈出した。この句は、その附論中に出てゐて、下句「勅に背きて生く、生も死に如かざるなり」と對句を成してゐる。

當時、藩士のうちには、そのうち叡慮も變更あらせらるるかも知れぬから、暫く形勢を觀望したらよからうといふやうな怯懦心に發する俗論が行はれたが、松陰は、「六年の精誠何と一朝に改まり申すべき哉、餘り勿體なき申分には御座なく候哉。且つ改まり候共、叡慮に隨ひ候はば道義において何の不可あらん哉」と述べて、未だ改まりもせぬ叡慮を蔑ろにする連中を、惡逆無道の國賊として痛烈に難じた。

まことに 勅命奉行こそ皇國臣民にとつては、唯一絶對、最高至純の道義なのである。寶祚天壤無窮であるから、上御一人に絶對隨順の誠を捧げ奉る臣道もまた無窮であり、従つて畏命奉勅の死は、死にあらず、皇國臣民の歴史の中に悠久の生を獲得するものであつた。維新の志士をはじめとして、勅を奉じて戦死した幾多の英靈は、靖國の神と祭られて、まさしく永遠に生きて護國の誓を果しつつある。今日招魂の日、英靈に無限の感謝の祈りを捧ぐるとともに、この崇高な道義精神をわれ等の内なる生命に喚び起して、英靈の後につづく決意を一層固めねばならぬ。(岡 不可止)

五

月

五月一日

初めあらざることなし、克く終りあるは鮮し

——詩——
經——

詩經は東洋古典としての五經の一であり、主として支那の周初より春秋時代にかけて（皇紀前六二年が、春秋時代の始年に當る）の詩を集めたもので、我國の萬葉集に當るものである。その内容は三百五篇あつて、風、雅、頌の三體に分れてをり、風は春秋十五ヶ國の國風であり、雅には大雅と小雅とがあり、頌には周頌魯頌商頌がある。此の句は大雅の蕩篇に見ゆるもので、原文は「靡不有初。鮮克有終。」である。詩の意味は人君が初めは善政を勤むるが、能く終りまでその善意を盡くす者の鮮いことを嘆じて時王の虐政を傷んだのである。これを斷章取義して、一般に人は最初は熱心に努力するが、喉元過ぐれば熱さを忘るるの類で、最後までその緊張を續くことが出来ずに怠り惰くるに至る者の多いことを嘆じ戒むる語として引用される。人間は不斷の努力が何より大切である。塵も積れば山と成るといふ様に少しづつの努力を積み重ねて行つて始めて大きな事業が出来るのである。熱し易く冷め易いのは、我が國民性の弊である。殊に皇國の安危の懸る此の大決戦に於ては、最初の勇猛突進は素より必要であるが、それにも増して要望さるべきものは、最後の瞬間に至るまで此の緊張と努力とを續けて有終の美を完うすることである。（高田眞治）

五月二日（八十八夜）

心を種ゑて産業と爲さば由來皆美田良宅なり

——聯——
瑾——
石——
天——
基——

生年月日は不明でも、歿年月日はつきりして居る人は多いが、石天基（清の世祖の順治十六年（三九）生）はその逆で、生れた年ははつきりして居るが、歿年月日はわからないのである。八十一歳の時の自著の序に依つて、相當長命の人であつたといふことはわかる。姓は石、字は天基、惺齋と號し、今の江蘇省揚州府の名族であつて、世に揚州の石先生と呼ばれて居たところからも、その學徳が、深く厚かつたことが想ひやられるのである。陽明學を學んで、良知の心法に傾倒した一面と、佛典を研鑽して、參悟した一面とを兼ね備へた、謂はゆる學行一體、言行一致の士であつたと思はるる。

その著『聯瑾』（十月二十八日の條參照）の中に、

福を兒孫に留むるは、未だ必ずしも黄金白銀を盡くさず。心を種ゑて産業と爲さば、由來、皆美田良宅なり。（原文）

物の力と心の力とを對照して、精神力の尊貴なる所以を道破したものである。吾等は、子孫を幸福ならしむるには、金を積んでこれを遺すべきか、徳を累ねてこれを傳ふべきかといふに、黄金（金貨）白銀（銀錢）百千萬圓を集めて見

たところで、ただそれだけのものではかない。一處、世界の富を自分一人の手中に收むることも出来ず、又假りに、巨萬の富を積んでこれを子孫に遺したところで、子孫よくこれを活用するかどうか。「親留める、子樂をする、孫乞食」。賣家と、唐様で書く三代目」。甚だしきに至つては、遺産の奪ひ合ひをして、法廷に、兄弟壻に鬩ぐの醜をさらすものさへある。

これに反して、心を種うること、即ち徳を累ねてこれを子孫に遺すことを産業とするならば、何もかも、皆、美田良宅となつて、子孫を幸福ならしむるに至るといふのである。西郷南洲吟じて曰く、「我家の遺法、人知るや否や、兒孫のために、美田を買はず」と。讀者會すや否や。(高嶋米峰)

五月三日 健康週間開始

溝をばすんと飛べ、危しと思へばはまるぞ

——東海夜話—— 澤庵(宗) 彰

澤庵禪師(前出)の東海夜話(前出)にいづる句である。この句の前に、

「何事もおづるな おづるな。おづれば仕損ふぞ。おづるは平生の事、場へいではおづるな おづるな」

とある。おづるといふことは、事に當つて分別がでて、一心になるからであつて、かうなると卑怯な振舞ひが行はれる。「何事もせんと思ふことを、すんと思切つてするは本心なり。せうかせまじきかと二途にわたるは血氣なり」とも

いひ「此事をせんと思はば、ただ一道にしたがよし。二途にわたる程ならばすべからず」ともいつてゐる。本心と一道とは一つ意味のものである。即ちこれは無分別境、あれこれへと心かねぬもの、即ち不動心であり、だから一意専心の一道である。

人は物事に當面した時、事の大小に拘らず決定的にそれと面と向つてゐるのである。死か生か、食ふか食はるるか、勝か負か、是か非かは、大事件にのみあることではなく、念々瞬時にさうした方では對者とかかはりあつてゐる。二つの物の間に意志の緊張がいつもあるのである。つまり一つの道のみが、その解決にあるだけで、死中活ありといふやうなことも關係のあることがらである。事に當面し、ためらひ、はからひ、おちてゐてはならないわけは、物事がさうした迫力で、我に決定決斷をうながして、相對してゐるからである。すんと飛ぶがよい。危いといふ懸念を捨ててやれば飛べるのである。

病は氣からといふが氣が二途に分るるのは、一種の病氣である。又病氣を重くする。無念の決斷精神は、そのまま健康者の精神である。(筑土鈴寛)

五月四日 三國干涉(明治二十八年)

いかに強敵かさなるとも、ゆめゆめ退する心なかれ、恐るる心なかれ

——如説修行鈔——

日

蓮

此文の意味は、解説するまでもなく、此の心、此の勇が、國としても個人としても大切であつて、要は義を踏んで、退轉せず、心中恐を抱かないにある。

此一書は、佐渡遠流中、日蓮が一生の中軸たる觀心本尊鈔（二月五日條参照）を述作して、之を本土の門人に送り、つづいて信念生活の心得を書き示した。己が信じて身心を托してゐる眞理の命する所に従ひ、堅固の信心を以て貫けば、かさなる強敵も迫害も恐るるに足らぬといふにある。

日蓮が門人に與へた信念の内容には立入らず、この教訓は文字のまま何人にも通用する。特に我等日本國民は、この貴い國ののちに生き、國の徳を身に體して、國の使命を貫く爲には、いかなる強敵をも摧き、又その爲にはいかなる苦難にも耐ふる。退する心なく、恐るる心なく進むには、この國の天職に對して不拔の信念を要する。

なほ明治廿八年の此日に來た三國干渉については、一々述ぶるまでもなく、その時の隱忍が臥薪嘗膽の國民的憤激となつたので、その後の歴史は、この不屈精神の賜であり、今日の大戦も、一面ではそのつづき又發展といふべきであらう。而して忘れてならぬのは、この三國干渉には黃禍説といふ思想背景のあつた事である。今後それがいかなる形、いかなる力で、どの方面から襲ひ來るか。警戒と覺悟を要すると共に、恐れず屈せず、正大雄渾に大義を貫く一途あるのみである。（姉崎正治）

五月五日 端午

神州男子明決を尙ぶ

天台道士著作集

杉浦重剛

杉浦重剛は安政二年（三三三）三月三日、近江國膳所に生れ、明治三年（三三〇）十六歳にして膳所藩貢進生として上京、大學南校に入る。九年（三三六）六月、英國留學を命ぜられ、農藝化學を學んだが、のち純正科學に轉じた。十三年（三四〇）五月病のため歸朝、十五年（三四二）二月東京大學豫備門長に任ぜられ、十八年（三四五）十月辭す。二十一年（三四八）四月雜誌『日本人』を創刊、七月文部省參事官兼專門學務局次長に任ぜられたが、事をもつて文部省の官僚と衝突、辭表を提出した。

大正三年（三四四）五月二十三日 東京御學問所御用掛を仰せつけられ、爾後滿七年のあひだ、倫理學を御進講申上げた。『倫理學御進講録』はその草案であつて、およそ日本國民の謹讀すべき書である。大正十三年（三四四）二月十三日、七十歳をもつて歿した。

けふは端午の節句である。この日にこの人のこの句あり、また快なるかなである。いやしくも日本男子たる者は何を最も尙ぶか。いはく明決。明決は明快、明秀、明肅、明穎、明斷をすべて合せたものよりもさらに勁くさはやかである。おもふに明毅といふ語がこれに幾いであらうか。杉浦重剛の生涯がそれであつた。杉浦は揮毫を頼まると、好ん

でこの銘を書いたといふ。日本男子の尙ぶところもまた明決を描いて他にない。見よ、端午の節句の空を。(西村孝次)

五月六日 (立夏)

満目青山は心にあり

——謡曲・弱法師——

謡曲弱法師は、世阿彌元清の嫡男、觀世元雅(永享四年〔1393〕歿)が作曲したもので、天王寺の彼岸會を背景として、盲目の乞食弱法師をシテとした曲である。この句は弱法師が

「あら面白や。われ盲目とならざりし前は、常に見馴れし境界なれば、なに疑ひも難波江に、江月照らし松風吹き、永夜の清宵何のなす所ぞや。住吉の松のひまより見渡せば、月落ちかかる淡路島山、とながめしは月影の、今は入日や落ちかかるらん。日想觀なれば、曇りも波の、淡路繪島須磨明石、紀の海までも、見えたり。満目青山は心にあり。あう見るぞとよく」

と、身は盲目であるが、すべての美景は、心の眼にありありと映じて來るといふ意をのべた語である。

この句は禪林類聚や傳灯録に、徳詔禪師の「住通玄峰偈」といふ偈文の一句としてあげられて居るところの「心外無法、満目青山」に典拠を持つ句である。偈文の意義は、我が心以外に法(森羅萬象)が存在するものではない。すべての存在は自己の心に於てあるのであつて、満目の青山も皆これ我が一心の所變であるといふ意である。一心

轉變して萬法を生ずといふ佛教的な意味を示したものを、謡曲では、前述のやうな意味をあらはすものとして用いたものであるが、「見る主體によつて見らるる客體が創造せられるものである」といふ考へ方は、我々の精神といふものを考ふる上に、非常に興味のある問題であると思ふ。(能勢朝次)

五月七日

曲れるは輪につくり直なるは轆にせんは徒なる人は侍まじき也

——竹馬抄—— 斯波義將

斯波義將については、八月七日の條に記して置いた。この語もその著竹馬抄に出てゐて、人の使ひ方を説いた條に次のやうな形で見えてゐる。

「智恵も侍り心も賢き人は、ひとをつかふに見え侍なり。人毎のならひにて、わが心によしと思ふ人を、萬のことに用ひて、文道に弓箭とりをつかひ、こと葉たらぬ人を使節にし侍り、心とるべき所に鈍なる人を用ひなどするほどに、其ことちがひぬる時、なか／＼人の一期をうしなふことの侍なり。その道にしたしからむをみて用べき也。曲れるは輪につくり、直なるは轆にせんは、徒なる人は侍まじき也。たとひわが心にちがふ人なりとも、物によりてかならず用べきか」

智恵もあり、賢い人は、人を遣ふ遣ひ方によつてわかる。人は自分の氣に入つた者を何にでも用ひたがる癖があつ

て、文雅の道に武骨一遍の武士を使つたり、口上も十分にいへないやうな人を使者に立てたり、心さどく氣の利いた人
を必要とするところへ、鈍重な人を用ひたりする。そんな風にして事を誤ると、人の一生を失ふこともある。その道に
適するかどうかを見て用ふべきである。曲つたのは輪につくり、眞直なのは車の長柄にするといふ風にすれば、むだな
人間はないわけである。例へ自分の氣に入らぬ人間でも、その材によつて必ず用ひるべきであらうといふのである。ひ
とり將たる者の心得たるにとどまらず、すべて人の上に立つ者にとつての金言である。古への英雄豪傑は、多くは人使
ひの名人である。(菊池 寛)

五月八日

分別過ぐれば大事の合戦は成し難し

——名將言行録——

黒田孝高

智將黒田如水軒が一子長政に死期遠からざるを思ひ、枕頭に呼んで、その將來を懇々とさとした。さて小姓に命じて
紫の服紗包をとり出し、これは譲り物だといふ。開いて見ると、片足づつの草鞋と木履と、それに溜塗の麴桶があつ
た。是を長政に譲つて

「一軍は死生の境なれば、分別過ぐれば大事の合戦は成し難し。草鞋と木履とかた／＼にて二つの物關にてなければ、
大事の場合思切は立難し。其方は賢き故に先の手が見え過ぎ候て、何としても大なる武邊は成るまじ。又此麴桶は

飯入なり、貴賤共兵糧なければ何事も成らぬものなり。入らざることに金銀を費し損させんより、兵糧を貯へて軍
陣の用意を常に心掛けよと言ふことを示さん爲に譲るなり」

といつたと、名將言行録にある。合戦といふものは生死の境界であるから、いちかばちか運を天に任せての勇斷が大切
であつて、小才を以て先のことばかり考へてゐるやうではだめだといふのである。(菊池 寛)

五月九日

水を飲んで樂しむ者あり、錦を衣て憂ふる者あり

——東里外集——

中根東里

東里(元祿七年(二三四)生、明和二年(二四五)二月七日歿)は伊豆下田の人にて、中根を姓とし、名を若思、字を敬父と
云ひ、東里は其號である。幼時僧となり、儒に轉じ、荻生徂徠、室鳩巢に學んだが、晩年支那の明の王陽明から出た陽
明學に落ちついた。高潔にして清苦に甘んじ、研學の傍子弟を教育し、弟の女を教訓するため「新瓦」といふ教訓録を
著はした。各地に移つたが、下野の佐野にもつとも長く居つたので、其處に門人も多く、教化も遠つた。最後は相州浦賀
の姉の許で死んだ。門人が編纂した東里遺稿と外集との遺著が二冊ある。其外集に、壁書と題して訓言が十五條ある。
前掲の銘語は其一つである。人は貧乏すれば、其れを苦に病み、財産が出来たなら、出世が出来たなら、どんなに嬉し
からうかと思ふが、憂も苦も心の上の事で、物や地位には關係せぬ。世には錦の美衣にくるまり、榮耀に暮らしてゐて

も、一家の不折合とか、自分の不良行爲に良心が責められ、心配の中に日を送る者が多い。其反對に、悪衣粗食水を飲んで暮らす家庭にも、家内睦まじく、心は平和に、何の心配もなく日暮らしをして居る人も少くない。論語に孔子が「水を飲み脰を曲げて之に枕す、樂亦其中に在り」と云はれたのも、其れである。世には金だ衣物だというて、憂身をやつし、國法まで犯す人がある。そして精神的には始終人前を憚り良心には責められ生きがひのなき生活をつづけて居る。心すべきことである。(山田 準)

五月十日

武士道の學問と申すは内心に道を修し外形に法を守るといふより外の儀は無
之候

——完本武道初心集—— 大道寺友山

大道寺友山(寛永十六年(三十九)生、享保十五年(三十九)歿)通稱孫九郎、諱は重祐、知足軒と號した。越後國村上邑に生る。江戸に出で、小幡景憲、北條氏長、遠山信景(福島國隆)、山鹿素行に就いて兵法を學んだ。はじめ淺野家(赤穂)に寄寓し、會津侯の客となり、後武州岩淵に隱遁したが、晩年越前侯に仕へた。著書「完本武道初心集」(從來の「武道初心集」四十四條本に對して新發見の五十六箇條をかやうに呼ぶことにした)は、「葉隠」と共に武士道書の雙璧をなす。但し本書が大小兩義武士道を兼ねてゐたのに對して、「葉隠」が小義武士道一偏に傾いてゐたといふ相違はある。本文は「完本武道初心集」からの引用であるが、武士道の學問を内心、外形兩方面から考へ、これまで知られて來た

四十四箇條本が外形のみを取り扱つてゐたのに對して、特色を發揮してゐる。内心に道を修するといふのは、武士道の正義、正法に従つて事を取り計ひ、非義、邪道を行はぬことである。外形に法を守るといふのは、二法、四段を保つことである。二法とは常法、變法をいふ。常法二段にわかれて士法、兵法となり、變法二段にわかれて軍法、戰法となる。(佐藤堅司)

五月十一日

自ら反みて縮くんば千萬人と雖も吾れ往かん

——孟子—— 孟子 軻 (孟子 子)

是れは有名な孟子の浩然の氣を論じた章に出てゐる言葉であつて、曾子の語として引用されてゐる。即ち

「曾子曰く、吾れ嘗て大勇を夫子に聞けり。自ら反みて縮からずんば揭寛博と雖も吾れ憚れざらんや。自ら反みて縮くんば千萬人と雖も吾れ往かん」(昔者曾子謂子襄曰、子好勇乎、吾嘗聞大勇於夫子矣、自反而不縮、雖揭寛博吾不憚焉、自反而縮、雖千萬人吾往矣)

といふのである。曾子が夫子から聞いたといふのであるから、元來此の言葉は孔子の言つた語である。孔子はかかる大勇の人であつたのである。曾子(名は參)も亦此の風を受けて實踐躬行の大丈夫となつた。曾子が千萬人と雖も吾れ往かんといふ大勇は、道義を守ることより來る眞勇である。孟子の所謂浩然の氣といふのも、此の道義に本づく大勇より

する不動心と不離の關係に在るものである。浩然の氣といへば何か珍らしい氣象が別に有るかの様に聞ゆるが、要するに道義的精神に外ならぬものである。天地の正氣といふのも亦これである。即ち千萬人と雖も吾れ往かんの眞勇は、此の道義心に本づいて發生するのである。今や大東亞戰の決戦酣なるの秋、一億の同胞盡くが此の大勇を具備するの覺悟が無ければならぬ。孟子は周の烈王四年〔皇紀二六九〕に生れ、赧王二十六年〔皇紀三三〇〕に歿した。(高田眞治)

五月十二日

道を枉げずして能く人心に順ふ、此れ中庸の極なり

——閑居筆録—— 伊藤 藤 東 涯

此句は閑居筆録、卷中にある句。「不枉道而能順人心、此中庸之極也」。

道を枉げないでよく人の心に順ふのが、中庸の道の極致である。中庸とは、出す入らずの道で、程々になつた宜い加減の道である。即ち中とは過不及のないこと、庸とは變らぬつねの意である。孔子の教は中庸の道である。中庸の道は決して極端ではない、程宜い道である。此はその道の極致を述べた句である。人は動もすると人心に逆らふことをすることがよくあるが、何事でも、正道に據らないで人心に逆らふことをすれば、必ずやよい結果は齎さないものである。従つて中庸の道は、何事に於ても肝要な、そして穩當な道である。(澤田總清)

五月十三日 松平定信歿

樂しきと思ふが樂しきの本なり

——千秋館座右銘—— 松平定信

定信(寶曆八年〔西一八八〕十二月十七日生、文政十二年〔西一八九〕五月十三日歿)、號は樂翁、花月翁と云ふ。父は歌人として歌集天降言を遺し、國學有職に造詣の深かりし田安宗武、祖父は八代將軍徳川吉宗である。安永三年〔西一四四〕幕府の命に依り奥州白河藩主松平越中守定邦の養子となる。年十七。天明三年〔西一四九〕所謂天明の大飢饉と稱せらるる未曾有の凶歳に際し、父の致仕を承けて襲封、越中守に任ぜられた。この難局に當つて定信は實踐躬行家臣領民を諭して勤儉の風を作興し、飢民に食を與へ、財政を立直し驚くべき治績を擧げた。恰も田沼意次の失政により物情騒然幕政危殆に瀕する時擢でられて老中首座となる。時に三十歳。以後足かけ六年願に依り老中を免ぜらるるまで、稗政の改革に心魂を傾け、財政、國防、文教等に所謂寛政の改革、寛政の治といはるる大きな足跡を残した。その間天明八年〔西一五三〕皇居炎上に遭ふや、恐悚上京して御造營を督した。皇居竣成を告ぐるや、光格天皇は深く之を嘉し給うた。老中を辭してからは白河藩治の旁ら著作を事とした。政治經濟文學考古有職兵學茶道醫學等廣汎なる部面を持つ。中にも祕録大要は、圓かな鎖國の夢を破る警鐘といひつべきものである。文化九年致仕の後には觀月詠花に自適しつつも烈々たる憂國の情を燃しつつあつた。「末終にあたちが原の露の身も國を守りの鬼とならなむ」等は當時の所詠である。文政十二年〔西一八九〕五月

十三日歿。

この座右銘は致仕の館築地の千秋館の壁書の一部である。扁額の表面は沙世八法で裏面に自筆の雅文を雕る。これはその終末である。樂しきは内であり外ではない。疏食を食ひ水を飲むも樂みは自づと内にある。心誠ならば逆境にも悲境にも樂みは存する。誠ならざれば美衣飽食豈樂みならんやである。有史以來の國艱に當り我々の日常生活は日々苛烈なる試練である。この時に當りこの一句又三思すべきものであらう。(松平定光)

五月十四日

忠孝二なく文武岐れず學問事業其の效を殊にせず

— 弘道館記 — 徳川齊昭

徳川齊昭(寛政十二年(西曆1800)三月十六日生、萬延元年(西曆1850)八月十五日歿)は、水戸第九代の藩主で烈公の名を以て世に知られた幕末の名君である。字は子信、號は景山、また潛龍閣とも稱した。科學知識に富み、政治、經濟に通じ、文藝、武技にも長じてゐた。夙に尊皇精神を抱いて、幕末多難の時局に當り、皇國擁護の至誠に満ち、率先天下に向けて攘夷を高唱したのである。

齊昭は急進主義の政治家で、その尊皇主義のもとに爲した事業は多方面に互つてゐる。先づ藩主となつた當時、改革を斷行して、文武を奨励し、質素、勤儉を勧め、宗教界の弊風を一掃した。ついで國防充實に心を注ぎ、大艦巨砲主義

の必要を唱へて、自ら戰車、脇差銃砲、小銃、手銃及大砲、彈藥の運搬車などを發明し、進んで大砲を作り、また幕命によつて軍艦をも作つたのである。

さうした間に於て、齊昭が頗る力を盡したのは、勤皇學徒を養成する弘道館(藩校)の建設だつた。之は天保十二年(西曆1841)に假開館式を挙げたが、その館記が東湖の手で出來上つたのは天保九年(西曆1838)のことである。ところが「昭の執つた急進主義は幕府の忌む所となり、前後二回幽閉されたが屈撓しない。その卒去したのは六十一歳の時で後長くも正一位を贈られた。右の句は忠孝は一つであり、文武も亦一途であり、學問、事業の三者がそれ／＼一體となつて作用して、効果を全的に示すものであることを明らかにしたのである。(高須芳次郎)

五月十五日

人生劈頭一個の事あり、立志是れなり

— 丙寅録 — 春日潛庵

人生に於ける第一の事は、志を立つることである。志立たずして事の成る筈がない。功の成否は一に志の立立にある。舵なき舟、銜なき馬が、果していづこに行くであらう。孔子は十有五にして學に志した。その志すところは、無論「道」である。陽明は八歳にして聖人とならんと志した。千載の絶學を繼ぎし所以である。

凡そ成すところあらんとするものは、その志必ず大である。荀子の所謂「冥々の志なき者は昭々の明なし」で、志な

きものに大功のある譯がない。吉田松陰曾て廿四史を讀まんと志し、家兄杉梅太郎に宛てた書翰に、「身體の骨は何本あるかは知り申さず候へども、十本ばかりも折れ候はば、あとは烏賊を食ひたる猫の様に相成り申すべきや、これも一つの懸念」といつてゐる。讀書のために肋骨の十本も折れたらばといふ決心である。何と男々しく、比類なく堅き志ではないか。

一年の計は春にあり、一生の計は少壯の時にある。少壯にして志を立てずんば、老大膽を嘆むも猶及ばざる悔をこのこととなる。故に立志は人生の始めである。潛庵の事歴については三月五日の條参照。原文は丙寅錄に、「人生劈頭有、一個事。立志是也」とある。(土屋竹雨)

五月十六日

井戸を掘るなら水の湧くまで掘れ

石川理紀之助

この語は石川理紀之助の言葉であるかどうか確實な記録はない。しかし彼の言葉らしい言葉ではある。要するに物事を中道で止めずに徹底的にやれといふのであらうが、その「水の湧くまで」といふところに、一つの意味がある。彼が明治三十六年(三三三)飯田川村下蛇川、水上學舎の生徒への講話の中で、「人の性は水の如し。水の始めて湧き出づるや清く澄みわたれども、次第に世の塵芥に觸れ、遂には濁水と變じて海に入るなり」と述べてゐる。井戸を掘るに際し、た

だ水が溜るだけではいけない。湧き水の如く鐵氣もなく、硫黄氣もないやうな純粹無雜な水の出るまで掘れといふことで、人間についていへば、「性もと善なれば、外部より取りつきたる心の汚れは、努力一つにて、何時にても拭ひ去られ、善となるを得べし」、故に大いに努力して純粹無雜になれとの意もあるのであらう。石川理紀之助(弘化二年(二二二)二月二十五日生、大正四年(三三三)九月八日歿)は羽後國秋田郡小泉村(今の秋田縣南秋田郡金足村)奈良周喜治の三男として生まれた。幼にして穎悟、早くから學問に志し、殊に政道を修めたが、それはそれらが動もすれば世を煮らしめ、産を敗る基なりとする俗説に憤つたからのものであり、彼自身その然らざることを證するため、終生農事を研究した。二十一歳石川氏に養はれ、傾ける家運を挽回したばかりでなく、一村の農事を復興した。一時縣の官吏となつたこともあるが、主として民間にあつて農家經濟を研究實踐した老農である。(野村兼太郎)

五月十七日

徳ある者は必ず言あり、言ある者は必ずしも徳あらず

論語——孔子(孔子)

孔子の語、憲問篇に見ゆ。この對句に「仁者必ず勇あり、勇者必ずしも仁有らず」とある。徳と仁と、言と勇と相對比して見るとき更に妙味を覺ゆる。

徳とは何ぞ。善行の身に得たるものである。坐作進退は端正、思想言論は雅醇、人と交つては恭敬禮讓、兵陣に臨ん

では勇戦善闘、これ徳の姿である。

徳がその人の内に積まれ培はれてくると必ず美しい花を開く。その英華が善言である。

ここに「言有り」といふは其人言へば必ず善言を出すの意で、口先ばかりの上手な言ひ廻しをするといふのではない。

次の「言ある者」の言はこれは必ずしも善言ではなく、寧ろ便佞口給をいふのである。元來言語は人の真情を表現す

べく作られた。聖人は、人と言とを合せて信といふ字を作られたのである。人智や文化の發達は必ずしも道德の向上と

平行しない。現在は「人を見たら泥棒と思へ」とか「人の話は裏を聞け」のなどといふ俗諺もある。

雄辯滔滔懸河の如く、又は情話喃喃糖蜜の如きもの或は愚夫愚婦をして評教隨喜せしむるかも知らぬが、これら必ず

しも仁者とは言へず、却つて利己を謀る小人の術策かも知れない。

大學に「富は屋を潤し、徳は身を潤す」といふ。内が充實すれば外に顯るるが、外面を以て内心を推すことは危険で

ある。

宣傳の世の中、この句は蓋し頂門の一箴か。(龜谷 温)

五月十八日

吉凶は人によりて口によらず

—— 徳 然 草 —— 記

好

徒然草九十一段に出づ。兼好の時代に流布してゐた一種の迷信に對する反駁であつて、全文を掲ぐれば次のとおりである。

「赤千日といふこと陰陽道には沙汰なきことなり。昔の人、これを忌まず。このころ何もの言ひ出でて、忌みはじめけるにか。『此の日あること末とほらず』といひて、其日ひたりしこと、爲たりしこと叶はず、得たりし物は失ひつ、企たりしこと成らずといふ。愚か也。吉日をえらびてなしたるわざの末とほらぬをかぞへてみむも又ひとしかるべし。そのゆゑは無常變易のさかひ、有と見るものも存せず、始あることも終なし。志はとげず望はたえず。人の心不定なり。物みな幻化也。何ごとかしばらくも住する。此の理をしらざる也。『吉日に悪をなすに必ず凶なり。悪日に善を行ふに必ず吉也』といへり。吉凶は人によりて日によらず」

人間の行爲の吉凶といふものは、必ずその人に基づくのであつて、吉凶の日に由るのではない。たとひ吉日でも悪を爲せば凶となる。また吉日に行つたことが末々まで確かであるか、それもわからぬことである。人間の心の不定は、決して日によつて安定へ向ふものではなく、日の吉凶を云々するのは愚だとの意。ここに興味ふかい點は、兼好が單に迷信を反駁してゐるのみならず、更に突き入つて彼の人間觀をあきらかにしてゐることである。變り易く常なきは人心である。人間の存在は極めて不安定なものにすぎない。この不安が、強ひて自己を安心させるために様々の迷信を求むるのである。兼好の謂ふ「人」の一語に、深く味到すべきであらう。(龜井勝一郎)

五月十九日 宮本武藏歿

我事に於て後悔せず

— 獨行道 — 宮本武藏

宮本武藏の『獨行道』(三月八日の項参照)のなかでも、特に異彩を放つてゐる一ヶ條である。武藏は同じ『獨行道』のなかで、「神佛を尊み神佛を頼まず」といひ、又「道に當つて死を厭はず」ともいつてゐる。これらは皆思想的に相關聯してゐると思ふ。我事に於て後悔せずといふのは、何でも自分のやつたことに、自信をもち、後悔はしないといふやうな放漫な樂天性を意味するものではなく、もつと沈痛な韻きがこの句のなかに籠つてゐるのを感じすべきである。

武藏が事を行ふや、苟もしない性格であることは、曩に述べた。彼の行ふことは先づ、彼の正義感に合致した行動のみであつた。且その事を行ふや一劃一投足も、彼にとつては鍛錬道の實踐であり、精緻なる思索と強靱なる行の集積であつた。だからしてそこには常に彼の最善が竭されてゐたのである。その行動の結果に就ては、始めから十分の見透しをもつてかかつてゐた。だから、事後に於て、後悔する餘地がないのである。この心境は、おのづから、「神佛を尊み神佛を頼まず」に通ずる。彼は神佛に縋つて萬一を僥倖しなかつたのである。同時に彼は「道に當つて死を厭はず」である。自分の行動に就て、死をさへ厭はないものが、事に就て、後悔のあるべき筈がない。彼の願つたことは、自己の信念に基き、その鍛錬

の結果を十分に發揮することであつた。自分の最善を盡くすためには、あらゆる苦心を拂ふが、その結果に就ては悠々自ら許し、居然として太虚のなかに遊ぶ心境こそ、達人のものである。この一條、噛みしめて味はふべきものと思ふ。猶『我事に於て』と訓むか『我事に於て』と訓むか二説あるが、前者をとる。(井上司朗)

五月二十日

仁者の心動きなきこと大山の如し、無欲なるが故によく静なり

— 集義和書 — 熊澤蕃山

仁者の心はどつしりとして動じない。名利を逐ふ心がないからである。仁者とは道を體得した人である。その心は利に動くことなく、名に動くことなく、色に動くことなく、味に動くことがない。だから静かである。小人は之れに反し、口にはいかに廉潔を説くも、心常に利欲にあり、勢を望んではこれに従ひ、利を見てはこれを逐ひ、一舉一動、盡く欲のために支配される。故に心は常に動搖してゐる。新論に、「林の性は静かである、動く所以のものは風が之れを搖かすからだ。水の性は清い、濁る所以のものは土が之れを濁すからだ。人の性は貞である、邪なる所以のものは欲が之れを眩すからだ」とある。至言として味はふべきである。

これは蕃山の集義和書卷四君子の條に見ゆる。蕃山名は伯鸞、字は了介、息遊軒と號した。中江藤樹に學び、王學の粹を究め、池田光政に仕へ大に治績を擧げた。後辭して居を京都に移したが、公卿の來つて教を乞ふもの多く、名聲

揚るに従ひ謗も亦漸く起り、一時吉野の山中に隠れ、後明石、郡山、古河と轉々した。松平日向守の尊信を受け、その轉封に随移したのである。曾て封事を幕府に上り、政務の整革を請うたのが忌諱に觸れ、禁錮四年の久しきに及び元祿四年(二五二)七月廿七日遂に病歿した。年七十三。(土屋竹雨)

五月二十一日 日本書紀撰上(養老四年)

神の神庫も樹梯のままに

—日本書紀—

垂仁天皇の御代に由來ある諺。五十瓊敷命老いて、神の事へに堪へずなられた時、其妹大中姫命に職を譲らうとせられた。姫辭して曰く、吾は手弱女なり。何とて、天神庫に登らむやと答へられたと言ふ。天神庫は、神寶を納め齋いた高庫である。寶を掌る人は、梯によつて、昇り降りせねばならなかつた。女性の御身には、其勞に堪へぬことを言はれたのである。諺は、此故事によつて言ひはじめられた、と日本書紀 垂仁天皇紀に見えてゐる。如何に高き神庫であつても、樹梯にあらば、昇降は出來ると言ふのである。その意を擴げて、困難なことも、よるべきものだにあらば、目的は貫徹することが出來ると言ふ風に、解して居たのであらう。又如何ほど高いところへも、手段がありさへすれば、行き近づくことが出來よう、と言ふ風にも考へられて居たであらう。此が、諺の自在性である。(折口信夫)

五月二十二日 青少年學徒に勅語を賜ふ(昭和十四年)

皇國學は我が大和魂を磨くにあり

—宇麻斯美道— 詔 田 令 世

吉田令世(寛政三年(二五二)生、弘化元年(二五四)歿)の宇麻斯美道にある句である、令世は寛政三年に水戸で生れ、弘化元年に五十四歳で歿した。水戸藩士吉田尚典の子で藤田幽谷に學んでその娘を妻とした。文化十年(二五七)彰考館に入り、天保十二年(二六一)には彰考館助教となつた。徳川齊昭の公子であつた頃、侍讀として薫育に功あり、後に藤田東湖とともに藩政にも參與した。令世は學問の要は風俗人情に通じ、國體を知り、漢土周孔の教を以て、皇道の羽翼とするにありとした。「聲文私言」や「歴代和歌勅撰考」その他の著があるが、本句のある「宇麻斯美道」は書名によつても分る如く皇道をといて居るが、この句はまことに皇國學の本質をよく表して居る。

皇國學は皇國の學びであつて皇學、國學にも通ずる。皇國學が 天照大御神の道を明らむる學問であり、大和魂をかたむる所に、學の根柢があるとしたのは本居宣長の初山踏にすでに説く所であつて、國學の本質を示して居る。この點は國學も水戸の學問も同様である。ただ儒學の扱方もしくは攝取の態度に於て多少異なるのであるが、令世は國學と水戸學とを一身に備へて居るとも言へる。大和魂を磨くといふのは日本精神を確立することに外ならない。ここに學問の根柢をおいた所に令世のすぐれた學問態度を見ることが出来る。

青少年學徒に勅語を賜はつた大御心も、青少年が負荷の大任を有することを仰せられ、國體の本義に徹し大和魂を磨くべきことを御示しあそばされたと拜察する。今日の臣民の道も大和魂を磨きかため、「大君のへにこそ死なぬ」の心を以て盡忠の誠を捧げるにある。この句を繰返し味ふべきである。(久松潜一)

五月二十三日 伊達政宗歿

儉約の仕方は不自由なるを忍にあり

——伊達政宗壁書—— 伊達政宗

伊達政宗については一月十一日の條に記して置いた。この語も伊達政宗壁書に

「氣長く心穩にして、萬に儉約を用て金を備ふべし、儉約の仕方は不自由なるを忍にあり、此世の客に來たと思へば何の苦もなし」云々

といふ形で見えてゐる。なるほど不自由を忍ばなくては儉約はできる筈がない。しかし不自由を忍んで金を溜むるのは、富貴をねがひ、後生を安樂にするためではない。いざ鎌倉といふ時の備へのためである。今日の耐乏の生活も、貯蓄の精神も同じことである。聚樂城で諸大名が居並んでゐる所へ、伊達政宗が懷中から金銭を取出して人々に見せた。當時金銭の始つた頃で、珍らしかつたのでみなもてはやした。直江兼續にも之を見られよと渡すと、扇の上に置いて、羽子を突くやうに打返し／＼見るので、政宗が遠慮なく手にとつて御覽なさいといふと、兼續は、謙信の時から先陣の

下知して、應を取つて來た手に、かういふ賤しき物を執れば汚るるからといつて、政宗の方へ投げ戻したので、政宗大いに赤面したといふことが名将言行録に見えてゐる。傲岸な獨眼龍を參らせた面白い話であるが、しかし金銭は軍陣には必要缺くべからざるものだ、それを輕蔑するとは何事ぞと、直江を非難した文章を讀んだ事がある。この壁書の意味からいつても、政宗の方が人物は大きい。(菊池 寛)

五月二十四日

妄りに人の師となるべからず、又妄りに人を師とすべからず

——講孟餘話—— 吉田松陰

松陰は二十六歳の初夏より野山嶽の同囚のために孟子を講じ、その餘話に於て尊皇攘夷の精神を強調したが、その態度はみづから師を以て任せず、同囚と共に手とりあつて聖賢の教をたづね、おのがじしの心の不正を正し合ひつつ、皇國臣民の道に徹しようとした。この句は、このときの餘話の一節で、眞の師道の興隆によつて、魂の教育を施し、そこに新日本の黎明を將來せしめようとする、彼の指導者精神を端的に示してゐる。「眞に教ふべきことありて師となり、眞に學ぶべきことありて師とすべし」であり、「且つ道は古聖賢大抵言ひ盡くせり、行ひ盡くせり」であるにも拘らず、徒らに古人の書を口眞似するだけで嚴然と師の地位に自任する者が多いが、考へて見れば、元來師弟共に聖賢の門人である。そこで同じ門人でありながら、妄りに師と云ひ弟子と云ふは、古人先哲に對して憚り多いことであるとして、

松陰は門下生に對しても、同志と呼び諸友と呼んで、血肉的連接をはかつた。

「僕友義甚だ厚きも他に非ず、國の爲に一命を抛ちて呉れる人共なれば、氣體血肉皆吾れと連接するを以てなり」といふ言葉は、松陰のかかる態度をよく示してゐる。更に「親鸞は弟子一人もたずさふらふ」（歎異抄）といふ言葉と思ひ合せて、この銘句を味ひ、そして二人の業績をかへりみると、今日人の師たり指導者たる者にとつて、この上なき鑑戒の語となるであらう。（岡 不可止）

五月二十五日 湊川の戦（延元元年）

七生まで唯同じ人間に生れて、朝敵を滅さん

——太平記—— 楠木正季

太平記卷十六、「正成兄弟討死の事」の條下に出てゐる有名な言葉である。時は 後醍醐天皇の延元元年（一九六）五月二十五日、楠木正成、正季の兄弟は、大命を奉じて湊川に逆賊足利高氏、直義の大軍を迎へ撃ち、力戦奮闘、刀折れ矢盡きて、壯烈な戦死を遂げた。太平記には、

「……三時が間に十六度まで闘ひけるに、其勢次第々に滅びて、後はわづかに七十三騎にぞ成りにける。この勢にても打破つて落ちば落つべかりけるを、楠、京を出でしより、世の中の事、今はこれまでと思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて、云々、湊川の北に當つて、在家の一むらありける中へ走り入つて、腹を切らんだめに、

鎧を脱いでその身を見るに、斬創十一箇所までぞ負ひたりける。云々、正成座上に居つ、舍弟の正季に向つて、云々、九界の間に何か御邊の願なると問ひければ、正季からくと打笑ひて、七生まで、唯同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き悪念なれども、我も斯様に思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、この本懐を達せんと契つて、兄弟ともに刺違へて、同じ枕に伏しにけりとある。まことに七生滅賊の一句は、みたまわれたるものの本懐であつて、楠氏が勤皇の赤心は、この一句に極まつてゐるといつてよい。今日、楠公祭當日を迎へて、湊川への道を思ふこと切なるものがある所以である。（淺野 晃）

五月二十六日 木戸孝允歿

大道行くべし、又何ぞ妨げん

——木戸孝允文書—— 木戸孝允

木戸孝允（天保四年（西曆一八三三）六月二十六日生、明治十年（西曆一八七七）五月二十六日歿）は、元と萩藩醫和田昌景（正直）の次男、出でて藩士桂氏を嗣ぎ、通稱を小五郎といふ。慶應元年（西曆一八五五）藩命によつて姓を木戸と改め、通稱を貫治、更に準一郎と改む。松菊、木圭等の號あり。少より吉田松陰の兵學門下となり、尊皇攘夷運動に挺身し、遂に幕末防長回天の業を主導して維新の元勳となる。世に西郷、大久保と共に維新の三傑と稱せられ、明治天皇の御信任が殊に篤かつた。贈従一位。

この句は、「對江山」(木戸孝文書卷二十二所收)といふ詩中に出で、明治二年(西元)八月下旬、箱根に疾を養つてゐた折、蘆の湯の山頂に登つて鎌倉、江ノ島の勝景を眼下に賞したときの作である。孝尤この時の箱根行は、宿痼の療養を名としたが、實は版籍奉還後の施設に關し、廟議が道の如くならず、時事また憂ふべきものがあつたから、暫く功名營利の徒の蝟集する東京の俗塵を避けようとしたのである。

原詩は長いのでここには割愛するが、千里江山を眼中に日々相對する喜びを述べ、「天地妙美人不知、人不知處却妙美」とうたひ、「大道可行又何妨」と道破してゐる。そして一時の名利特むに足らず、世情の恰も反古紙のごときを慨して、我が信する大道を濶歩するの意氣を江山に托したのである。

尙ほ孝尤の文久三年(西元)の「書感」と題する詩中にも、「大道獨行す何ぞ人に關らん」といふ類似の句がある。共に左顧右眄することなく毅然として皇國臣民の大道を獨行し、毀譽褒貶や利害得失にかかはらなかつた彼の生涯を貫ぬく信念の句といふべきである。今やわが國はこのやうな大信念と吐の出來た人物を必要としてゐる。世故に長けた小才の利く人間は、雄大な大東亞建設に無用である。その意味で、この句は一層味ひ深いものがある。阿 不可止)

五月二十七日 海軍記念日

皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ

東郷平八郎

時これ明治三十八年(西元)五月二十七日、既にわが聯合艦隊全軍に戰鬪開始令せられ、猶も敵の動靜を窺ふ折しも、秋山參謀近寄りて曰く、「御命令の信號整へり、直ちに掲揚すべきや」と。東郷司令長官頷きて承諾の意を示すや、午後一時五十分、彩旗艦上に翻つた。すなはち本日の銘たる千載不朽の訓言である。

この信號を仰ぐや、全艦隊の將士感極りて隻語なく、一念ただ忠誠に燃えて必らず敵を殲滅せんばやまずと誓つた。

此の一戦——まことに此の一戦である。盡忠報國の赤心、千磨必死の訓練、必勝の信念、これら全てが、此の一戦に顯現したのである。東郷元帥は、秋山參謀が「閣下願くは御自重ありて司令塔内より指揮されたし」と、面を正しうして請ふや、「予は齡耳順に近く、老軀固より惜むに足らず、予等春秋に富むの士こそ、自愛して今後益々君國の爲めに盡すの要あれば、宜しく塔内にありて職を執れ」と。永田副官重ねて請ひしも肯かず、加藤參謀長三度請へども愈々肯かず、反つて幕僚等の身を氣遣ひて已まなかつたため、參謀長以下その覺悟と厚情とに歎伏し、つひに黙止するにいたりしといふ。(小笠原長生)

身の楽しむ時謹しむべし、心の驕る時恣にすべからず

—會我物語—

この句は、流布本會我物語卷六の第一、「十郎、大磯へ行き、立聞の事」の條に見えて居る。即ち、それは、十郎が、愈々、明日富士の裾野に打ち出ようとして、大磯の虎に暇乞に立寄つた時である。暫く、駒を控へて、家の中の體を窺つて居ると、他の遊君達と物語りをして居る虎が「唯今上る人々は、いづくの國の誰々ぞ」と言へば、「先陣は横山藤馬丞」と答へる聲も聞えた。その答に對して虎は

まことや、孔子の言葉に、耳の楽しむ時には謹しむべし。心の驕る時には恣にすべからざれとは申せども、あはれ、げに、この殿原の馬、鞍、鎧、腹巻を、わらはにくれよかし。

と口ずさんだ。他の女達はそれを聞いて「身に合はぬ願物、何の御用にや」と言へば、虎は「祐成に參らせ、思ふ事を」とばかり言つて、涙を浮べた。他の遊君どもは、「不思議やな、思ふ事は何ならん」と怪しみながらも、強ひて問ふべきでもないで、その儘に過ぎた。後に仇を討つてから、さてこそと思ひ合はせたのである。

ここに「孔子の言葉に……申せども」とあるが、異本には、又、次ぎの如くになつて居るものもある。

一、まことや、孔子の言葉とかやに「目のこもる所、經べからず。身の楽しむ所に住すべからず。口の楽しむ所に、從ふべからず。心の欲する所に、恣にすべからず」

二、まことや、孔子の言葉とかや、「目の好む所に、ふすべからず。耳の楽しむ所に、謹しむべからず。口の楽しむ所に、從ふべからず。心の欲する所に、ほしきまゝにすべからず」

三、まことや、孔子の言葉とかやに、耳の楽しむ所に、謹しむべからず。心の驕る所、ほしいまゝならざれ。この外にも、若干の相違を持つ異本がある。何れにせよ、孔子の言葉とある様に、出典が、漢文に在るらしいから、「心の驕る」に對しては「身の楽しむ」と、「身」と「心」の對でなくてはならぬ所である。然るに、轉寫の結果「み」が「み」となり「耳」と改まつたのであらうが、「耳」では意味をなさない。又「謹しむべからず」とあるのも誤寫によるものらしい。因つて、原文の「耳」を「身」と改めた。

さて、會我物語には、孔子の言葉とあるが、この句は、孔子の言葉には見當らない。孔子の言葉の諸書に散見するものを集めた孔子集語といふがある。それには薛據のもの（そんごせいじゆん）と孫星衍のものとの二種あるけれども、その何れの孔子集語にすらも出て居ない。故に、會我物語の異本の作者が、何かの思ひ違ひで、「孔子の言葉とかやに」の様に、漠然と記したのであらうが、それを流布本には、「孔子の言葉に」と、明確に記してしまつたものと思はる。かかる意味の言葉を若し儒學の文獻に求めたならば、恐らく禮記の曲禮上篇なる、次ぎの言葉などが、これに類するものであらうか。

敖り（たう）は長ず可からず、欲は從ふ可からず、志は満たす可からず、楽しみは極む可からず。

但し、異本に從つて眼、身、口、心（しん）などを掲げた點からすれば、六根の障害に關する注意を述べたもので、佛典に、その出典を有するかの様にも思はるが、明らかでない。或は、異本に據ると、身、口、意（い）を含めたとも見られよう。身、口、意は、佛敎にも三業と稱して、罪障の根源をなす所になつて居る。然し、この本文は、それと恐らく關係はないも

のと思ふ。

この句全體の意味は、身の安逸なる時は謹まねばならぬ。安逸に慣れると懦弱に流れ遂には身を破滅に導く。又心の驕る時、即ち驕慢に向つた時は、たとひ、心の儘なる行爲が可能であつても、兎角、放縱に流れて事を失敗する。人間の弱點は安逸に流れる事と驕慢に走る點に在る。書經の大禹謨の篇に「滿は損を招け、謙は益を受く」ともある。事は順調の時に却つて注意しなければならぬ。心の緩みにつけ込む病源は、目に見えない處に澤山あるといふ様な事となるのである。つまり、「勝つて兎の緒を締めよ」にも通ふ所がある。(山岸徳平)

五月二十九日 アッツ島玉碎(昭和十八年)

護國の神靈として、悠久の大義に生く、快なるかな

遺書——山崎保代

昭和十八年(三〇三)五月二十九日は北邊の孤島アッツ島を守備した山崎部隊の精銳二千數百名が、飛行機及艦艇に護衛せられた絶對優勢の特殊裝備の敵部隊を邀撃し、皇軍の神體を發揮して玉碎せられた日である。

山崎大佐(明治二十四年(三三二)生、昭和十八年(三〇三)戦死)の遺書には

部隊に長として、遠く不毛に入り、骨を北海の戦野に埋め、米英撃滅の礎石となる。眞に本懐なり。況や護國の神靈として悠久の大義に生く快なる哉

とある。

山崎部隊が斯くも壯烈なる玉碎を遂げ、斯くも、永遠にして偉大なる魂の上の戦果を收められたのは一に 大元帥陛下の大御稜威の賜であり、かつ山崎大佐を核心として勅諭奉行に生死を超越して邁進された結果である。

勅諭の中には「只々一途に己が本分の忠節を守り、義は山嶽より重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ。其操を破りて、不覺を取り、汚名を受くるなかれ」とお示しになつてゐる。

又戦陣に於て、この勅諭を仰ぎて、之が服行の完璧を期せむが爲め、具體的行動の憑據を示された戦陣訓死生觀の中に「死生を貫くものは崇高なる獻身奉公の精神なり。生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。身心一切の力を盡くし、従容として悠久の大義に生くことを悦びとすべし」とある。

山崎大佐は其の遺書にこの言を爲し、然も之を實行したものであつて、洵に軍神として景仰致す所以である。

この遺書は實に楠公の「七生報國」の最後の言葉と通ずる。楠公の精神が相傳相繼して軍神山崎部隊に及びそして又永遠に存在することを確信させるものである。まことに日本外史に頼山陽が論贊した如く「その大節巍然として山河と並び有し、以て世道人心を萬古の下に維持するに足る」のである。日本の國家は一つの堅固なる生命體である。如何にしても崩れぬ所の生命體である。永遠にして悠久なる生命體である。であるから、國家の爲めに死ぬるのは永遠の生命に生くことである。これは日本獨得の哲理であり、日本人獨得の死生觀なのである。天壤無窮の皇運、萬世不易の神國でなければ決してこの哲理、この死生觀は成立しない。易姓革命を繰返す外國に於ては斷じて當嵌らぬものである。又之れあるが故に神國日本は萬代不滅とも申すことが出来るのである。

アッツ島に駐屯せる二千數百名の皇軍、皇民(即ち幾多の非戦闘員も含めて)は、部隊長山崎大佐の忠節を俱に共に